

◇簿記タイプライティング速記の學校

- 大原簿記學校 東京市神田區美土代町二丁目一
- 村田簿記學校 東京市神田區中猿樂町一七
- 村田速算學校 前校に同じ
- 東京主計學校 東京市牛込區市ヶ谷河田町一七
- 東京高等主計學校 前校に同じ
- 明治簿記學校 東京市神田區錦町一丁目二
- 日本簿記專修學校 東京市芝區白金三光町
- 東京基督教青年會タイピスト養成所 東京市神田區美土代町三丁目三
- 邦文モノタイプライピスト養成所 東京市芝區三田豐岡町四
- 毛利式速記學校 東京府豊多摩郡澁橋町柏木九三一

◇外國語の學校

- 東京外國語學校 東京市麴町區竹平町一
- 國民英學會 東京市神田區錦町三丁目一九
- 正則英語學校 東京市神田區錦町三丁目二
- 第一外國語學校 東京市本郷區金助町
- 日進英語學校 東京市神田區三崎町三丁目一
- 普及英語學校 東京市神田區今小路二丁目一五
- 研數學館英語部 東京市神田區中猿樂町一六

- 東京基督教青年會英語學校 東京市神田區美土代町三ノ三
- 三崎英語學校 東京市神田區三崎町一丁目四
- 三田英語學校 東京市芝區三田四國町二
- 福音英語學校 東京市京橋區西紺屋町二〇
- 同仁英語學校 東京市麴町區飯田町四丁目五
- 神田英學校 東京市神田區美土代町二ノ一
- 四谷英語學校 東京市四谷區南寺町四八
- イースト英語學校 東京府豊多摩郡大久保百人町二七三
- 獨乙語專修學校 東京市神田區西小川町一丁目二
- 獨乙語學校 東京市神田區表神保町一〇
- アテネ・フランセ 東京市神田區三崎町三丁目九
- 佛蘭西語專修學校 東京市麴町區飯田町三丁目曉星中學校内

◇通信交通の學校

- 東京高等商船學校 東京市深川區越中島
- 逓信官吏練習所 東京市芝公園
- 東京逓信局逓信講習所 東京市芝區西久保巴町四六
- 東京鐵道局教習所 東京府北豐島郡西巢鴨町池袋
- 岩倉鐵道學校 東京市下谷區上車坂町
- 日本鐵道學校 東京府豊多摩郡澁谷町常盤松、東京農業大學内
- 東京鐵道學校 東京市麴町區一

逓信省 航空機操縦生養成所 東京市麴町區大手町、逓信省航空局航空局 受付

同 機關生操縦生養成所 前校に同じ

- 日本飛行學校 東京府荏原郡蒲田町大字蒲田新宿一〇
- 帝國自動車學校 東京府荏原郡駒澤町下馬引四六九
- 東京自動車學校 東京府北多摩郡田無町驛前
- 日本自動車學校 東京府荏原郡蒲田町大字蒲田新宿一〇
- 電信協 無線電信講習所 東京府荏原郡目黒町下目黒五

◇豫備校

- 早稻田高等豫備校 東京市牛込區馬場下町二四
- 專修大學附屬高等豫備校 東京市神田區今小路二丁目八
- 大正高等豫備校 東京市神田區淡路町一丁目一
- 大日本國民中學會高等豫備校 東京市神田區駿河臺袋町一六
- 駿河臺高等豫備學校 東京市神田區駿河臺
- 日本高等豫備校 東京市神田區三崎町三丁目一
- 明治高等豫備校 東京市神田區駿河臺、明治大學内
- 正則豫備校 東京市神田區錦町三丁目
- 開成豫備學校 東京市神田區駿河臺鈴木町
- 豊山中等豫備學校 東京市小石川區大塚坂下町
- 日土講習會 神田區一ツ橋通り

◇雜

- 國語傳習所 東京市神田區三崎町一丁目三
- 善隣書院 東京市麴町區紀尾井町九
- 研數學館 東京市神田區中猿樂町一六
- 開進數理學校 東京市神田區中猿樂町三
- 吳數學院 東京市神田區錦町三丁目八
- 皇典講究所 東京府豊多摩郡澁谷町下澁谷氷川裏
- 日本社會教化學院 東京市神田區西小川町二丁目一
- 弘道會 東京府北豐島郡上板橋村字小竹
- 測候技術官養成所 東京市麴町區元衛町中央氣象臺内
- 圖書館講習所 東京市下谷區上野公園、帝國圖書館内



(氏起青原木細トツカ)

特色

前述の如く本大學はその組織に於て實に廣汎で純然たる綜合大學の形態を供へてゐるのは他校に見られぬ現象である。その發展擴張が震災後實に急速である爲め、世には往々誤解してゐる人もある様であるが、本大學はその計理よろしきを得畫間部、夜間部の兩部を有し、殊に夜間部は苦學生に通學便なる爲めに、次第に數を増し、新校舎の設備の完全と新進教授の學說に笈を負いて來るもの年と共に加はり、普通部(附屬中等學校)の發展はやがて大學各科の發展を伴ひ、大學發展は母校出身の新進教授の増加を見、茲に櫻門學園は殆んど完成したと稱し得るのである。

殊に法律科に於ては高等文官試験の合格者は他校中斷然頭角を現はし、歴史の古きと先輩の豊富なると相俟つて學園隨一の存在である。又文學部は輓近精神科學研究の發達に従ひ、益々學徒の數を加へ、海外に學びて歸るものもあり將來の日本大學の目新らしき存在となる事も豫想せらるゝのである。

經濟學部、商學部もその先輩が實業界、會社方面に進出し、後進の道を開いてゐるのである。又最近日本大學經濟學研究所の設立を見、將來の經濟學界に於て注目的となるや明かなる事實である。

師範部の如きは夜間に僅か三ヶ年の修業以て中等學校教員の無試験檢定を得らるゝ得點ある爲め、講堂立錫の要地なきまである。

醫科、齒科は設備の完備せる事、附屬病院の十分なる事を以て有爲にして、諸教授の顔ぶれに依りても一見して解る如く、實に堂々たる學園である。

豫科も文科は三崎町に、理科は駿河臺に分れて、明るき自由なる空氣の中にカレヂ、ライフをエンヂョイしてゐるので、文科は晝間部、夜間部の二部に分れ全生徒數千八百餘名を算し、一致團結、將來の榮えある學徒の巢ごもりの狀を呈してゐるのである。

斯くて最高學府たる實質を具備して、日夜學の研鑽に餘念なき一方最近運動部に進出著しきものあり、野球部の如きは六大學リーグに参加せんとする勢にて新進選手の養成に努めつゝあるのである。その他ラグビー、ピンボン、馬術、辯論、弓道、ボート、角力部等皆大學リーグ中に重きをなしてゐるのである。今に全國大學中にその覇を稱へる事は都下一般學生の期待である。

斯くて學術に運動に、近來著しき進出を試みつゝある櫻門日本大學は將來如何に學界の爲め貢獻し、如何に全國大學に接するか實に興味ぬる問題である。

(日本大學學監禿徹氏の厚意にて手記さる)

日本醫科大學

我が日本醫科大學はよく日本大學の醫學部と間違へられる。日本醫科大學と云ふ單科醫科大學で、日本大學の様に賑かな神田にあるのではない。本郷區千駄木町といふとんでもなく靜かな處にある。現在の學長は外科の權威として聞え高い鹽田廣重博士である。鹽田博士は本校には御縁の深い人で、本校の前身である日本醫學校の時代から古く講座を持たれ、本學の同窓會には永く會長として全國の出身者に淺からぬ關係のある人である。云はゞ伯父さんと云つた間柄の學長である。さればこそ我が大學を思はれる事一方でなく、内は一意學術研究外は發展に向つて努力せられる事一日として寧日なき有様である。抑々日本醫科大學は故中原徳太郎博士の絶大な努力に依つて日本醫學專門學校から昇格したもので、その前その間の我が校の發展と云ふものは外的は勿論の事、内的にも實に眼覺しい進展であり、維新の大業にも比すべきものであつたのである。一將功成萬骨枯。で實に多くの人々に依つて此の維新はなされたのであるが、大まかに云ふと政治家中原徳太郎先生が日本醫科大學の提案を通過させ、一世の外科醫鹽田先生がピストルの創穴(別に打たれはしないが)を治療したと云ふ形である。

本大學の特色と云つたら兎に角教授に刀圭界の權威が並ん

でゐる事である。一々書いた所で其までの事であるから書かないが、校舎のあまり堂々としてゐない事と金のない事も亦特色であるから、少し儲け口のある實益的な事だけを書く、(各教室及び各科の誇等は學門的であるから省略するが必要な方は本校學友會誌第十五號を讀みたい。)耳鼻科が西端博士の下に蓄膿症に、日本廣しと雖も本科獨特のバンゼクトミと云つて安々と副鼻腔全部を開く療法をしてゐると云ふ事と、寄生蟲にとつゝかれたら斯界の權威我が赤木内科を訪れ給へと云ふ事である。本學の病院は飯田町に第一醫院、千駄木町の學校に續いて第二醫院がある。醫院と云つても實際は病院ですから來て見て下さい。それに第一醫院は今新時代の知識と設備とを擁して素晴らしい新築を近く完成しようとしてゐる。何れも親切で平民的で各科の部長親しく一様に手を取られる事は此の種の病院に一寸類例がないので厚い世評がある。

何しろ大學に昇格したのが大正十五年二月で昭和六年三月始めて醫學士が醫界に出陣するのだから、さう大きな話もないが、この學校の抑々の起りと云ふものは遠く所謂濟生學舎に始つてゐるだけに、我が日本全國に於ける仁術の功績は實に絶大なるものがある學校である。さうして前述した通りの歴史は此處に學ぶ者によく感奮一番の氣概を與へ、目を追つて躍進する學術の内容と共に、將來は更に量質共に括目すべ

き斯界への功獻がなされるであらう。

(宮本健記)

法政大學 法政偶感

法政ボーイとしての五ヶ年の生活、それは軽いステップであり若さに恵まれた明さだ、クラウンHのモール章の豫科生、スマートな學部生、土手公園のローンの小路を急ぐ法政ボーイの足どり、ほがらかな開講ベルの音、静まり返つた苦勞時間、屋敷町だけに都會の生む狂騒曲から救はれて、若い教授さんその熱辯に一層の注意を拂ふ、休講、それは何處の學生もが感ずる有難さ？ だ、共鳴した二三のボーイ連が界限の散歩は靖國神社の後苑ベンチへ、坂(法政ボーイの通語、神樂坂のこと)の明治屋へコーヒー一杯の突進の内は未だしも可愛らしい。

恵まれたり哉、此の屋敷町、ガールスクール五ツ六ツ、松室學長心配御無用、法政ボーイは自重してゐる、ナンテ云つた所で三輪田サーンと呼ぼうものなら第二講舎とは目と鼻との間柄だハイイなんて音楽室からのぞくモダン嬢なきにしも非ずだ、下から老眼には映つまいて……

法政!! そは半世紀の歴史の所有者だ、前身? と問はれ

「ば和佛法律學校と答へよう、我が民法界の元祖、梅謙次郎とボアソナード兩氏は又我法政の生の母だ。フランス法を通じて生れた丈けにフランスの色彩が濃厚だ。それ丈け軽い氣風で長閑である。熱? 力? それに乏しい様な氣がする、然し「法政スピルのラ、ラ、ラ……を口にする法政ボーイ達よ、我等は若さに恵まれてゐる、六年のカレッツライフ、それは六法全書、近眼神經衰弱のフラッシュバックでもなければ何でも無い、只明るいライフそのものだ、明さそれが現代の大なる魅力であるなら法政こそ確かに明さへの到着力を多分に有するものだ、明さ若さ!!」なんと云ふ快い響いたらう、法政を包む空氣は五月の風の様な明さと若さだ、熱それは望ましいけれども亦餘りに酷熱の如く焼き盡される時は若さの蔭は失せるだらう、矢張、お!! 我が法政よ恵まれて明くあれ然らば汝は幸福だ法政よ汝は常にダークホースと呼ばれて来た、それを我等は悲しくも亦嬉しくも感じてゐたよ、それが今はどうなんだ、凡てがストラックアウトだヒットだ王座が近づいた、否法政が進んだのだ。愉快!! 野球萬歳だ、進め進め王座へ覇者へ、ダークホース法政、そは野球のみへ與へられた名稱ではない、法政そのものがダークホースなんだ陸に海に空に延び上らんとする力が黒馬法政だ。スポーツ法政お!! シャイニング法政だ光だ光明だ。輝く行手に何がある求めよ然らば與へられん。希望の絲を廻轉しろ。我等は捨

てられてはゐない。浮び上つた熱、力、そは我等が恵まれた若さと明さと相待つて……

法政その名ぞ我等が母校と軽いステップは思潮に連れて我等が求むる明日の道へ。

若さ、明さ、熱、力、我等を包む五月の風は天女の如く舞ふだらう、お!! 恵まれてあれ法政よ。

位置、麴町區富士見町四丁目。

目的、大學令に依り法律、政治、文學、哲學、經濟及商業に關する學術の理論及應用。人格の涵養。

構成、法文學部(法律學科、政治學科、文學科、哲學科)

經濟學部(經濟學科、商業學科)

専門部(法制經濟科、高等師範科)

豫科(第一部一三年制、第二部一二年制)

大學院、二年以上。

學費、入學料五圓、入學試験料五圓、授業料豫科年金百圓、學部金百二十圓、學長、法學博士松葉致。

(吉田利貞記)

東洋大學

東洋大學沿革

本大學は帝國大學文科大學以外に哲學諸科を教授する所な

きを不便として特に重きを東洋哲學に置き國民思想に關する根本的研究を爲す所なきを慨して東洋の神儒佛三道の哲學を講授し併せて西洋哲學を兼修せしむる目的を以明治二十年九月文學博士井上圓了氏が始めて、東京本郷湯島に關説したるものにして、其の名を哲學館と稱し井上圓了氏自ら其の館主となれり、然れども漸次校舎の狹隘を感じたると且つは設備の完全を期するが爲明治二十三年本郷駒込蓬萊町に新校舎及び寄宿舎を建設し、其の地に移轉したり。明治二十九年十二月火災の爲校舎及寄宿舎の全部を焼失に歸したるを以て小石川原町に土地を購買して、こゝに更に校舎を新築し明治三十年七月假教場よりこゝに移轉する事を得たり、之現今白山上雞聲臺上に聳ゆる校舎の所在地なり。從來の學級は總て三年とし、一年に於て一般東西哲學を教授し二年に於て科學歴史政治經濟の參考科を加へ、三年にて更に深く東西哲學科を教授する方法によれり、然るに明治二十七年以來は教育學部宗教學部を置く事とし、教育學部に於ては専ら教育者を養成し、宗教學部に於ては主として宗教家を養成するの目的を明にしたりしが、明治三十一年より又教育學部及び哲學部と改稱し、明治三十七年には文部大臣より卒業生に無試験檢定中等教員免許狀下附の許可を受くるや教育學部を教育部として第一、第二科に分ち第一科に於ては倫理及び教育に關する諸科を主として第二科に於ては國語及び漢文を主として教授する事と

し、哲學部を置く事は舊に依れり、明明三十七年四月新に大學部を關説し、哲學館大學と改稱し館主井上圓了氏を學長とし大學部一科にては深く哲學宗教を專攻せしめ、第二科には深く國語漢文を專攻せしむる事とせり。

大正十年に専門學部に文化學科と社會事業科とを新設し、從來の學科にも大改正を施したり、大正十四年四月更に専門部倫理學東洋文學科の夜間部を開設し、大正十五年四月には學校教練を加へ、昭和二年四月より大學部印度哲學倫理學部に豫科を附設せり、明治三十年特に思召を持つて宮内省より御下賜金拜受の光榮に浴したりしかば、館主井上圓了氏は之を記念せんが爲に新に中學校を設置し此の恩典に報ゆるの企圖を爲し、明治三十二年に其の目的を完成し、授業開始の緒に就くを得たり、之即ち京北中學校なり、其の後更に京北實業學校及び京北幼稚園を新設せり、之東洋大學財團の經營する所のものなり。

昭和三年三月以後専門部倫理學東洋文學科夜間部に無試験檢定中等教員免許狀下附の許可を受く、昭和三年三月大學令に依る大學設立認可を得、文學部を創立し、從來の大學部及び専門學部を一括して専門部と改稱し、中島德藏氏學長事務取扱に就任し、同年四月豫科第一、二學年の授業を開始し、昭和四年九月中島德藏氏學長に就任せり。
學部に左の學科を設く。

(一)哲學科、(二)佛教科、(三)國文科、(四)支那哲學支那文學科、専門部に左の學科を置く。

(一)倫理學東洋文學科甲第一部。

(二)倫理學東洋文學科乙第一部。

(三)倫理學東洋文學科甲第二部 夜間部。

(四)倫理學東洋文學科乙第二部

(五)倫理學教育學部。

(六)社會教育社會事業科。

(秋山光其記)

東京帝國大學

赤門だより

「本郷も兼康までは江戸のうち」と云はれて、大江戸八百八町の一部にも加へられなかつた本郷通も、星霜移り變り何十年今や眞にフレッシュにしてアカデミックな大學街と變つた。そして毎年この通りにある銀杏並樹に青芽のふいて來る頃ともなれば新しく若人を迎へ活氣ある新しい年をこゝに始める。過ぐる大正十二年の猛火の洗禮をうけた本學も「バラツクの講義」は最早昔語りとなり、今や校内到る所三四層の大建築が堂々と並び面目を一新した。上野の山から西を眺めると歐洲中世の古城の如く巍然として聳える大高樓を見るだ

らう。之が米國のロックフェラー氏の寄贈にかゝる東洋第一の大圖書館である。建築費四百萬圓、現在の藏書約七十五萬冊といふ。之と相對して中空に屹立するチョコレート色の塔が安田講堂である。安田善次郎翁百萬圓の寄附の賜物である。

今本郷には法、文、理、工、經、醫の六學部があり、目下駒場にある農學部が移轉の曉には廣袤十八萬坪の上に文字通りの綜合大學を形成する。此の都塵を離れた自由な天地へ毎朝八時になると正門、赤門鐵門裏門及病院の門の入口から學生が這入る。此の五つの入口を持つ大學は幾多の煉瓦造のネオゴシック風の教室と病院と種々建築物から成り立つてゐる。而して此の七學部の教授は小野塚總長を初めとして總計五百餘人、學生總數は八千餘人といふ龐大さである。その中岡山縣出身者は二百八十七人である。即ち全國府縣中第八番目に位する。岡山縣からは今迄に著名な學者が多く輩出したが、本學に關するだけでも元大學總長菊地大麓男爵、鳩山和夫博士を初めとして枚舉に暇がない。現在は生理學の永井清博士、衛生學の石原房雄博士、西洋史の齋藤清太郎教授、哲學史の出隆教授、心理學の千輪浩助教授、經濟學消費組合の研究者本位田祥男教授、化學の片山正夫博士、造園學の田村剛博士、學生監主事の小川義章氏などが居られる。
東大は誇るべき三つの別荘を持つてゐる。先づ第一に學ぐ

べきは伊豆の戸田(ヘタと讀む)にある水泳部の寮である。

戸田は安政二年十一月露國艦隊司令官ブーチャチンの率ひた軍艦ヂャナ號が下田で遭難し回航中沈没したので、遂に滯留して船を建造したと云ふ幕末史上有名な土地であるが、此の濱は入江を擁して、明鏡の如き内海の清い碧、外海は駿河灣の波上に雄大な富士の紺青のスカイラインを眺められる眞に風光明麗な樂天地である。何時か洋行歸りの先輩が「スエズ以東に於ける最良の海水浴場だ」と賞めてゐたのを聞いたこともある。此處の寄宿舎は海陸の遊び道具を揃へてゐるの滞滞しても決して倦む事がない、濱の朝風夕風などよもして歌ふ男々しい次の様な歌を聞くだらう。

一、戸田の港に朝風涼し目覺めよ男子等我が夏はきぬトラ……

二、巴の海に遊ぶ男子等 が黒き腕に 潮は躍るトララ……

三、夕涼しき 御濱の崎に どよもせ男子等わだつみの歌
トララ……

沼津一寸いと出れや大瀬の崎よ 君が姿を御濱まで

苦勞駿河の海越えて 波に揺られて來たわいな

御濱一寸いと出れや沼津の浦よ 眉毛に涼しき富士の山

三保の松原さし招きや いつか心も清見潟(サノサ節)

次は富士山麓の山中湖畔にある寄宿舎だ、富士の北隣、風

光緒よりも美しい湖水の邊、三千尺の高原の森中に瀟洒な平屋が建つてゐる。東海道を走る列車から眺めた富士は壯嚴で端麗な姿を見せてゐるので崇高な氣持を受けるが、此の邊から見られる富士山は表面の装ひをかなぐりすて、赫い山肌を見せてゐるので、「我等がふじ山」の感じが強い程、全く親しみ易い。夏季は絶好の避暑地であり、ヨット、ボートなど湖面に浮べるも良く、運動場で球を投げたり、蹴つたりする愉快さも味ふ事が出来る。秋の紅葉、冬のスケートにも亦乘て難い興趣を存して居る。數里に亘る紅葉の野のドライブ、嚴寒の富士嵐を冒して水面に倒影する富岳を踏みつゝのスケートティングなど我等の懐しい思出の種である。

更に珍らしいのは昨年土地の人より寄附された上州水上の奥の谷川温泉である。都の煩はしさを遠く離れた静けさの裡にある恰好の場所だ。温泉附き三千坪の土地は建築中の寄宿舎が落成の曉にはスキーファンの溜り場として賑ふことだらう。又夏季の避暑にも最適の地だ。

それから毎年五月上旬には全學大懇親會を開き各部を開放して一般人の縦覽に供し、映畫に講演に楽しい日を送る。又各學部は夫れ夫れ獨立に學部全體の園遊會を小石川植物園に催し先輩を招待し一日の興を盡し、その間に貴い教を受けるのだ。柳島のセツルナントでは「學」の街進出を試み、「大學殖民」を行つて居る。

本學學生は勉強疲れを休めるためには、本郷校庭内の幽邃な池——漱石先生の三四郎で有名であり、此處で小川三四郎が初めて美禰子さんに會つたのでした——の邊り、或ひは植物園の木蔭に又遠くは別荘に、更に油壺の帝大臨海實驗所の邊りに赴いて、浩然の氣を養ふ事が出来る。その間に我々は人生に對する又社會に對する考を纏める事が出来る。騒々しい校舎の周圍を離れて沈潜思索する時を持つ時三ヶ年の大學生活も眞に意義が有るのではあるまいか、我等は縣下幾多の人々がどしどし本學に來つて先輩の歩まれた光輝ある足跡を續いて行かれんことを望むものである。

(陶浪捷太記)
佐藤甲子郎

東京農業大學

一、位置

本大學は東京市外澁谷町常盤松にある。省線澁谷驛より約七分の地點にある。

二、沿革

本學は日本唯一の農業大學の名を冠する斯學の一大權威である。本學の起源を尋ねて見ると、明治二十年に舊幕臣及舊

静岡藩士が、育英會を組織し、此の育英會が育英養を設立し、明治二十四年此に農業科を設立したのであつて、同二十六年此の農業科を獨立せしめて、東京農學校と稱し翌二十七年榎本武揚子爵が、育英會から譲り受けて伊庭想太郎氏を校長に任じたが、經營甚だ困難であつたので、同三十一年一月榎本子爵の手を離れて、大日本農會の經營に移り、大日本農會附屬東京農學校と稱するに至つた。其の後同四十四年學則を改正し豫科を設けて東京農業大學と改稱し、大正十四年五月大學令による大學となつたのである。

三、内容

本大學の目的は農業に關する學術の理論及應用を教授し並に其の蘊奥を攻究するにある。

本大學は農學部、研究科、大學豫科とに分れ、外に専門部を置き、農學科、農藝化學科の二科に分る。

學生の自治會として農友會あり、學藝科、運動科及び各研究會に分れ、學生の殆んどが何かの運動部、研究會に入つてゐる。各運動部も漸次強盛となり、現在有名のものに卓球部、馬術部あり、ホッケーは一部に、ア式は今年初めて二部に落ちたが、柔道は大正十五年、昭和三年と二回東京學生柔道聯合會で優勝した。然し大部分強い選手が卒業したので良い選手の入學を待つてゐる。野球部は大正十年頃全盛で、六大學

リーグ戦に立大、農大何れが加盟するかの問題起り決戦の結果農大が勝つたが、時の學長横井博士は如何なる事情か加入を許さなかつた。その後振はなかつたが、近年擡頭物凄く今春は東京澁谷横濱電車沿線に大グラウンドを新設し、部員は少いが本年は各中學から相當名ある選手も加はり、本年度の成績もよかつたが、もつとく、いゝ選手の入部を鶴首してゐる。この外劍道、弓道、庭球、角力、陸上競技、ラグビー、山岳、籠球等の部がある。研究會は植物、園藝、畜産、農政、經濟、植民、傳書鳩研究、蟲の會等に分れてゐる。

學費、受験料又は檢定料金五圓、入學金五圓、授業料年額、學部(選科を含む)金百十圓、大學豫科金九十圓、研究科金六十五圓、専門部年百圓實驗費年額學部(選科を含む)金三十五圓、大學豫科金二十圓、研究科金三十圓乃至五十圓。専門部農學科三十圓、農藝化學科四十圓。

學長、吉川祐輝氏。

(中島慎吉記)

東京工業大學

東京工業大學を語る

今回岡山縣青年會創立第五十周年記念號發刊に際して、郷土に於る後進學徒の帝都遊學の便に供する目的を以つて、我

々が在學する學校の内容を紹介するの一文を役員の方より求められた。これ迄本學に在學する同郷の學生と役員との間に何等連絡がなかつた關係上、ふとした奇縁で役員の方よりこの企てを聞かされた時、私は全く獨斷でこの筆者の役目を引き受けざる可らざる事情のもとに在つたのである。而も締切期日を明日にひかへたる今日、同窓諸兄に詢るいとまもなく手許には書く材料も亦極めて僅少である。限られたる紙數の中に短かき時間と乏しき知識とを以つて、以下本學の内容大略を述べようとするのであるが、同窓諸兄並びに青年會員各位幸に御宥免あらん事を。

藏前初まつて以來四十九年、第一回の卒業生出て四十五年に今年に當る。ざつと半世紀、その間三回の昇格は藏前の歴史の古い事を思はせる。遠く設立の起源に溯るに、明治初年東京開成學校教師兼顧問として我國工業上にもつとも功勞の多かつた獨人ワグネル氏は時の文部卿に對し「凡そ一國の富を増進するには主として工業の發達を計るにあり、而も工業の發達を計るにはまづ低度の工業教育を盛んにし工業上最も必要なる職工長その他の技術者を養成せざるべからず」との要旨を以て低度工業教育實現の急務を建議したが幸ひ當局の容れる所となり開成學校内に製作教場を置く事になつた。かくて同教場には化學、機械等の科目を置き修業年限を二ヶ年

とし卒業生を出すこと二回であつたが、其の後開成學校を東京大學と改稱するに及び同大學理學部に化學、機械、土木、探礦、冶金の諸科が設置せられ、製作教場よりも高等の學術を教授せるを以て別に同教場を存続するの必要なしとし、明治十年遂にこれを廢止した。然し文部當局は數年後に於て再び低度教育の必要なる事を認め、その結果本校の創立を見るに至つた。蓋し本校設立の目的は専門技術の素養ある優良なる職工長及び工業教員たるべきものを養成するにあつたのである。次に本學の沿革を簡單に列記する。

東京職工學校時代（明治十四年—同二十三年）

- 一、十四年八月始めて本校規則を制定し學科を分ちて豫科及び本科となし豫科は一ヶ年本科は、二ヶ年半、通じて三ヶ年半と定む。然しこれは翌年改めて本科の卒業期を延長し三ヶ年となす。
 - 一、十四年九月正木退藏氏校長に任せらる。
 - 一、十五年六月淺草區藏前片町に移轉し校舍を新築する。
 - 一、十九年七月第一回卒業生を出す二十四名なり。
 - 一、二十三年手島精一氏校長に任せらる。
 - 一、同年三月二十四日東京工業學校と改稱。
- #### 東京工業學校時代（明治二十三年—同三十四年）
- 一、二十三年機械工藝部特別生の制を設く。
 - 一、二十八年電氣工業科を實施。

一、三十四年五月東京高等工業學校と改稱。

東京高等工業學校時代（明治三十四年—昭和三年）

- 一、三十五年建築科を新設。
- 一、大正五年九月阪田貞一氏校長に任せらる。
- 一、九年吉武榮之進教授校長に任せらる。
- 一、十二年九月一日關東大震災を蒙り同日正午應用化學科より發火し全校舎烏有に歸す。
- 一、十三年四月本校位置を東京府荏原郡碑倉町大岡山に變更し、こゝにバラック校舎にて學期を初む。
- 一、十五年六月現學長中村幸之助氏職に任せらる。
- 一、昭和四年四月一日東京工業大學に昇格し、從來の高等工業學校は工學専門部と改稱さる。

回顧すれば東京高等工業學校がその前身たる職工學校の最初より善く工業教育界に重きをなし、今やその卒業生をして「煙突の在る所必ず藏前あり」と誇らしむるに至れる所以は他に非ず。往時我國朝野が擧て工業教育に關する理解なく、從つて現代の意義に於ける工業未だ起らず、國民皆輸入品の新奇を見て徒に驚歎するのみなりしを以て、此の如き時代に於ける工業教育は主として嶄新なる輸入工業品を模倣翻製するの道を教ふるに在りたり。即ち、速かに工業知識の一般概念を普及して處女的工業の興るを助くることをこれ急としたる

なり。この點をつとに看破してまづこれに着手し、善く我國工業振起の運を作りし者を我が手島校長となす。戦後諸般の工業續々として勃興し、實際の發達は却て學術教育の進歩をしのぎ、今や、我が工業の實際界は、工業教育界が依然としてその舊套を脱せざるを攻め、宜しく外國工業翻譯の弊風を改め、速かに根本の理法を探究して創設的にこれを工業の實際に應用し得る能力ある人材の養成に勉むべきことを要求するに至れり。我が東京工業大學は正にこの機運に促されてこゝに呱呱の聲を揚げたるなり。事態すでに斯の如くにしてもとより本學の根本教育方針に變革ある理なし。

今や、昇格第二年の秋を迎ふ。塵埃と喧騒の帝都を離るゝ大岡山の地、ひたすら精進の道にいそしめる我等學徒の前途に榮光あれ。

東京工業大學々則抜粹

第三條 本學に左の八學科を置き學生をして各其の一學科を專修せしむ。

染料化學科、紡織學科、窯業學科、應用化學科、電氣化學科、機械工學科、電氣工學科、建築學科。

第八條 入學を許可すべき者左の如し。

高等學校高等科を卒業したる者、高等工業學校を卒業したるもの、大學令に據る學士の稱號を有する者、高等師範學

校を卒業したる者、大學豫科を修了したる者、高等學校高等科學力檢定規定により高等學校高等科學科卒業者と同等以上の學力ありと檢定せられたる者、等。

第九條 入學志願者に對しては高等學校高等科學科の授業科目中に就き學力選抜試験及身體検査を行ふ。

第二十二條 學士試験に合格したる者は工學士と稱ふる事。第二十五條 授業料は一學年金百二十圓とし三期に納付すべし。

東京工業大學藏前學友會規則抜粹

第三條 本會は前條の目的を達する爲め左の十四部を置く。

文藝部、端艇部、庭球部、柔道部、野球部、劍道部、弓道部、音樂部、講演部、陸上競技部、蹴球部、新聞部、共濟部、籠球部。

(狩谷淨太郎記)

東京慈惠會醫科大學

位置 東京市芝區愛宕町二丁目

學長 醫學博士金杉英五郎氏。

修業年限 學部四ヶ年、豫科二ヶ年、研究科二ヶ年以上

本學部は研究に際し他校に誇る點は學用死體の多い點である。多くの醫學部では獸類又は

アルコール漬死體等に依る場合が多いが、本校は學生自身が診察した病人の死體を解剖する便がある。又英語を以て教授するのにも特色といふべきか。

入學資格檢定料金十圓。入學料十圓授業料一學年分豫科百圓にして學部は二百圓。研究科の研究料一ヶ年二百圓、學部卒業試験料金五十圓と定められて居る。

中央大學

中央大學略史

一、創立

黒船の來航によつて永き國民的眠りより呼びさまされた我が國が第一次的にもつた國民的理想は開國交通王政維新の大業であり、此の目的の達成後第二次的にもつた國民的理想は對等條約の獲得であつた。而して此の目的を貫徹せんがためには、國民の法律知識を向上せしめ、歐米と等しき法律制度のもとに國家及び國民の生活を安定せしめ、以て諸外國の我が國に對する信頼を深める事が隨一の緊要事であるといふ事は、當時の當路者及在野の人々の誰しもが考へた所であつた。

斯る朝野の要望のもとに生れ出た我が國の近代的法律學研究機關としては、明治五年に募集せられた司法省明法寮の法學生と明治七年の東京開成學校の二つを擧げる事が出来る。前者はフランス法を後者はイギリス法を教授し、此處に明治時代前半の英佛兩法系の對立が其の端を發したのであつた。斯る狀勢のもとに數年を経過して我が法學界が其の第二期に入るや幾多の法律學研究機關が時代の要求と英佛兩法系學者の主張の抗爭との間に生れてきた。即ち先づ東京專門學校が立ち、明治法律學校、和佛法律學校が相繼いで設立せられた。我が中央大學も亦實に斯る社會狀勢のもとに呱呱の聲を揚げたのであつて、それは丁度明治十八年七月の事であつた。而して其の設立の趣旨は當時我が國に於て全盛をきわめた、佛法を以て我が國情に適せざるものとし、佛法の有せし地位を顛覆し英法第一主義を徹底せしむるにあつた。故に創立者は當時第一流の英法學者を網羅し學校の名稱は英吉利法律學校と名附けられたのであつた。

二、名稱の變遷

英吉利法律學校の名のもとに實際的妥當性を重んずる英法を教授せんとするの企ては全々時代の要求する所であつた。みえ、創立者の異狀なる熱心と相俟つて英吉利法律學校は創立日尙淺くして而も物凄い發展を遂げていつた。斯くて明治

二十二年十月には東京文學院、東京醫學院と合併、名を東京法學院と稱するに至つた。然るに民法商法を初めとし諸種の法律が漸次制定せられ我が法律制度もやや體系を整へると共に教育制度も漸く整頓するに及んでは大學組織の必要甚だ切實を加へるに至り、依つて此の要求に應ずべく明治三十二年八月從來の組織を一變して東京法學院大學と改名し、更に明治三十八年二月諸方面よりの名稱變更に關する希望に基き名を中央大學と改むると共に從來の法律專攻の單科大學たりしを改め、經濟學部を併置し更に明治四十二年には商學部を増設、大正八年新大學令の施行せらるゝや、豫科を二年制及び三年制の二として新に獨法科を設け、此處に英法科及び獨法科を有する法學部と經濟學部、商學部の三學部、及び法經商の三専門部を有する名實全き綜合大學となり、更に昭和四年に至りて不遇の秀才のため二年制の夜間部豫科を新設し昭和六年度よりは此等の人々を包容する夜間部學部の開講をみんとしてゐるのである。

三、組織及び社會的寄與

創立の趣旨及び其の組織の變遷に於て上述の如き沿革を有する中央大學が民法施行の當時に於て舊民法施行延期運動の中心勢力として偉大なる社會的貢獻をなしたる事の如きは既に世間衆知の事柄である。創立當初より今日迄或は官界に或

は實業界に、さては國家正義の維持者としての辯護士界に送り出したる人材は實に二萬人に近からんとし、其の社會的功績誠に顯著なるものがある。現在に於ても約六千人の學生を收容し、此等の學生の研究心を刺激し更に一段の社會的寄與をなさんとして、成績優秀なる學生には或は貸費により或は特待生として月謝を免除し又は給費生として學費を給與する等の制度を設け、更に卒業後學業に専心せんとする者のためには特選給費生として大學院に残らしめ又は在外研究員として外國に派遣する等あらゆる方法を講じてゐるのである。而して今年に至り學生の増加と共に狹隘を感じたため圖書館の一大擴張を計り、内外の粹をあつめたる一大圖書館を新築してこれに彼の關東大震災にも難を免れ得たる貴重の書に加ふるに新に購入せる數萬卷の書籍をおさめて學生の便に資し、愈々益々我が國文化の發展に貢獻せんとしてゐるのである。

以上は五十年近々の歴史を有する中央大學沿革の概略であるが、若しそれ學校の歴史及び現行の學制につき詳略に知らんと欲するの人々は中央大學當局に御照介あらん事を。學校の歴史及現行制度を詳細に説明せる中央大學便覽は直ちに其の机上に備へられるであらう。

位置 神田區南甲賀町。
目的 大學令に依り法律、經濟及商業に關する學術の教授。

構成 法學部(獨法科、英法科)經濟學部、商學部、第一豫科(晝間)二年及三年制。第二豫科(夜間)大學院。
學長 法學博士原嘉道氏。
 (万城登記)

立教大學

位置 東京府北豐島郡西巢鴨町池袋。
 本校學長は杉浦貞次郎氏を戴き、大學令により文學並に商業に關する事を教授するを目的として居て、文學部(英文學科、哲學科、宗教學科、史學科)商業部(商學科、經濟學科)を置き豫科二年、學部三年の修業期間在り。
 授業料は一ヶ年間豫科、學部共に百圓なり。

早稻田大學 早稻田學園展望

早稻田大學と云へば、「都の西北」のメロデーを思ふ位に、民衆化された校歌を以て、學園の紹介の緒にかへたいと思ふ。

I 早稻田大學校歌

(一) 都の西北早稻田の森に
 聳ゆる薨は我等が母校
 我等が日頃の抱負を知るや
 進取の精神學の獨立
 現世を忘れぬ久遠の理想
 輝く我等が行手を見よや
 早稻田く早稻田く早稻田くく
 東西古今の文化の潮
 (二) 一ツに渦巻く大島國の
 大なる使命を擔ひて立てる
 我等が行手は極り知らず
 馳ても久遠の理想の蔭は
 普く天下に輝き布かん
 早稻田く早稻田く早稻田くく
 (三) あれ見よ彼處の常盤の森は
 心の故郷我等が母校
 集り散じて人は變れど
 仰ぐは同じき理想の光
 いざ聲揃へて空もとゞろに
 我等が母校の名をば讃へん

早稻田く早稻田く早稻田くく II 大學の内容

早稻田大學は現在、五學部に分れてゐる。

- 一、政治經濟學部
 - 政治學科
 - 經濟學科
- 二、文學部
 - 哲學科
 - 史學科
 - 文學科
- 三、商學部
- 四、法學部
 - 英法科
 - 獨法科
 - 佛法科
- 五、理工學科
 - 機械工學科
 - 電氣工學科
 - 探鑛冶金科
 - 建築學科
 - 應用化學科

以上の各學部には、夫々研究科を設け、之を綜合して大學院と稱してゐる。亦各學部共に學生の學修に妨げなき限り、學力考査の上男女の別なく聽講生の入學をも許してゐる。

III 大學部の入學及附屬學校

前記諸學部に入學を許すものは、附屬高等學院を修了したる者たることを要するも、これが修了生を入學せしめたる後、尙餘裕あらば高等學校高等科卒業生及び大正七年文部省令第三號第三條第四號に依り指定せられたる學校の卒業生には大學施行の證術試験を経て入學を許してゐる。こゝまで述べると必然的に大學の豫科たる高等學院に就いて暫く書かせて貰はなければならぬ。大正八年早稻田大學が、大學令に據りて學制の改革を行ふや、其基礎教育も亦一新するの必要を感じ、高等豫科を廢して高等學校の高等科に相當する三年制の高等學院を創設した。是れが現在の第一早稻田高等學院であつて、更に大正十年主として中學校卒業生を收容すべき二年制の第二早稻田高等學院を設けたのである。この兩學院こそ五十年の歴史を有する早稻田大學の豫科として一面高等學校令の趣旨に基き、高等教育を授くるを以て本旨としてゐる。

之で所謂早稻田大學の正規の大學の内容を説明した積りである。

専門部及専門學校

専門部は法律政治經濟商業に關し各々専門學術を授くるを

以てその目的としてゐる。之は中學卒業の資格にて直ちに入學し三ヶ年で卒業し實社會に出ることになる。又専門學校は晝間就學に不便な人々の爲めに専門學校令に依り晝の専門部と大體同様の内容の下に教育されているものである。

高等師範部

中等教員たるに必要な教育を授くるを以て目的とし、現在英語科、國語漢文科の二科を設け豫科一ヶ年本科三ヶ年で

工手學校及高等工學校

夜間授業にして中等技術者養成を目的として大學の理工學部の實驗室を使用したり大學部の教授諸先生の充實した堅實なる夜學校であつて、現在四千餘名の學生在學し、その中には商店の小僧さんあり、番頭あり、會社員あり、實に盛なものである。

この外に野球を初め運動競技で有名な早稻田實業學校あり、眞面目な勉強振りで知られた早稻田中學もある。併し現在では之は直接の附屬學校ではなくて、故老侯爵の御聲が、りの賜として出來たもので大學の姉妹校として大學保護の下に立つ。

之で大學の組織内容を一通り物語り得たと思ふ。次に述べ

たきは本學園に漲る早稻田精神である。

III 早稻田學園小景

何れの大學にも夫々特異のスクールカラーがありそれをモットーとしてゐるのであるが、本學園にも特有の早稻田精神がある。即ちワセダスピリットを根幹としてそこに學園の發展が計られ、活躍が期せられてゐるのだ。然らば早稻田精神とは何ぞや。之は全ワセダニアンが指導精神として父よりも敬ひ、戀人よりも慕ふところのものである。それは早稻田が續く限り永久不變のものであり、事早稻田に關する限りすべてを律する早稻田憲法である。

この早稻田精神こそ早稻田學園をして光輝あらしめた本體である。早稻田スピリットは學問の獨立を全うし、學問の活用を效し模範國民を造就する建學の本旨に外ならない。而してスポーツに於て、學風に於て早稻田精神は常に正義を正義とし、邪惡を邪惡とする純真な學徒の抱く魂である。この魂こそ學園を光輝ある正義の彼方へと導いて行く武士道的精神である。この魂の子は一萬三千人あり、而して帝都に、地方に、海外に於て、政治家、思想家、新聞人、文士として斷然他の大學に頭角を表はして居る。曾つて英人はユニオンチャックの行くところ日の没するところなしと豪語したが今や早稻田校友のあるところ日の没する地なし。例を東京朝日新聞

に求むれば編輯局長緒方氏を始め總務にして整理部長しかも我が同縣人である美土路氏がそうであることは萬人衆知の事である。この人がなければ大朝日の編輯が出來ぬとまで云はれて居る。亦經濟部長兼主幹の牧野氏その他運動部、文藝部各部を通じて少くとも早稻田によつて主宰されぬところない位であらう。亦政界に會つて政治家として清き熱情的偉人早速整爾氏を生み、天下の雄辯家永井柳太郎氏あり、未來を約束せられたる若き熱血兒中野正剛氏あり、其他四百六十有餘名の代議士の中、七十三名の代議士を中央政界に送つたのは早稻田であつた。自然主義文學の寵兒として一代の名聲を馳せ、松井須磨子と共に明治劇壇を賑はした、島村抱月氏を初め、明治大學の文學史をひもどき稲門出身者と、その文人を知らずしては、恐らく完全な理解は六ヶ敷位、大小の文人の輩出は誠に非常なものである。極く我々に關係のある縣人の先輩のことを挙げれば、正宗白鳥氏あり、近松秋江氏あり、吉井勇氏、木村毅氏と數へ切れない。現在の代表的詩人にして、全國津々浦々まで唄はれた行進曲は早稻田の森、西條八十氏から流れたものではなかつたらうか。其他法律家、教育家、技術家を挙げればかぎりなきを以てこゝらで止めるとしやう。然し惜しむべくは故大隈侯時代より實業界に迎えられず、且つこれに進むに心よからずとして、兎角實業界立遅れの感ありて、昨今相當の勢力を伸したるもの、この方面に大

先輩少なければ、たゞ今後毎年輩出するところの卒業生と、三萬の校友諸氏の開拓進展を痛切に感づる所以である。

早稻田學園の學徒が、正義の士であり、情熱の男子であり、ローカルカラーそのまゝの純朴なる勇敢兒なるを以て、兎角野暮だ。その他云々の批評の言葉は耳にする。然し、私はこれは眞のワセダニアンの心事を解す人の言にあらずと思ふ。眞の早稻田學徒が熱と涙で努力への苦闘を続けんとする姿は、今日學生のスポーツ界に於ても如何に多くのワセダフアンを持つかでも知る事が出来やう。早稻田獨特の帽形に大學を包む稻穂それは高遠の理想に充ち、學問の獨立と、研究の自由を高調して、眞理の子として歩みを續けてゐる早稻田大學のシンボルである。あのボブラや銀杏の立ち並ぶ校庭に紫雲がたなびいて森の彼方に夕陽が沈む大空に聳え立つ講堂の鐘樓より流れてくるチャムベルの音。建設の苦杯幾重か重ねて今早稻田健兒のつく自由の鐘は、學園を去つた我々が胸に波打ちひびく、それは愉樂の對象であり短かき六ヶ年の早稻田生活は人生に光明と熱をもたらせるに十分であつた。嗚呼若き日の早稻田學徒に光榮あれ、而して早稻田スピリットを讀えしめよ。

(松本佐一記)

早大岡山縣人會

我が早稻田大學岡山縣人會は、その趣旨、内容に於て青年會と異なる所なく、いはゞその支部の如きものである事は云ふまでもありません。平沼、難波兩先生を會長副會長に頂き在京會友二百餘名、會員三百名に餘り多年先輩諸兄の懇篤なる指導と後援とに依り、年々隆盛の域に向ひつゝある事は誠に歡喜に堪へないものが御座います。これ皆早稻田に學ぶ縣人の團結の力に外ならないと信じます。

そしてこの縣人會が廣き學園に學ぶ同縣の學生相互の會合場であり交歡場であり一方先輩と學生とが接して親しく談を交へる唯一の機會であつて、良友を得て親交を結び、同郷相助けて互に學術品行の切磋を計る事は本會の使命とする所であり、御座います。そこで近年は會報を發行して之を會員に頒ち會員の動靜を明らかにし、春秋二季の大會を開くの外、年に數回例會を催して先輩及び關係者を迎へて時事問題或は種々の感想等を承つてゐます。吾々學生にとつては經驗の深い、實社會の生活を踏まれた大先輩の熱のある眞劍的な體験談程刺戟となり教訓となつて、吾々を感激さすものは御座いません。故に例會の如きものを度々設けて先輩諸兄の體験談等を承る事は最も意義のある事だと思ひます。

斯様にして同じ學窓にあつて、長夜螢雪の苦を共にしてゐる者にとつては所謂『會』と云ふものを組織して、相集つて懇親を重ねてゐると云ふ事は甚だ尙いもので御座います。

(植木知之記)

拓殖大學

本大學は小石川區茗荷谷町にある。而して帝郡數ある大學中にて最も異彩をはなつた校風を有して居り専ら植民に關する學術を考究するのを以つてその名が高い。以前は東洋協會大學と呼ばれて海外に將來雄飛せんと心掛けて居る學徒を教授して居たが、最近に至りその名を現在の拓殖大學と變更し植民に加ふるに一般商業に關する學術をも教授し、並に其蘊奥を攻究するやうになつた。

異彩を有して居る校風は本大學の最も誇りとする處であつて、近年兎角情弱に流れ安いアメリカ化したモボ等は本大學には絶無と云つて善い程あく迄學生らしい、何處迄も熱と力を有して居る學徒が大多數を占めて居る。毎年行はれる名高い兩國の國技館に於ける東都學生相撲大會に於ける本大學生の應援振り、あれこそ本大學の得意とする校風の現れではないのでせうか。

本大學に入學なされんとする方に御參考迄に校則及び入學

規則の詳細を次ぎに簡條わけにして置きます。

位置 東京市小石川區茗荷谷町(電話小石川六〇〇)

目的 大學令に依り商業及植民に關する學術を教授し並に其蘊奥を攻究す。

構成及修業年限

本大學は商學部を以て成り、大學豫科(第一部)(第二部)を附設す。修業年限は學部三年、豫科第一部二年、同第二部三年、研究科一年以上。

入學資格 四月の學年初一回とす。豫科第一部は(一)中學校卒業業者、(二)高等學校高等科第一學年終了業者、(三)專檢指定業者、(四)同合格者。

豫科第二部は(一)中學四年修了業者、(二)高等學校尋常科修了業者、(三)高檢合格業者、(四)同指定業者、(五)專檢指定業者、(六)同合格業者。學部は本大學豫科修了業者、研究科は本大學卒業業者。

學費 入學試驗料金五圓、入學金五圓。

學費 授業料一ヶ年豫科は金九十圓、學部は金百圓、研究科は金四十五圓。

學費 永田秀次郎氏。

備考 特待生、貸費生の制度あり。又卒業に對し「在

外研究員」を命ずることあり。

専門部

學科及修業年限 拓殖科、法律科商科に分る。修業年限三ヶ年、學生を本科生、別科生の二種とす。

夜間授業あり。

入學資格 本科生は、(一)中學校卒業者、(二)專檢指定者、(三)同合格者。

別科生は、本大學専門部に於て行ふ試験に合格したる者(但し缺員ある場合に限る)

學費 入學試験料金五圓、入學金五圓、授業料一ヶ年七十五圓。

慶應義塾大學

塾祖福澤諭吉先生がその礎を築きし昔は、丁度維新の初、王政復古の聲高く大江戸も戰雲急で劍戟砲火の巷であつたか。然る間に先生は銃聲を耳にしながら悠々迫らず、書を片手に教鞭を取られたと聞く。

その歴史の古きに、その先輩の各方面の目覺ましい活躍に於ては世人の共に認むる所である。爾來幾拾星霜を経て膨脹に膨脹を重ね、現今、塾生は小は幼稚舎より大は大学生に至

るまで總じて九千、一萬に垂んとしてゐる。

茲で簡単に慶應義塾を紹介すれば、下は幼稚舎(小學部)商工部、普通部(中等部)より大學豫科、高等部大學部と凡て、小中大とを包含し、學部としては大學は經濟學部(舊理財科)法學部、文學部、醫學部に分れ醫學部の本科四年を除いては豫科三年本科三年で、高等部は法經科と云つた様なもので豫科一年本科三年、都合四年の専門學校風な一種獨特の學部である。之等各學部とも先輩には各方面へ錚々たる名士を多々送つてゐる。第一吾々のお國自慢の憲政の神様政友會總裁犬養木堂翁も大先輩である。中でも最も新參者の醫學部は創立日尙淺しと雖もその名聲は國內は勿論遠く海外に響いてゐる。この學部の名教授不滅衰傳導説で有名な加藤元一博士もやはり備北新見出身お國の人だ。その外縣出身の教授には文學部に廣瀬哲士、井波清治、金田廉の三教授がある。

近時三田山上に一萬近くの塾生を包容するに狭きを感じ、豫科普通部等の移轉問題が起り現に帝都に接した神奈川縣日吉臺に拾三萬餘坪の大敷地が設定され、近き將來に於て、移轉されやう。此處は廣漠たる武藏野の一部で、山水の美そのまゝに取り入れて、池あり林あり、その間にモダンな校舎が建てられる。かくて實に東洋一の學への理想郷となつて、若人のカレッジマン、ライフの羨望の的となる事だらう。

學費 入學金五圓、入學試験料金五圓。

授業料年額 學部金百二十圓
豫科金百圓

體育會費年額金七圓、尙醫學部に限り實驗費若干を要す。大學院在學科年金三十圓。

總長 法學博士林毅陸。

(安東喜四夫記)

國學院大學

位置 東京市外澁谷町下澁谷氷川裏。

本校は學長に文學博士上田萬年氏を戴き大學令に依り道義、國史、國文等を學修せしむ。然して修業年限を豫科二年、學部三年とし、一ヶ年の授業料として、豫科生は八十圓、學部は百圓と定められて居る。スポーツ方面では野球部、庭球部、劍道部等々盛んに行はれ體育、教育並び行はれてゐる。

明治大學

白雲なびく駿河臺上、輝く帝都を一眺に收め遙かなる雲間に靈峰富士を仰ぎつゝ巍然として聳ゆる圓天井は我等か八千の若人明治を象徴する意氣であり、力である。

「明治！」その名には唯若人の霸氣あるのみ。一代の名裁判長として、その徳望を慕はれた前大審院長法學博士横田秀雄先生を學長に載き、現代日本のあらゆる方面に堅實優秀なる名士を多數活躍せしめ、今や我等が大明治建設への一步を堂々踏み出したのだ。

法科の明治か、明治の法科かと云はれる程名聲赫々たる本大學法科。

現代日本の實業界の重鎮を多數産んだ商科。

然して益々二三の優秀さを發揮せんとする政治經濟科。

理工科の早稻田か、經濟科の慶應か、法科の明治かと云はれる程の、現代日本大學中の三羽鳥。

三年及二年修業の豫科。三年制の大學。大學と豫科の總修業年限を三年制に短縮したる専門部。及び二年制の大學院を有す。

× × ×

「明治」といへば誰れでも、野球の明治、ラグビーの明治、拳闘の明治然してモダンボーイの明治を想ふことだらう。この秋こそ優勝と思ひつめた心を覆して、あはれB級に落ち全校の意氣は頓に衰へた。野球の強い時は、入學志願率迄上ると云ふ位の影響があるのだから、これこそ一大事なのだ。もともと明治は頑強な體力で押しつぶす所かいゝのだ。下手に洗練されたら弱くなる。他校のファンは明治は亂暴だとか、汚

いと云ふが、あのハチ切れる様な元氣は明治特有の短所でもあり、長所でもあるのだ。明治の名物は野球の田部であり、水泳の鶴田であり、そして、それらよりも若い教授連に他校に誇るに足る新彩があるのだ。そして又新しく大體育館こそ明治の誇りだ。遠く比律賓から見物に来る人もある位立派なものだ。先づ地下室に大體操場ありて、あらゆる設備がある。その隣が日本一の室内温水プール。鶴田、佐田等が冬でも、暖かそうに泳ぎ廻つて居る。その隣に柔剣道の道場及び角力場、拳闘のリンク。一階には、二十數部の各部室。二階、三階は大ホール。四階は陸上競技のトラック及びバスケットボールのコート。何から何まで包含した眞のスポーツ殿堂なのだ。

次に校友會各部を御紹介しよう。

前述の野球部、藤倉兄弟を有する庭球部。六大學中の強豪と謳歌されるボート部。柔道部、剣道部、陸上競技部、蹴球部、籠球部、排球部、馬術部、スケート部、スキー部、山岳部この他に麻雀部あり、將棋、圍碁、尺八、柴笛、魚釣その他百の部を有す。中に異彩を放つのは六大學中最も優秀なる技術者を有する航空部ありて、駿臺上高く青空の中に大鵬の如く舞ふ。銀翼に紫紺の校旗をなびかせて飛ぶ勇姿には心からその男性的快哉を叫ばずにはゐられない。之に次いで三拾數名の部員を有する自動車部、麗らかな小春日和の京濱國

道を六十哩の快速度で、二拾數名の部員が各自の愛車に跨つて爆音と共に疾風の如く飛び去る本大學自慢のオートバイ部。全日本學生界の王座を占むる角力部、弓術部、ホッケー部、スケート部、スキー部、水泳部、ラグビー部、百名に近い部員を有する日本一の大ハーモニカ・ソサエター及オーケストラバンド等モダン・スポーツに音楽に、この方面の明治の活躍も素晴らしい。

さて校内食堂で、運のいい奴には肉が見付かると云ふ程の頗る肉氣に乏しい十五錢のライスカレーをかき込んで後の晝飯休憩時間を四層樓の屋上で富士山を眺めニコライ堂のいとも古典的な鐘の音を聞きながら、ヤタラにバットを吹かす日向ほつこの數十分。

さて校外に出、明治の勢力範圍神田に來らんか、東京中の喫茶店を集めたかと思はれる程、曰く「モンパリ」、曰く「マツターホーン」、曰く「アルル」、曰く「スフィンクス」其他純喫茶店と名のつくもの無慮八十八軒（筆者實地調査）其他書籍デパート、運動具デパート、洋服デパート、百軒に及ぶ本屋靴屋……今や神田に溢れたる學生達は堂々銀座進出を企て慶應ボーイの心膽を寒からしむるに至つた。尙本學に特筆すべきは大學女子部を有する事で他大學の羨望の的となつてゐる。何と諸君女子部創設の爲め男學生の出席率の著しく良好となれるは……

此の如くあらゆる方面に最も現代的なる大學生、若人の覇氣そのもの、大學生、愉快で無邪氣な大學生、我等八千の學徒にも光榮あれ。

構成

法學部、商學部、政治經濟部、大學院豫科（第一種—三年制、第二種—二年制）

専門部（法科、政治經濟科、商科、經濟科、文科、專攻科）

學費

入學金五圓、授業料年額豫科九拾圓、學部百圓、學友會費年額八圓。

學長

法學博士横田秀雄。

（石津謙介記）

專修大學

過去五十有餘年の光榮ある歴史を有し其の基礎はあくまで強固に實質は姿として眞摯は心とし剛健の勇に力行の意氣に、過去半世紀間の社會の要求に應じて有爲の人材を養成し又將來益々發展複雑化して行く時代に於て最も活動的な、そして最も重要な事業を處理して行くであらう處の幾多の有爲な社會人を生育させつゝあるのが吾等の專修大學なのであります。

省みれば明治十三年に經濟法律に志す學徒の熱烈なる希望

と、相馬永胤、田尻稻次郎、目賀田種太郎、駒井重格等同志諸先生の甚大な御盡力に依つて創立され其の後現在に至るまで連綿として繼續され今日のやうな充實せる域にまで達したのであります。

それでありますから其の創立以來の歴史の古いことは、經濟・法律方面の講座併置の大學としては私學中吾が專修大學と比肩するものが見出せないであります。

明治三十九年に専門學校令に依る大學組織となり大正二年專修大學と改稱され其の後時勢の進展に順應して種々其の施設に改善を加へ鋭意校勢の發展を圖り大正十一年新大學令に依つて昇格し今日に至つてゐるのであります。

現在の本大學は大學令に依る大學豫科及び學部と専門部とを以つて構成され經濟法律商業計理等に關係する理論及び實際方面への應用とを教授し其學理の蘊奥の探究と共に一方人格の陶冶と思想の善導とを以つて目的としてゐるのであります。今や學問は、一部少數の學者の獨占的研究と思索とから脱して一般民衆の間に移りつゝあります。この時に當つて本大學は大學講座の開放、即ち學問の一般民衆化、普遍化に力を致して居り其の功績の偉大にして其の好果の著大なることは見逃せない點であります。そして之の學園に學ぶ者は、未來の實業の統帥者たらんとする輝かしい希望に燃えて、智育に德育に、又體育の三方面に圓滿なる發達と習練とに、

いそしん居るのです。

學藝に、運動に十數の部を有し研究と習得に遺憾なきを期して居り、將來社會の活舞臺に於ける完全なる活動を全學生に期待して居るのであります。今や本大學は學長に智徳御圓滿なる阪谷先生を戴き又専務理事道家先生は慈父の温情を以つて本學の爲専心されて居られます。

吾々本學園の學生は、質實眞摯剛健力行を、最大のモットとして未來の實業界の統帥者たらんとして學びつゝあるのではありません。斯くある吾等の行く道は盤石をなし吾等の行く手は光明に充ちて居るのであります。

位置 神田區今小路二丁目。

目的 大學令及専門學校令による、經濟法律の教授。

構成 經濟學部、

豫科。

専門部（經濟科、計理科）

學費 入學金、豫科、學部、各金五圓、専門部金參圓。

授業料、豫科學部各年金八拾八圓、専門部金七拾七圓。

學長 法學博士、男爵阪谷芳郎。

（加賀山潔記）

東京高等工藝學校

東京高等工藝とその内容

工藝の範圍は頗る廣く圖案、彫刻、裝飾、繪畫、を初めとして染織、金工、建築、寫眞、印刷、製陶、塗工、其他各種材料の美的加工業は概ね之に屬し之が亦無數の専門に分れて居る。

本校は成るべく多くの専門を網羅し綜合的教育を爲すを欲すと雖も斯業現在の狀況と工業教育の現状を考慮して左の學科を置いて居る。

工藝圖案科

工藝彫刻部

金屬工藝科

精密機械科

木材工藝科

印刷工藝科

寫眞部

次に此等諸學科の教授内容を略述しよう。

工藝圖案科。工藝品の圖案を課するに當つて其裝飾材料構造の智識を要することは勿論であるけれども之を尙専門的に研究するためには平面的に又立體的に分けて其實際的の學識

ある圖案家を必要とする。圖案家の任務は常に内地及諸外國の工藝の大勢に通じ敏活に其流行變遷を知悉し、商品の改良を施し、製作家を指導啓發するにある。本科は此の現狀に鑑み、圖案の嶄新にして然かも根柢に關し之を理論と實際と製作の三大連絡を以て有爲な一般工藝圖案、室内裝飾及び裝飾繪畫に關する圖案家の輩出を期せんがために有效適切なる教育を授けんとして居るものである。

工藝彫刻部。彫刻を應用する工藝品にあつて從來主として手工的製作に俟つき可もの多きも之を大量生産に仕向ける可き彫刻的技能を要することは將來益々必要なこととなつた。本部は之れに鑑み石膏型、電氣鑄造型、練型、縮彫機型其他原型による設備を以つて實際的技術を授け、更に金屬工藝科、木材工藝科其他の諸科と連絡して各種工藝品に應用すべき彫刻工藝の完成を期せんとするものである。原型製作にあつては建築裝飾たる可き技術者を養成し、或は賞牌原型製作に、或は一般彫刻工藝の技術に關する學理的技術を授けんとするものである。

精密機械科。精密なる機械器具類、例へば精巧工作機械、發動機、計器、理化學器械、測量器、印刷機械、寫眞器、醫療器械等を始めとし學術上、工業上、軍事上、其他に要する諸精密機械の工作審査試験茲に材料試験等に從事する技術者の養成を以て目的とするものである。惟ふに我國機械製作工

業としては從來の如き普通の機械製作にては最早や行き詰れる状態があると云ふべし、今後歐米諸國との競争場裏に立ちて大に發展を期せんとするならば、精密の度高き所謂高級機械の製作と使用を以てせざる可らず。此の現狀に依つて將來之が専門技術者の必要を感じる事切なるものがある。

金屬工藝科。金屬製品の範圍は極めて廣く幾多の専門に分るゝも、之を民間斯業の現況に鑑み、板金、鑄金、貴金屬の三部に分ち、學理及び技術を修得せしめんとするものである。古來我國の金屬製品は或る種のものには非常に發達して技術の精巧なるものもあれど、其製作は傳統的にして毫も科學に根底を有せず、其品種も或る一部に止り、新時代に適應し需要の廣汎なる商品等に至つては其研究遍々として進まざるは全く新智識ある技術者の缺之に起因するもので、本科の設置は我金屬工藝界に新生面を開かんとするものである。

木材工藝科。木材並に其利用を研究して普く工藝品に應用し、且工業的に之を生産せしめるに必要な學理と技術を授けることを目的とし、家具建具造作並に室内裝飾を主とし、内には國民文化生活の充實を計り、外には海外貿易を一新するを以て主眼とするものである。其應用の範圍に至つては建築並に船艦、汽車、電車、自動車内の家具建具設備並に曲木、ヴェニア、樂器、玩具、文房具等枚擧するに遑あらず。今や帝都の復興に當り家具又は建具製作の工場を營まんとするも

の頻出せるに拘はらず、専ら之が經營の任に當る専門技術者に至つては殆ど缺如せる状態にある。

本科の教育の主點も亦此處にあるのである。

印刷工藝科。我國の印刷業は發達の年代未だ若しと雖も、最近十年間に於て、著しき進歩を來たし、大規模なる會社工場年と共に多きを加へ、益々隆盛に赴かんとしつゝある。併しながらこれ歐米の斯業に比すれば彼れに及ばざること遠し、本科は印刷業の現状と將來とを考慮し、凸版平版並びに凹版に關する製版印刷術を始め寫眞製版等に涉りて、學術的基礎の上にこれ等の實技を修得せしめ、本邦印刷界の技術者を養成し斯業の發達に貢獻せんとするものである。

寫眞部。寫眞術の發明せられてより僅かに八十有餘年に過ぎずと雖も、其間斯術は長足の進歩を遂げ、現今にあつては社會各般の事物に盛んに利用せらる、即ち軍事、教育、商業、工業、工藝、又は社會教化、文藝、美術の研究、自然科学の研究等には殆んど斯術の援を籍らざるもの無し、特に寫眞術の一部門たる活動寫眞の如きは或は學校教育に或は社會教化又は民衆娛樂の機關として社會と離るべからざる重要關係を持つに至る。且つ又最近撞頭せる電送寫眞の如きも昨今に至つては電報通信の重要具なるに至る。されば寫眞術は今や一國文化の上に最も緊要なると同時に其前途多忙従つて其技術は非常に複雑となるが故に單に從來の如き徒弟的修業を経た

るものにては到底眞の寫眞技術者として立つこと能はず。故に本部に於ては其修業期間三年の前半に於て、主に寫眞基礎の智識を注入し、其後半に於て或は營業的、或は工藝的、或は科學的寫眞術を教授し、以て根底ある技術者を養成し本邦文化に貢獻せんとするものである。

(勝瀬莊一記)

日本齒科醫學專門學校

「九段ヶ丘の學び家」

護國の任にたふれたる
神の靈のしづめたる
九段ヶ丘の礎と
ともに立ちたる我が母校

我れ等の母校は靖國神社の森を背として芙蓉の姿を遙かに眺めつゝ地はよし九段富士見原にそより立つてゐる。

こゝに齒科醫學の奥を究めんと志す若人は全國からつどひよつて八百餘名。

これ等の若人は勿論入學試験の難關を見事突破した人ばかりなのだ。

卒業後就職難に悩まされる事が比較的少ない爲めか近年の

入學志願者の數はものすごくふえて來た。さしてむつかしくもない入學試験問題も志願者人員と入學許可人員との率の上からは中々むつかしくなつて來た。然しそんな事は問題じやない。要は學力ある者の勝ちに歸するより外ない。

こゝの教授、講師達は共に我が國醫學界に名ある人ばかりだ。この點は學の都の東京に存在するお蔭に外ならない。

こゝに來れば齒科醫學のみでなく醫學そのものゝ研究も出來得るだけの設備があるからうれしい。そのお蔭で最近の二年の間に醫學博士の稱號を得た先輩が數人ある。こうした事は醫學界から考へれば何んでもない様だが我々齒科醫學界にとつてはうれしい事實なのだ。これ等の先輩達は我が齒科醫學なるものを世界第二の地位までのし上げてくれた。米國齒科醫學に次ぐは即ち我が國なのだ。

醫學の國、獨逸より發達してゐるのだから痛快だ。卒業して米國の大學に行く人の多いのもこれが爲めだ。

スポーツに理解のある校長はスポーツのあらゆる部を設けさせてゐる。其他色々な趣味の會もある。こゝろみにそれ等の會を列舉して見よう。競走、柔道、劍道、蹴球、野球、庭球、ホッケー、山岳スキー、水泳、馬術、ピンボン、弓道の各部、又趣味の會としては自然科学、辯論、劇、映畫研究会、尺八會、紋樂部、洋畫部、短歌會、等々、なんでもある。これ等各部、各會の内容を書く事は紙數がゆるさぬから止すが、

入學すると共にこれ等のどの部かにはいらなければ面白くないと思はれる。カレッジマンとしての愉快さはこれ等各部に入部することによつて味ひ得られるのだ。

スポーツの各部は小金井のグラウンドに合宿して愉快に快活に練習してゐる。

帝都の醫齒藥聯盟のリーグ戦があらゆる部で行はれてゐる。就中野球のリーグ戦は我々若人の血をわかしたものだ。又附屬病院醫局などにもチームがつくられてゐる。この夏も、病院長が侍醫である關係から澄宮殿下のチームと赤坂御所内で試合をやつたうれしい思ひ出がある。

中學時代にほんの少しばかり劍道をやつた経験のある自分には小金井の道場にちよいと顔を出したものだ。日々新聞社主催の東都醫齒藥聯盟の劍道大會に出て我等のチームが優勝した時の愉快さも忘れられない。

六月一日の創立記念日の運動會がまた素敵なのだ。假裝行列の痛快さは帝都に於てすでに定評があるのだ。

かくしてカレッジマンライフを楽しむと共に齒科醫學の研究をおこたらない。

學校の規則は自由な様でとても堅いところがある。出席だけは絶対に嚴格だ。

一年に入學して先づD中に醫と書いた徽章をつけた角帽をかむつて充分得意になれる。それから死體の解剖をやつて少

々めん喰はなければならぬ。二年になるとカレヂマンの愉快さを一番樂しめる時だ、卒業前期試験を受けねばならないので一寸苦しい事は苦しいけれど、三年になると齒科補綴の實習と製作にうんと油をしほられるけれども上級生のよるこびを充分味はられる時だ。

四年生になると三年間かむつて来た角帽をぬぎすて、金ボタンの學生服をぬぎすて、新調の背廣服に着換えてしまふ。すつかりモダン紳士になつて、こんな奴がゐるたかな？ と疑はれる位シックになつてしまふ。なぜ背廣服となるかと云へば附屬病院に毎日出て十時から午後五時まで外來の患者に接するからだ。即ち治療に従事するのだ。従つて四年になると授業は朝の二時間だけしかない事になる。

病院に出た最初は實にめんくらつてしまつて三年間學んだ事も中々うまく使ひこなせないものだ。これも二ヶ月もすると殆んどなれて患者の取扱ひ方もうまくなる。

白衣を着てピンセットとメスをとる喜びはこゝに於て始めて味はられるのだ。

半年もたてば身に藥液の臭氣がすつかりしみこんでほんとに醫者らしくなる。

日々來院する患者は百五十名ばかりあるが其の大部分が御婦人なのは今もつて不思議に思つてゐる。殊に若い婦人が多いので最初は少々變な氣がしたものだ。が段々なれてしまつ

て皆んなすまして治療をやつてゐる。

かくして一年間の病院生活は愉快に送られるのだ。そうして研究にスポーツに興味にと有意義にカレヂマンライフが樂しめるのだ。

在學四ヶ年は、自分達の人格教養が充分向上されると同時に野暮な理想や、古い教育の殻をすつかりぬぎすて、全く洗練されたよき意味のモダン紳士となる事が出来る。

卒業論文に苦しむ頃になると往々にして就職の悩みにおそはれるものだが自分達の母校ではその問題だけはほとんど出て來ない。

たゞ卒業のよろこびを無精に感じつゝ愉快に校門を出るのみだ。

我等が九段ヶ丘の學び家に、なつかしの同縣出身の若人達がおしよせてくれたならどんなにうれしい事だらう、我等は両手をひろげて心から喜び迎えるであらう。そうして微力ながらどんな御世話もいとはない決心だ。

(本田明記)

東京醫學專門學校

東醫シヨウカイ

東京醫專の創立せられし動機は他校に比して大いに其の性

質を異にす、即ち大正五年五月當時日本醫專生徒四百餘名は學校當事者と意見を異にし紛糾半歳に及ぶも遂に解決を見るに至らず、學生は自ら總退學をなすの止むなきに至れり、此の時保證人會有志たりし現總理高橋琢也氏外四名は此等學生を放浪せしむるに忍びずとなし學生團と共に新醫專の設立を企畫せり、同年七月設立の議を決し、高橋琢也氏創立委員長となり同年九月醫專認可までの假施設として牛込區神樂坂町物理學校内に東京醫學講習所を開始せり、現校長佐藤達次郎氏教務主任となり其の他講師として清水茂松氏外二十名なり本醫學講習所は大正七年一月現在敷地東大久保に移轉す此れ即東京醫學專門學校の前身なり、現在に於ては在校生八百余名、卒業生二千名に達せんとす、卒業生中名譽ある學位を獲得せられしもの數十名の多きに達す。

職員として理事長高橋琢也氏。校長佐藤達次郎氏。教頭清水茂松氏。學生監高橋修治氏教授、助教として醫學界の重鎮たる大家二十數名及本校卒業生なり。

附屬病院は校舍に隣接す。
斯く由緒ある校舍も昭和三年三月不幸にも不慮の火災に遇ひ一朝にして舊校舍の大半及び病棟全部を失ふや學校職員並に卒業生、生徒は學て其の復興に努力し、或は調査に或は計畫に或は寄附金募集に一致協力して昭和四年十一月第一期復興建築の竣工を見るに至れり。其の間學生は一團となり、質

實剛健を旨としよく學校當局を助け第一期工事基礎醫學教室の竣工を見るに至りしは實に涙ぐまき至りなり。此れ東醫スピリットの一端をよく表はせるものなり。

新校舍露臺より西を觀るに、遙かかなたに清麗富士山を眺め、近くは新宿三越。ほてい屋。松屋等の大ビルディングを眼下に見下し東方は九段靖國神社の大鳥居をながめ、眺望良き事百パーセントなり。此の新建築は東大久保杏林に於ける一大奇觀なり。

次に學則の大略を記さん。

一、修業年限四ヶ年

一、受験資格

イ、中學校卒業生

ロ、專門學校入學者檢定規定に依る檢定に合格したるもの

ハ、同規定第八條第一號により指定せられたるもの

一、試験科目、語學(英語又は獨逸語)數學(代數、平面幾何)國語、漢文、物理科學(此は今年はなし來年は未定)

一、試験日(四月四、五、兩日、來年も同様ならん)

一、學費

イ、一年間授業料 百五十圓

ロ、校友會費一年間 十圓

ハ、一年間實習費 十圓

ニ、前期卒業試験科 二十圓
ホ、渡期卒業試験科 三十圓
ヘ、その他本代等

一、募集人員。約二百名

一、卒業生は東京醫學專門學校醫學士と稱する事を得

一、卒業生は無試験開業する事を得、参考として

一、陸海軍、郵船依託生を一學年より志願するを得、月五十圓手當給與さる

一、本年(昭和五年度)志願者四千名)

一、岡山縣人の本校入學率は、大正十四年より昭和二年に至るまで第一位にして一割七分九厘なり。昭和五年度は志願者七八名中合格者七名にして一割一分三厘なり、大いにほこるに足るものなりとす

おゝ我が同胞よ、縣人よ斯くの如きき頭腦を有する若人よ、我が東京醫專に來れ。頭に角帽を戴き東京の中心新宿を潤歩し將來醫師として立たんとする士よ來れ東京醫專へ。終りに校歌を御紹介し筆を擱く。

ヒボクラテスの名によれる

ギリシヤの昔、この道の

光明西のあさほらけ

東亞は更にはるかなる

神わのかけに香ふ跡

源流二つ斯とこれ

世々にひろめし威の

仰がざらめやとほとさを。

(市村勢夫記)

昭和醫學專門學校

昭和三年春、文部大臣の認可によつて、九州、岩手の兩醫專と共に我が昭和醫專は、東京市外荏原町旗ヶ岡上に設立されたのである。

旗ヶ岡は帝都の南、高僧日蓮の古跡ある洗足池に近く、緑り深き文化村で勉學に、住居に良き地である。池上、目蒲の兩私鐵道の間に位して居る爲交通至便の地でもある。總敷地一萬餘坪昭和四年の秋には、今日の化學の及ぶ限りのものを以て、附屬病院、分離病室の完成をみた。その他の殘餘工事も、本五年十一月を以て完了し、堂々三層の白聖館を横へ、内外共に現在日本醫學校中に於て、少くとも第一線に立つことは明かである。

現學長は東京帝國大學名譽教授岡田和一郎博士で、先生は我が日本が世界の醫界に於て誇り得る耳鼻科の大御所である。教授は帝大等全て日本に於ける醫界の權威者を集めてゐる。我學校設立の目的を簡単に記すならば、近來醫育統一論の盛

にして、多くの反對あるにも拘らず校長は斷然本校を設立されたのであるが、その理由は、スピード時代の、現代社會が要求する如く速かに社會に醫師を送り出しその職につかしむるといふことである。現在醫學校は數多く、多數の醫師の存在を認むることを得るも、尙現在の日本は、山間僻地に於ては醫師の不足を痛感されてゐるのである。然るが故に、此の文明の世に、生を享けながら、文明の利器を得ずして死す人の如何に多きか。こゝに於て我學校は紳士的精神をモットーとして、かゝる方面に向つて、大いに活躍せんとするものである。世人は未だ大學萬能を夢みて居るであらうけれど、急速に養成されたる醫專醫學士といへども臨床醫家としての實力は、決して大學醫學士に劣るとは考へられない。現在在校生六百を有し、第三學年が最上級である。昭和七年三月第一回卒業生を出す事になつてゐる。教授中に同縣出身醫學博士藤森雄平先生を有することは我等後輩の誇りであり、先生を中心に、岡山縣人會を組織してゐる。

學費。受驗料拾圓授業料年額百五拾圓。

(中井毅記)

東京藥學專門學校

位置 東京府豊多摩郡淀橋橋本
校長 藥學博士池口慶三

明治藥學專門學校

位置 東京市外荏原郡駒澤町
校長 恩田重信

本校は元明治藥學校と稱し大正十二年專門學校令に依る。卒業生六千名近く出身藥劑師數も三千數百人の多きに達し、校舎も新築完成し修業の便極めて宜し、修業年限三ヶ年授業料は一ヶ年百十圓なり。

二松學舎專門學校

大東京の中央九重の雲深き千代田の宮居を目のあたりに拜する麹町一番町の高臺に黙々と聳ゆる文化の殿堂それは入學以來限りなく懐しさを覺える我等が學び舎二松學舎專門學校の姿である。我等が創設三年を迎んとして内外共に活潑なる新興の景園氣に取まかれつゝ、確固たる基礎の上に堅實な芽生

えを育みつゝある當學園を御知らせしたいと思ふ。

本校の母體をなす二松學舎は明治十年十月十日大正天皇の侍講として有名な正三位勳一等中洲三島博士の創立にかゝり東都に於て慶應義塾に次ぐ古い歴史をもつてゐる。先生は學舎の創立以來常に親しく教授せられ教を受けし者實に七千人の多きに達した。先生薨去の後を承けて御令息雷堂先生校長の任に當り又その後任として現在の山田先生が七高勅任教授を辭し來任せられた。これより前中洲先生が先帝陛下の侍講であられた關係上本舎は屢々御下賜金の恩寵に浴した。即明治四十四年金三百圓本舎維持基金として御下賜次いで大正四年御即位の大禮に當り一萬圓御下賜あらせられた。この事によつても我が二松學舎が如何に光輝ある歴史を持つてゐるかが窺はれやう。常に仁義忠孝振りかざして人材を陶冶されたその結果二松學舎の送り出した人材は實に社會の總ゆるるる方面に活躍してゐる。で今云はんとする二松學舎専門學校は去る昭和三年恰度二松學舎創立五十週年紀念事業の一として今日の如き思想混亂の社會を指導する底の中等教員養成を主目的として實現したのである。設置要項にいへる如く當校の目的は歴史ある二松學舎を背景として堅實なる思想と正確なる實力とを具備する中等教員を養成するにあつて他の私大高師部が大學部の附屬としてまゝ子扱にされ勝るとはちがつて獨立した専門學校と云ふ強みがあり自由がある。かくした自尊

心と自由さをもつて我等が學び舎は進展しつゝある。尙專門學校設置の議起るや料に本校擴張資金として宮内省より金千圓を下賜せられた事もつけ加へて置かう。

本校は前述の通り國漢中等教員の養成が主目的であるから専攻科目の外に教育者として必要なる哲學とか心理とか教育論理論の様な理論的な學科を始め英語歴史法制等も課せられる。兎に角どこまでも教育家として恥づかしくない人格者をつくるのである。

位置 麴町區一番町四十六番地
目的 國語漢文の教授
年限 本科、別科各三ヶ年
學費 受験料金五圓、授業料年額本科金八十八圓、別科金七十七圓
校長 山田準

(玉置敬爾記)

東京文理科大學 東京高等師範學校

東都の北方大塚臺上に吾が東京高等師範學校は今や創立六十周年に垂んとする榮光に燦と輝いてゐます。滾々としてつぎなき若溪の流れは、之又我國教育界に日夜堅實な歩を致し

てゐます。

文學博士大瀨學長を戴き惠まれたる一千四百の學生生徒は國家教育の前途に一抹の焚火をかざすべく、穩健なる學風に育まれ今や精神文化の樹立と大塚文化の宣揚に勵んでゐます。加ふるに昭和四年四月より東京文理科大學は開設され新築校舎落成も近きにあり、將に教育本山としての名實共に完備せしは、大にしては國家教育の爲誠に祝福すべきであり之を小にしては青年學徒の途又開けたりと謂はねばなりません。

早稻田大學高田總長は「過去に歴史なく現在に方針なく未來に理想なき學校は、學問教育の市場であつて學園といふ文字には確と當符らないと思ふ」と仰せられました。誠に然り本校には輝かしい過去六十年の歴史があります。以上光輝ある本校沿革史を大略抜萃致しませう。

本校ハ始メ師範學校ト稱シ明治五年九月舊昌平校ノ遺跡ヲトシ諸葛信澄校長ニ任ゼラレ小學校授業ノ方法ヲ授ケシヲ以テ創始トシ翌六年附屬小學校ヲ設ケ同年八月東京師範學校ト改稱ス。翌七年五月

天皇陛下臨幸アラセラル。十一年中等科教員第一回卒業生十二名ヲ出ス。十八年東女子師範學校ヲ本校ニ合併サン翌十九年勅令第三十五號ヲ以テ高等師範學校ト改稱ス。同五月 天皇陛下下行幸アラセラレ次イデ 皇太后皇后兩陛下

行啓アラセラル。二十三年本校ヨリ女子部ヲ分離シ女子高等師範學校ヲ置カル。二十六年勅令第六十二號ヲ以テ東京音樂學校ヲ本校ニ附屬セラレ高等師範學校附屬音樂學校ト稱セララル。三十二年本校附屬音樂學校ハ勅令第十六ヲ以テ東京音樂學校ト改稱サレ本校ヨリ分離ス。三十五年嘉納治五郎校長ノ時勅令第九十八號ニ依リ東京高等師範學校ト改稱サル。三十六年四月小石川區大塚窪町ノ新築校舎ニ移轉シ(現位置)四十四年十月本校創立四十周年記念式ヲ舉行シ 天皇陛下御名代トシテ 皇太子殿下下行啓アラセラレ式場ニ於テ普通教育ニ關スル左ノ御決沙書ヲ文部大臣ニ賜フ。

御沙汰書

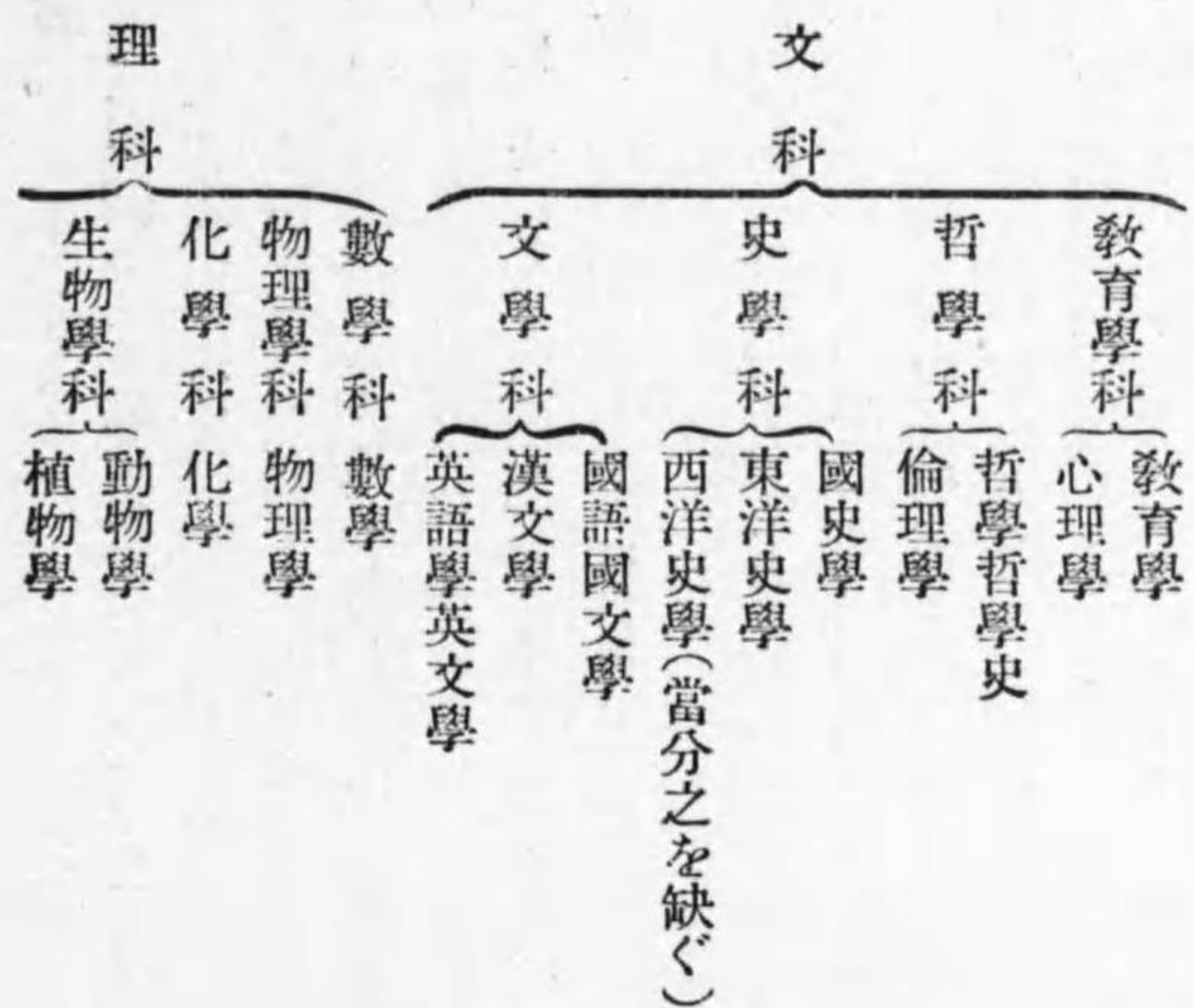
健全ナル國民ノ養成ハ普通教育ノ振興

ニ俟ツ其ノ局ニ當ル者益々勵精セヨ

大正十一年四月文部省告示、第三百四十四號ニ依リ本校内ニ第一臨時教員養成所ヲ設置サル。昭和四年四回勅令第三十九號ヲ以テ本校ヲ東京文理科大學ニ附置セラレ同年十一月三宅學長薨去十二月六日大瀨甚太郎學長ニ補セラレ以ツテ今日ニ至ル。

以上の通りにして其の間校長を經る事十五代十一人にして創立以來將に五十九年誠に其の依つて來る淵源は深いものであります。

東京文理科大學は昭和四年四月一日勅令第三十七號に依り設置され十二月大瀨博士學長となりて今年に及びます。本學の目的は大學令第一條に示されてゐる通り「大學ハ國家ニ須要ナル學術ノ理論及應用ヲ教授シ並ニ其ノ蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トシ兼テ人格ノ陶冶及國家思想ノ涵養ニ留意スベキモノトス」で明かであります。本學規定第五條には左の學科を置いてあります。



更に第四十二條には本學に三年以上在學し科目試験及論文試験に合格したる者は大學令第十條に依り學士と稱する事を得と規定され且つ第二十八條に依り在學期間は六學を越ゆる事を得ません。次に

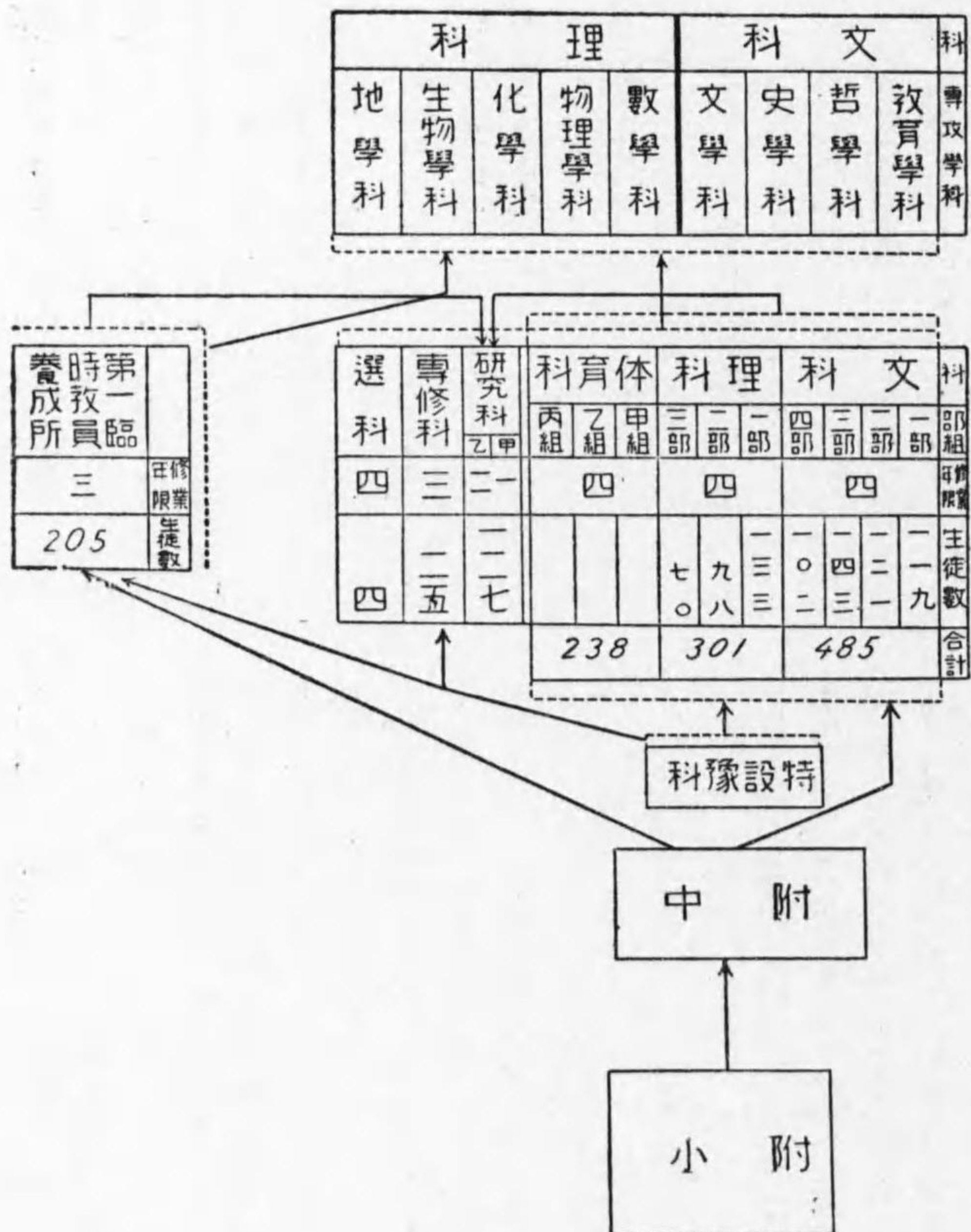
東京高等師範學校は校則第一條に依り師範學校中學校高等女學校の學校長及教員たるべきものを養成し兼ねて普通教育の方法を研究するを目的とし高等師範學校規則第一第三條に依り次の如く分類し得るのであります。



以上何れも修業年限は四ヶ年にして其の他に研究科(修業年限一年のもの及二年のもの)選科(特定科専攻のもの)あり、更に必要に應じ専修科を置く場合あり、特に外國校生にして本校入學の爲日本語教授を主目的とした特設豫科(修業年限二ヶ年)があります。

現在生徒數 (昭和五年六月一日現在)
 大學 一年一〇四名
 二年一一一名
 合計二一五名(但し三年缺ぐ)

高師 一年三五四名
 二年三二〇名
 三年二七六名 合計一一八〇名



四年二三〇名 次ぎに
 本校組織略圖
 文理科大學 高等師範學校

卒業生總數を略記致しますれば

文理科大学

高等師範學校 六三五五名 です

其の他詳細は略し誠に杜撰乍ら以上にて東京文理科大学東京高等師範學校を御紹介申上げます。

位 置 小石川區大塚窪町

校 長 文學博士大瀬甚太郎。

(山本記巖)

東京物理學校

一、東京物理學校規則抄、

一、理學の普及を助けんが爲め、修身、教育數學、物理學、化學、天文及測量を教授し兼て數學及び物理學、化學の教員を養成するを以つて目的とす。

二、本校には高等師範科及び別科の別がある。高等師範科を正科及び特科に分ち別科を師範部、普通部の二部に分つ但し各科の授くる學科目及び程度は皆同一である。

三、入學資格は中等學校を卒業したる者及びそれと同等の資格を有する者。修養年限は三ヶ年。卒業したる者には卒業證書を與ふ。但し高師科に於ては中等教員免許狀をも與ふ。

二、校風及び特徴。

物理學校は數學物理化學を専門とする専門學校である。生徒總數は晝夜各二千餘人。その中二年が百名、三年が五十名餘りにして他はすべて一年である。

一年生の中には修業を目的とせず、他の高等、専門學校の豫備として居る者或は徵兵猶豫等のために一時的に在學して居る者もかなり多い。

だから一年から二年に進級する者は毎年百人位で率から言へば一年が一番困難の様であるが二年から三年になる時も比較的困難と言はれてゐる。従つて一度や二度ストップするのは珍らしくなく中には七ヶ年、八ヶ年の在學生だと云ふ猛者も居る。

神樂坂を下りきつた所を右に這入ると小さな校舎がある。

大正十二年の震災にもびくともしなかつたと言ふがつちりした洋館。今は少々古い形である。こゝで頭の融通のきかない人間が育てられてゐると思はれてゐる。月謝は五圓。服装は丸帽にちみな洋服だ。どうしてもプロ、クラシカルの境を脱することは出来ない。

岡山縣出身者は三十名位居ると思ふ。講師には美作の出身の延原好一先生が居られる。

神樂坂と言へば神田に次いで學生の多い所である。此處を散歩する人々は、法大、早大等のゆつたりした學生の中に混

つて、物理と云ふ徽章のついた急がしさうに歩いてゐる學生を見るだらう。これが物理學校の生徒である。

位 置 牛込區神樂坂町二丁目

校 長 理學博士 中村精男

(津高毅記)

大東文化學院

本校は所謂思想善導の大本山と迄行かぬが少なくとも、一分寺である。その創立の主旨に本邦固有の皇道及國體に醇化せる儒教を主旨として、東洋文化に關する教育を行ふと、あるのを見てもわかる。

現今世界的不況に依る思想悪化は益々甚しきものありて、傳統を誇る我が帝國に迄も波及せるは實に苦々しき限りである。

勿論我々は此の傳統的精神を海外に誇り、將來に於ても保持して行かたければならないのである。此は我々第二國民の義務であり祖先に對するの務である。

勿論諸兄に於ても此の覺悟あるは常々信じて疑はない所であるが我々は互に教化し、練磨し此の傳統的精神の涵養に努力しなければならぬ普及しなければならぬ。その爲には教育が第一の必要物なる事は申すまでもない事である。此の思

想國難の時代に際して奮闘せんとする我々同志は速かに來れ我が大東文化學院へ、

本學院は今大手を擴げて諸兄の來り投するのを待つて居るのである。その一表示として中等學校卒業資格者は入學を許し授業料は全免にして、又給費制度を設けて勉學獎勵の一方法として居る。修業年限は本科三年高等科三年研究科一年にして、本科は中等學校、高等科は高等學校に於ける夫々漢文科の教員免許を受くるの持典が賦與されてある。

然らば待たん來年四月を、諸兄の集ひ來られん事を。

尙本校所在地は東京市麴町區富士見町六丁目である。

東京外國語學校

炬火だより

五十周年と聞いて私達は心から岡山縣青年會の發展を祝すには居られません。

扱て私達が普通會員として夫々の學校に學ぶ以上、自分の在學する學校を全員に紹介するのも一つの義務と考へて、次に私達の學ぶ東京外國語學校の内容を簡單にお知らせいたします。

毎年の設立記念日に校長が繰返して話される所に依ると、本校の沿革はその源を蠶書研究所に發して、後に大學豫備門

となり今の東京帝大や一高や商科大学と血を分けた兄弟分になつたとの事でありませぬ。そして文部大臣森有禮氏の手につけて中途廢校の憂目に遇ひましたが、明治三十年四月に商科大學の前身である高等商業の附屬として再び設置され、同三十二年にやつと外國語學校として獨立したのであります。この間の複雑な關係は毎年長屋校長の雄辯に依つて波瀾重疊たる講談の様に面白く聞かれます。

扱て現在の語部は、英、佛、獨、露、伊、西、葡、支、蒙、馬來、ヒンドスターの十一ヶ國語部、そして各語部が又夫夫、文科、貿易科、法科、拓殖科、の四ツ又は三ツに分たれてゐます。之等の各科が一緒になつて一つの學級を成してゐて、その生徒数は、或る語部では十名位しか居ない所もあり、また、その中の文科生と云へば一名しか居ない様な事もあります。然し一番多い語部でも一學級が三十名で、英語部第四學年丈は六十名近くも居ますので二つの學級に分れて居ります。

本校が運動の方面に振はないのは餘りにも有名な事實で、眞に遺憾に思つて居ります。その原因としては學課の詰込主義や、選手に特典のない事、校友會の僅少、等色々ありませうが、毎年入學して來る生徒の體格が一般に虚弱である事も又主なる原因であります。甚だしいのになると修業に堪えられなくなつて死亡したり退校したりする者も毎年數名居りま

ニ一語部(各部署文科、法科、貿易科、拓殖科の三、又は四に分る)

學費 試験料五圓、一ヶ年授業料八十圓
校長 長屋順耳。

(池田光敏記)

東京高等蠶絲學校

位置 東京府北豊島郡瀧野川町西ヶ原
校長 農學博士本多岩次郎

修業年限を三ヶ年とし、蠶絲業に従事する者に必要なる高等の教育を施すを目的として居る。科目には養蠶科、栽桑科、製絲科の三に分つ、然して授業料一ヶ年六十五圓とす。

千葉高等園藝學校

「人生は藝術なり」とか此は實に至言ではあるまいか。藝術なき人生は砂漠にも似たものである。人類は古來人生の美化にあらゆるものの藝術化に努めた。山川を風物を動物を或は植物をその風俗に従ひその習慣に従ひ之を藝術化さん事を努めたのである。實に藝術は精神上の食物であつたのだ、こと

す。最近學校當局もこの事實を重大視して生徒の體育に力を注ぐ様になりました。斯う云ふわけで運動競技の方面では全く自慢になりませんが、専門の語學は流石しつかりしてゐる。特に毎年秋に開催される語劇は特獨のものとして大いに誇る事が出來ます。種々の國語で演ずる劇を一場に網羅する様なプログラムは世界中でも唯一だと云ふ我等の言葉には冗談も勿論含んで居りませうが、實際演技や臺詞に於ても既に定評を得て居ります。

次に縣人會であります。私が入學した時には、岡山縣人會と云ふものはありませんでした。先輩に聞きますと以前には存在してゐたとの事でありませぬが、何時の間にか消滅したのでせう。そこで、青年會に刺戟されて是非本校内縣人會を作り度いと昨年あたりから協議を初めましたが、色々な事情で實行する事が出來ずして、漸く同年五月になつて復興第一回の縣人會を開催しました。先輩では吉岡源一郎、笠井鎮夫、田中芳助の三先生、學生は總計二十名の中半數以上出席して、一同懷郷談に花を咲かせて時の經つのを忘れませんでした。この縣人會は毎學期一回宛催し度いと思つて居ります。

位置 麴町區竹平町一番地

目的 外國語に熟達し實務に適すべき者の養成。

構成 英語部、佛語部、獨語部、露語部、伊語部、葡語部、支那語部、蒙古語部、馬來語部、ヒンドスター

に植物に對するそれは著しいものがあつた。

然して世の中の文明の域に進むにつれすべては科學化され合理化されて來た。従つて植物に對する藝術化も一つの科學として研究するに至つた。その要求のもとに生まれたのが當校である。我々の理想は實に永遠のものである。我々は人生に對する精神上的の糧の供給者だからだ。

我々の手により作られた庭園或は觀賞植物は人生に對する最も重大なる義務の一つをはたしてくれるものではあるまいか。

我々は聲を大きくして求む我と志を同じうする士を

本校には縣出身者理學博士川村清一氏教授の職にありて、縣人卒業生も數名あり。入學資格は勿論中學卒業程度にして修業年限三ヶ年、募集人員は約五十名にして、無試験檢定の特典あり。官立なり。

水産講習所

我が國は古來瑞穂の國と稱せられ、その天惠物多きを誇つて居た。事實は異つて居るが、然し水産物に關しては確にその名に恥ぢない。

四周包まれたる海中より採れる水産物は此の我が國の貧弱な經濟界をどれ程多く賑はして居るかわからぬ。それだけ我

我漁士の抱負は大きなものだ、少なくとも我國經濟の幾分かを料つて居るのだから。此のモダン漁士を養成するのが我が校の務だ。

諸君は海上生活を味はつた事があるか、あの夕陽日出の美はしさを見た事があるか。洋々たる海上波間にゆられながら月に故郷の思を寄すあのセンチメンタルな世界は我々若人のみに許された世界ではあるまいか。

諸君此の狭々しい國土を離れてあの自由な海上の生活を考へて見たまへ。心は跳らないか。我が國は我々漁士を待つて居るのだ、富源開發者たる我々を、すべてを裸にして飛び込んで來給へ、尙入學資格は中等學校四年修了者及その資格者にして、修業年限は本科(漁撈製造養殖)四ヶ年遠洋漁業科三ヶ年研究科三ヶ年別科一ヶ年にして授業料は全免の制度を取つて居る。

位置は東京市深川區越中島にして、現在我が岡山縣出身者にして、理學博士妹尾秀實氏が教授の職にある。

高千穂高等商業學校

位置 東京府豊多摩郡和田堀内村、
校長 文學博士川田鐵彌
授業料 一ヶ年金百二十圓

修業年限を三ヶ年とし、修身、書法及商業作文、商業數學、商業地理、商業史、會計學簿記、機械工學、商品學、經濟學、財政學、統計學、法學通論及民法商法大意、商事行政法、英語、獨語及佛語、商業學、商業實踐、體操、等の教授科目在り。

青山學院

本院と其の位置

青山學院は東京市外澁谷町綠ヶ岡に在つて敷地約三萬坪、省電及市内電車の便備つてゐる許りでなく、土地は高燥にして健康に適し、其の閑雅なる境内と壯大の校舍とは相俟つて青年勉學の好環境で在る。

本院の特色、目的。

青山學院は人格の修養を旨とし普通及び専門の教育を施すを目的としてゐる。隱健質實の學風と實用英語の優秀なることは多く本院の特色としてゐる處で殊に外人教師極めて多數なるをその特長とし語學研究の便頗る多い。

本院の現況

本院は今年四十七回の卒業生を送り出したが、創立以來卒業生を出すこと中學部二千二百高等學部一千四百名、神學部

二百五十餘名に達し内外到る所に本學の出身者を見、現に政治宗教實業の各方面に在つて重要な位置を占むる者少くない是れ主として青山學院の英語の確實なる知識と特殊の精神教育とに起因せるものに外ならないのである。

位置 東京市外澁谷町青山南町七丁目
目的 英文學、社會學の研究を爲さんとする者、英語科教員、又は實業教員とならんとする者及實業に就かんとする者の教育、並に基督教傳道及び其の他の基督教的事業の爲めに働かんとする者の教育。

構成 高等學部(文科、英語師範科、同別科、商科)
神學部(豫科、本科、別科、以上各三年研究科二年)

學費 高等學部。受験料五圓、入學料金五圓、授業料年金八十圓、學友會費年金八圓
院長 石坂正信。

(坂田義文記)

岡山縣青年會十五周年祝賀會

時 期 十月二十六日午後一時
場 所 小石川區植物園(地下車)
會 費 先輩四學十五錢
購 票 不論
岡 山 縣 青 年 會 長 花 房 太 郎

(祝賀會宣傳ポスター)

宿舍を尋ねて

財團法人鶴山館

一、沿革及び目的

鶴山館は明治二十四年十月の創設にかゝり、津山青年協和會を母體とするものである。來春將に創立第四十周年を迎へんとしてゐる。この間館長たりし人は、久原躬弦、久米井隆吉、山上兼善、須川賢久、平沼騏一郎、中澤澄男の諸氏及び現任の黒田英雄氏とす。

作州出身の學生を收容しその學業及び品行を監督するを以つて目的とす。同郷の親しみある者が家族的生活を續けつゝ、その中に社會的共同生活の貴重なる經驗を積むことを得べし協和會の目的は作州出身の先輩後進が互に協和し親睦を圖り統制ある團結の下に郷土の美風を發揚せんとするものである。鶴山館はその一つの機關として主として育英の事に當り、今日まで既に五百餘名の有爲なる人材を社會の各方面に送り出して社會に著しい貢獻を致せり。

二、入館手續

とあり。近況をうかゞひに先輩訪問に出かけるのは楽しみ多きことにして學期始め等比較的在館生の閑散なる折を見てこの企てをなす。

四、食費その他

在館生十三名、炊婦一名、七時には全部揃つて朝食をとる晝は缺食する者もありて、晩飯は五時半なり。食費は一日五十五錢、晝缺食者十錢引、其他の費用は食費一圓、文藝部費(新聞、雜誌)七十錢、電燈料一圓二十錢にて、普通費用合計約二十圓なり。

五、本郷區森川町一三二

在館生

新 兔 弘 男(美術學校)	堀 弘 之(日大)
末 澤 秀 雄(法大)	後 藤 博(帝大)
堀 正 己(帝大)	田 淵 修(法大)
津 高 毅(物理)	大 西 廣 志(慶應)
山 田 伍 郎(東洋大)	太 田 美 津 男(物理)
田 中 義 男(外語)	岡 野 實(早大)
田 口 周 造(明治)	

(堀正己記)

入館せんと欲するものは在京協和會員一名を保證人として願書に學業履歷書を添へ塾監を経て館長に差出し其の許可を受くべし。協和會津山支部長又は支部會員二名以上の保證若は津山中學校長の證明を以つて前項の保證人に代ふることを得。

新入館生は役員及び在館生列席の上にて左の誓文に署名せしむ。

- 一、此館に入るや忠孝を重んじ名節を勵み報國の精神を養ひ有爲の材幹と爲らんことを期す。
- 一、長を敬ひ幼を愛し以て切磋忠告の友道を盡す事。
- 一、約束を守るは勿論禮儀を慎み専ら勉學を事とする事。右謹んで之を誓ふ。

三、年中行事

盟誓式は適當なる時期を擇びて行ひ、津山青年協和會總會は秋季に一回、之を催し。在館生は春秋二回近郊旅行、隨時にピクニック、見學等に赴く。毎月一回必ず茶話會を催し、時折先輩の出席を仰ぎ座談會を開く。津山青年協和會雜誌を秋季一回出版し。以て館の現状、會員の消息を報告す。在館生のみにて毎學期漫録を編輯す。

毎土曜日の午後はピンポン、碁、音樂等仲々賑かなり。折々先輩の親切なる招待に與つて猛者一同腹鼓を打つこ

兒島塾の生活

明治四十三年一月、先輩諸彦の血の出るやうな御努力と、在郷先覺者達の御援助が實を結んで、小石川林町六六番地に花々しく呱呱の聲を揚げた兒島塾も、時遷り人變りて二十年百を算する逸材を輩出して、去る二月十一日盛大なる二十周年の祝典が舉行されたやうなわけである。

塾の存在意義とか價値とかについては、今更固苦しい言辭を弄する必要はないと思ふが今こゝに一つの例を引かせて貰ひ度い。昨年四月の或る夜の事だ。自分と小學校を同じくする後輩の一人が突然訪ねて來た。同人の話によれば、實は國の中學を出てから専門學校に進み度い希望を持つて居たが家庭の事情止むを得ず、その事を断念しなければならなかつた。が然し燃ゆるが如き向學心に驅られて東京に飛び出して來て終つた。初めは、苦學でもしてと思つて色んな職業に就いて見たが、いづれも豫期した結果を收め得ず、徒らに都會人の冷血を慨いて居たが、ふとした何かのはずみに、兒島塾の存在をきいたものだ、そこでもう矢も楯も堪らず、折しも夜の事ではあつたが、一枚の地圖を頼りに兒島塾を訪ねてやつて來たものゝ、中々見當らない、さんく探し廻つたあけく、やつとの事で見つけた。その時の話しを同人はよくする

が、僕も生れてこの方、何が嬉しかったと言ふても、あの時あの御粗末な破れかゝつた門燈に兒島塾の字を見つけた時位嬉しい事はなかつた、全く自分は救はれたと思つた」と。私は今こゝに、此の兒島と言ふ字、救はれたと言ふ心持こそ、吾が兒島塾の存在意義であり價値であり使命であり兒島塾そのものゝ總てであると信するのである。成程都會の風は冷めたい、田舎者と見れば一樣に輕蔑の眼を送り、あまつさへ、機會あらばそれを利用せんとするが如き、言語に絶する不徳漢、否、非人間的存在のうよゝゝして居る所だ。火の如き希望に燃え、暖い父母の手を離れて上京した青年に取つての堪へ難い苦痛は、私利私慾に汲々たる都會人士の不人情だ、其處に、暖い胸をひろけて待つ同郷先輩の集ひがある、同じ經驗をなめて來た同志が居る、これが即ち吾々の兒島塾だ。

今少し抽象から具體へと這入つて行かふ、現在の兒島塾は六人の塾生が相互に暖い兄弟愛を以て、美しい一家の如き生活織り出しつゝ、勉學し運動し談笑して居る。塾長に小山左文次氏を、龜高德平、多田靜夫兩氏を理事にいたゞいては居るが、總ての事は塾生の自治に委されて居る。圖書室の壁には、小松原英太郎先生の御揮毫にかゝる「荒怠相誠」の額が嚴然と掛つてゐる。その下で各人思ひ／＼の道に精進して居るのだ。塾庭も元は廣かつた。テニスコートが二つも取れた

然し乍ら迫つて來る財政上の壓迫は遂に、一つのコートさへ取り得ぬ慘めさとはなつたが、それにしても、球投げ、砲丸投げ、機械體操等には不自由を感じない。下宿屋の事を考へれば有難い事だ。塾の一隅には花園があり、塾生の手で育てられた四期折々の花は咲き亂れ、讀書に疲れた眼を慰め、靜かな美的情操を養ふて呉れる。室内には、ピンポン、圍碁の設備があり雨天の勉學の餘暇の慰安となる。又春秋二回塾生打ちつれて郊外散策を行ふことになつて居る、それに毎年二月十一日紀元節の當日塾先輩、關係者等の臨席を仰ぎ、盛大なる創立記念祭を催する。又時には先輩名士の御來塾を乞ふて有益なる御講話を願ふ等、我々の修養に益する點が多い。

兒島塾は、各塾生の寝起きする六疊六室（上下各三室）食堂、圖書室兼應接室、女中部屋等よりなる。一名の女中を雇ひ、是に塾内の雜務を任せてゐる。月末には總員で會計決算をやる、食費學費共一人宛月額二十圓内外で上る。お互の家であるから氣樂な事はこの上もない。名は兒島塾だが、室の開いて居る限り他郡の人も入塾し得る事になつて居る。又若し故郷の人にして東京見物にでも上つて來られた節は、喜んで御宿をし、四方山の故郷の話と、名所案内の交換教授も成立する。

大體上に述べたやうな状態の下に吾々六人は、暖い空氣に包まれ、恵まれた學生々活を續けて居る。一度塾に入れば、

七は恰も異郷に我家を見出したる如く何等の不安何等の不足をも感ずる事なく、和氣霽々の中に勉學を續ける事を得。恐らく東都に於ける學生々活を終へる迄は退塾しやう等考へる者絶へて無く、而して愈々業成り名遂けて塾門を出づるも、機會あらば塾を訪ね、塾生と談笑する事恰も己が故郷の家に歸省して懐しい兄弟達に顔を合せる時の如くである。彼を思ひ是を思へば、兒島塾たるや正に我が郷土の起せる最も意義ある文化事業の一と言ふべく、先輩諸賢の勞や誠に感謝すべきである。さらば吾々は、現在の幸福に徒らに醉ふ者でなく將來に對する責任と覺悟とを以て、諸先輩並びに郷土に對する義務を果さん事を希ふ者である。

最後に、現在塾生の名を連ね、兒島塾の榮光を祈りつゝ、筆を擱く。

高原道 治（東京帝國大學卒業）

宮田本英（早稻田大學在學）

秋山托夫（明治大學在學）

岡野富士雄（東京帝國大學在學）

原田親（東京文理科大學在學）

岡本勇（駿臺高等豫備校在學）

（以上入塾順）

位置 小石川區林町六六番地

（宮田本英記）

岡山縣武學生養成會

一、本會は岡山縣出身の篤志家及陸海軍將校九百餘名を會員として組織したる財團法人であつて創立以來二十餘年の歴史を有する陸海軍將校生徒志願者養成の爲縣下唯一の育英團體である。

二、本會の目的は岡山縣人の子弟にして陸軍幼年學校、陸軍士官學校豫科、海軍兵學校、海軍機關學校、海軍經理學校等に入學を志願する者を奨勵し之に各種の便宜を與ふるのである。

三、本會が前項の目的を達する爲目下實施しつゝある事業の主なるものは次の通りである。

- 一、將校生徒志願者にして學資の乏しき者に學資を貸與すること。
- 二、將校生徒志願者に對し修學上の便宜を與ふること。
- 三、在京將校生徒の訓育指導を爲すこと。
- 四、本會より學資の貸與を受けて陸軍海軍將校に任官したる者既に八十九名に達し、又目下貸與を受けつゝある者五名ある。
- 五、將校生徒志願手續、補習教育、通信試験、學資貸與に關すること等は岡山支部に照會せらるれば直に詳しき御答を

する。
六、本會の事務所は東京市四谷區坂町六六に又本會支部は岡山市南方一一八にある。

岡山縣武學生養成會補習教育及通信試験の件

- 一、本縣人にして將校生徒志願者には召集試験準備の爲め本人の希望に依り補習教育及通信試験をしてあげます。
- 二、補習教育及通信試験は士官學校豫科及海軍諸學校志願者の爲めには中學校第四學年以上、又幼年學校志願者（通信試験の）の爲めには中學校第一學年以上又は高等小學校第一學年以上の人にしてあげます。
- 三、補習教育及通信試験に要する經費は、總て本會で負擔します。但し夏期林間學校を開いた時には食費だけは徴收します。
- 四、補習教育用の消耗品及受験用参考書は出来るだけ本會から支給又は貸與します。

岡山縣武學生養成會學資金貸與の件

幼年學校生徒を命ぜられたる者には本人の願に依り同校へ納附すべき學資金として毎月自費生には金二十圓宛半特待生には金十圓宛を會から貸資します。

備中館記

備中館は明治三十四年十月備中會の一事業として當時の先輩の義舉に依り創立された。其の後も備中會の諸先輩の後援を受けつゝ大正二年に至り二十五名の有力なる評議員を擁する財團法人となつた。創立以來館長には温顔の阪谷男、副館長に洒脱な木村清四郎氏を戴き今日に至つてゐる。場所は東京市小石川區原町一二六番地にあり、後には植物園の森をひかへて高燥閑雅な一廓である。周圍に植込みを持つた和風の簡素な建物には過去幾十百人の先輩達が學問を勵み時勢を論じ詩歌を誦した事だらう。館生の定員は十七名、廊下をはさみ階上階下に分れた部屋は合せて十九、内一つを當てた圖書室には諸方より寄贈され或は購入した圖書が所狭きまでに並べられ他の一つの學僕室は郷里の苦學生を容れてゐる。廊下は又別に通じて十五疊の食堂兼談話室があり、その片隅の大火鉢のほとりから館生の様々の言が沸き上る。又此處に提げられた「正心正意」と云ふ三島中洲先生の文

字は館長のよく引いて館生を諭されるところ。

食堂より南面してテニスコート鐵棒など身體練磨の設備あり、其他貯部屋湯殿の設けあり。館庭にある七本の老櫻は館生の愛惜おく能はざるものにして、是を要するに青年琢磨の至境である。

其の組織は上に理事阪谷芳郎、木村清四郎、池田茂幸、安延郁太郎、堀豊太郎の諸氏、監事に守屋此助、高杉晋、橋本卯太郎の三氏が居られるが館内の事は創立以來の自治制を誇り館生の互選に依る三名の幹事が事務を取つてゐる。

内に寄附による維持資金の備へがあり、館生一人の支出費用月額約二十三圓でやつてゐる。自治制ながら又先輩との交遊を忘れず春秋二季の備中會總會は固より、其他機會を作つて親しく先進の薫化誘導の道を開いてゐる。

良き設備による日頃の勉學は云ふに及ばず、毎年十月十七日の創立記念祭には先輩舊知相集りて共に楽しみ記念旅行に友情を深める。

然も本館の特徴は開放的で而も互に親しみの深い點にあると思ふ。

様々の學校色々の變つた學生が睦み合ひ備中辯丸出で話す中に互に啓發されて行く。

創立以來年を閲する事三十年。其の間二百五十人の有用の士を社會に送つて館の前途は正に洋々たるものがある。

「入館御希望の方は御遠慮なく東京市小石川區原町一二六備中館幹事宛備中館々則御請求を願ひます」

（備中館在館生姓名）

日本大學法學部	同 右	日本醫學部	同 右	日本醫科大學	同 右	東洋大學專門部	同 右	東洋大學文學部	同 右	明治大學專門部	同 右	東京商科大學	同 右	日本齒科醫專	同 右	專修大學專門部	同 右	東京帝國大學工學部	同 右	早稻田大學豫科	同 右	同學專門部	同 右	東京物理學校	同 右	日本大學專門部	同 右
榎野伯之	鈴木秀次郎	佐藤正彦	間野茲一	小池憲石	橋本恒雄	安那泰二	梅野典平	赤木京平	加賀山潔	太田浩	山足稔	田中弘	谷口誠	小川泰													

所 東京市小石川區原町一二六備中館

（太田浩記）

精義塾を語る

私が今、精義塾につき語らんとして如何に遲疑しつゝあるかは讀者の充分御了察下さる事と思ふ。何となれば精神團體としての塾を具體的の文字に表象することが如何に困難にして往々世の誤解をまねく虞あることを充分に知つてゐるからである。加之、かゝる、限られた時間と許された紙数の範圍に於ては充分私の意を盡すことが出来ないことを恐れるからである。然し私は差し當りこの仕事を爲さなければならぬ。私今日は精義塾をその全體性に於て觀ることを斷念して只我塾の特殊性についてのみ語ることに満足し爾餘の點については直接塾の諸機關を通じて知悉されんことを希望する。以下諸君の御了解に便せん爲(一)歴史的考察(二)本質的考察二節に分つて紹介することにす。

一、歴史的形過程より觀たる塾

私の塾に關する話は今より約三十七年の昔に遡る。當時東都に遊學せし同郷の士の勉學上の困難は如何にして健全なる住居と人格練磨の道場を持つかにあつた。殊に同郷の先輩の未だ少なかつた當時に於てその困難は後者に於て甚だしかつた。我義塾の創始者と目されてゐる池田經三郎氏、水川復太氏、岡三藏氏、故中山已代藏氏湯島新花町に初めて自炊の共同生活を起されたのもこの健全なる住居と自治的人格修練の道場を持ち度いと云ふ根本的要求からであつたと思ふ。と同

郷先輩諸氏の精神的物質的支持によつて漸くにしてその存立のみは維持することが出来た。この塾の經濟的危機を救つたものが維持會の創立であつた。その後この維持會は永く塾の維持助成の使命を盡し後述の如く財團法人として引續かるゝまで存續してゐたのである。

之より先き我塾は種々なる事情の爲居を或は表町に、或は新諏訪町に續いて久堅町に金富町にと轉々として移轉し終に今日の竹早町に落ちつく事が出来た。これも舊藩池田家の永代無料貸供地の賜であつて御厚志に對しては厚く感謝の意を表する。

明治三十六年塾多年の懸案であつた塾舎建築成り茲に初めて塾員自らの手に成つた新塾舎を持つ事が出来た。その後同郷の士の入塾を希望せらるゝもの益々多く塾舎も次第に狹隘を覺ゆるに至り明治四十一年之を増築し終に舊塾舎の完成を見新塾舎の再建まで永くこれに依つたのであつた。その後の十年間は多少の困難はあつたが我が塾にとつては比較的平和な時代であつた。

大正六年花房監督塾員悲歎の中に終に御他界遊ばされ、我々塾員はその精神的指導者を失つたのである。その當時評議員の一部に於ては同郷の先輩小松原英太郎先生をその後繼者として戴かん事を斡旋した人もあつたが塾内部に於ては塾も創立以來二十有六、七年、最早や獨立自治制の確立しては

時に續々として上京して來る同郷の後輩の爲かゝる共同生活を一定の組織に擴大強化せんと企及するに至つた。即ち丁度明治二十六年五月の頃であつた。前四氏は塾設立の計畫とその趣意書を發表し、同郷にして志を同じうするものゝ來り投せんことを勸説したのであつた。偶々當時負笈上京した津田弘視氏、故筒井繼男氏、飯田久太郎氏、香川讓三氏、額田豐氏、齋藤清太郎氏等の來り參するもの多く同年九月新たに居を本郷區元町に定め故花實義質先生を監督と仰ぎ獨立自治切瑛琢磨の大道場を起し、花房監督より「精義塾」の名をたまはり茲に名實共に義塾の基礎は建てられたのであつた。蓋し塾の名を以て冠せられたる舊藩の塾、郷友會、育英會の名を以て與へられたる郷土的團體はその數が多かつたが我塾の如く同郷學生の自發的しかも獨立自治他の勢力の干犯を許さなかつた修養團體は稀に異數の例であつた。然しかゝる榮光ある團體に必然的に俱ふものは經濟的の困難である。我塾も亦その例にもれなかつた。當時の會計状態は甚だ微弱であつて月を重ね年を追つて重過して行く經濟的負擔に堪へかねて一時は塾の存立さへ危機に瀕した。こゝに於てか他の第三者より經濟的援助を受けこの儘塾を存立せしむべきか或はかゝる經濟的援助は塾獨立の精神にも背き設立の趣旨にも反するを以て寧ろ塾は一時之を閉鎖するの止むなきをさへ唱へらるゝに至つた。然し幸なるかな、花房先生始め舊藩池田家及び同

如何との論旺となり小松原先生又これを諒とせられ終に精義塾は全く監督の制を廢し愈々茲に塾は評議員理事幹事會計監督によつて統制するゝに至つたのであつて我が塾史上この期を以て自治制の確立期と稱してよと思ふ。

大正十年に至りさきに精義塾維持助成の目的を以て創設せられたる維持會を整理し之を精義塾に併せ財團法人を設立しては如何との意見評議員塾員間に起り殆んどその賛成を得たのであつたが阪神地方塾外員之に反對するものありこの舉も挫折の止むなきに至り遷延年を重ねて居たが大正十四年に至り終に塾員間の意見まとまり維持會を整理しその職金を精義塾に併せ終に今日の如き財團法人組織を見るに至つたのである。この問題を中心としても塾の獨立に關し塾員間に黨々たる議論をかましたのであつたが紙數の都合上之を割愛し只その爲に戰つた尊き犠牲を想起するに止めて置く。

その頃に至りさきに持つた我々の塾舎も次第に朽廢に傾きかけたので塾舎改築の議起り塾外員在塾員の犠牲的努力によつてその計畫着々として進捗し終に大正十五年之が完成を見塾は内容外觀共に安定期に達するを得た。然し塾の發展は寧ろその將來にある。今や塾員は經濟的基礎を愈々確立し塾内部の統制と充實とを得て大いに將來の發展を期してゐる。

二、實質的内容より觀たる塾

以上に於て私は塾の今日に至つた歴史的過程を語つた積りであるが以下に於て現在の塾に就て若干語つて置き度いと思ふ。

前述塾設立の趣旨に於て一寸ふれて来た様に精義塾は同郷の人にして志を同じうするものゝ學術修練人格陶冶の目的を以て集つた家族的自治團體である。然し今や郷土的封建的觀念は時代の容れざる所となつた。従來備前を中心として集つてゐた我塾も次第に岡山縣下一般に及び更に今日では廣く人材を全國に求め同志を糾合して愈々塾旨の貫徹に向はんとしてゐる。而して我塾のモットーとする所は家族的團體としての精義を重んじ氣節を尙び士魂商才以て國家社會に奉公の誠を致すにある。以下私はこの塾旨を中心とした基礎的觀念に先づふれて行き度い。

自治團體としての塾は飽くまで獨立と自治との擁護に勉める。さきに私は塾史を按ずるに當つて我々の先輩が如何にこの塾の獨立と自治の擁護確立の爲め碎身抗争を續けて来たかを多大の感謝を以て觀て来た。蓋し自治團體に於て第三者によつて經濟的優越が獲得される時は即ちその團體の存在の基礎と意義の失はれる時である。故に將來我が塾が自治體としての存立を維持しその充實を計らんとすれば我々は資本の干犯に對して極力之に抗争すると同時に自足的經濟の基礎を確立しなければならぬと思ふ。現に塾員は汝々として之が

努力に向つてゐる。私は今塾の獨立と自治とに關して語るに當つて塾の自治體としての統制と機關について若干言を費し度いと思ふ。

塾は現在財團法人と云ふ組織を採つてゐるがこれは只塾の形式的な一面に過ぎない。塾が塾としての特殊性は飽くまでその歴史性と倫理性とにある。勿論法人であるからには監事理事等の諸機關によつて形式上統制され執務され塾内部の執務は在塾員によつて行なはれてはゐるがこれは飽くまで塾の實質ではない。

塾の實質はそれ等の諸機關を初め塾外員諸氏を通じて獲得されて行く一定の教導觀念によつて統制されてゐると云ふことである。これが即ち前述の塾旨と云ふ形にあらはれてゐる。我々はこゝに塾統制上、即機械的統制と人格的統制との二元性を一元性にまで揚止して來てゐるのである。

次に私はこの自治體とその統制に關聯して塾の家族團體的性質に關して述べて置く必要を感じる。塾は前述の如く、郷土を中心として集つた家族的團體である。勿論この家族的關係は純粹家族形態に觀る如き自然發生的のものではないが郷土を中心とし且つ志を同じうする共同團體構成員の間に自然に湧く情義的觀念を基礎とするものであり且つ此の情義的觀念を持つ心構を有することが我が精義塾員の倫理的要請となつてゐるものである。故に我精義塾員間の關係は常に共同生

活中のみの關係に止らない。在塾員は塾を出づれば塾外員として大家族的團體の一員として塾時代と同様に相互切磋研鑽の效を積み且つ後輩誘導の任に當ることとなつてゐる。此くして情義を重んじ長幼の序をわきまへることは我精義塾員間の根本的要請となつてゐる。

次に私の語り残してならない事は塾が目的團體としての存在であることである。塾は決して單なる社交的團體であつてはならない。世に應々郷土的團體にして且つ目的團體としての美名を有するに拘らずその實質に於て社交俱樂部的存在に墮する傾向ある際特にこの點は強調せられなければならないと思ふ。塾に前に塾旨に掲げた様に國家社會的目的に協力することをその設立趣旨とする。従つてこの趣旨に對して志を同じうする者にして且つこの目的に協力するに適する人材を求むるや自然の要求であらう。然し我々は人の才能の先天性を首肯せなければならぬと同時に人爲的努力の補充性を認めらる。故に我々が塾員として歓迎するものは、努力なき逸才よりも却つて努力ある遅鈍である。眞面目にして志を同じうするものはこの點に關し辱恥的遲疑なく振つて入塾を希望せらるゝ事を歓迎する。

私は最後に簡單に塾の現況を報告して塾に對し關心を持たれる方々の爲の參考に資し度いと思ふ。

○役 員(十一名)

評議員 八名
監事 一名
理事 二名

尚この外詳細なる點につき知り度き人は直接本塾へ御照會下さるなり塾報なりにて御承知されん事を切望する。

在塾員

島居博通	東大工學部
藤原正	同醫學部
米田優	同法學部
深谷克海	同工學部
竹井素行	同工學部
司波素實	同法學部
西下止夫	同醫學部
國富郁夫	同醫學部
野田遙	同法學部
狩谷淨太郎	東京工業大學
時實利彦	東大醫學部
菅實熊	同經濟學部
上岡敬一	慶應義塾大學豫科
横田信夫	東大法學部

會館設立趣意書

我が岡山縣青年會は明治十二年に創設されてより既に五十年を閲し、今日六百餘名の特別會員をもち、數千名の縣人學生の親交のために存在してゐることは最も大なる誇である、一私會にして半世紀の久しきに亘りて繼續し、なほ且益々隆昌に向へるは蓋し天下に稀有なりと信ずるのである。

本會創立の趣旨は『良友を得て親交を結び互に學術品行を切磋する』にあつたのである。これは昭和五年の今日も明治十二年の往時と同じく標榜することの出來得る立派なる目的であると思ふ。而して往年は會員も少數であつたので、或ひは花房邸とか或ひは當時の委員長邸とか、又は他の先輩の私宅に度々集合して、互に切磋琢磨を加へ和氣霽々として本會を樂しんでゐたのであるが、時世の推移と會員の激増したためか、今日は學生相互の連絡さへ同一學校は愚か同じ學年の間ですらうまく行かぬのである。又先輩と學生の接觸親交についても遺憾の場合が少くないのである。

かやうに考へて來ると現下及び今後の青年會は、或ひは全然存立の意義がなくなるのではあるまいかと云ふ疑念も生じて來るのである。之を救済し以つて本會の目的を貫徹せんとするには、會館を設立して會員集合の利便を圖るより他に良策はないと思ふ。若し建築が不可能ならば借家でもよい、借室でも仕方がない。今日の如く共に語るの室無く、共に集るの家がなくは吾等は路傍に彷徨してゐると同様なのである。路傍に佇んでゐては切磋琢磨は出年ない。親交好誼の途も開けぬではないかこゝに於て吾等は一に先輩の血と涙に依頼するのである。縣人三千餘名の子弟のために、何とかして集合所の實現を願する本會五十周年の記念事業として之れほどに適切なる急務はないと信ずるのである。

設立後の事業計畫

- 一、岡山縣青年會館を建設し左の諸事業を行ふ。
 - イ、岡山縣諸團體の事務所に充つ。
 - ロ、岡山縣關係の諸集會の會場に充つ。
 - ハ、本會は毎月數回談話會を催し、會員相互の向上と親睦とを圖る。之は全會として行ひ又は組合を單位として組合毎に行ふ。
 - ニ、本會は基金の充實を俟つて獎學資金を學生に賦與し勉學を獎勵せんとす。
 - 三、各地に支部を設け、岡山縣地方及各支部間の連絡を圖らんとす。
 - 四、時々會員相互の親睦を計る爲め、遠足、運動競技會等を催し、又は學生の研究の爲め擬國會、討論會を催さんとす。
 - 五、會報は將來少くとも年三回位發行し、特に學生の投稿を多く掲げんとす。又文藝、一般科學に關して學生より懸賞論文を募ることとす。
 - 六、本會の基金を増成し、學資に困窮せる學生に貸費するの制を設け又就職相談に應ず。
 - 七、岡山縣物産の紹介宣傳を行はんとす。
 - 八、縣人又は縣關係の修學旅行等團體上京の際便宜を圖らんとす。



本會記事

(氏耶太静本松トツカ)

昭和五年度新年會

昭和五年一月二十八日午後六時より本會新年會は神田多賀羅亭に於て開催された。委員長花房太郎氏の開會の辭に次いで池田茂幸、岡田忠彦、難波元弘の諸氏等の談話の後、木村清四郎氏は特に今春卒業すべき學生に送別の訓話をなされた。之に對して大東文化學院學生江見章夫君が卒業生一同を代表して答辭を述べ尙各卒業生は交々立つて自己紹介を爲し、將來の抱負を語つて意氣壯んであつた。

デザートコースに入つて廣瀬彦太氏、荻野正孝氏のテーブルスピーチがあり、陶浪捷太君は會館設立運動の經過を報告して各位の一層の御援助を切望された。

近藤敏明君の呼び上る聲に感じて抱腹絶倒的な福引の公開が、満場の氣分を愈々高潮させたとき、關西中學出身の人々により、「私しや備前の岡山育ち……」
「おかし岡山御存じか……」
が唄はれて豊かな郷土情調が皆の胸に浮ぶにつれ、小山善太郎老までが「南洋土人の歌」を紹介されるやら、正宗直三郎氏が都々逸を唸られるやら、賑やかに新年を壽ぐ宴は續いて來會諸氏の記念署名を終り會を閉ぢたのは夜も既に十時に近かつた。

岡山酒造會社(山崎定太郎氏)其他から恒例の通り清酒及びビール、シトロンの御寄贈のあつた事は感謝の至りであつた。
左に來會先輩諸氏の芳名を掲げる。(五十音順)

淺沼龍吉 犬丸鐵太郎 飯田久太郎 池田茂幸 磯部恂一郎 今井清徳 入江縫 荻野正孝 川上幸一 上山辰二 鶴高德平 岸本綾夫
本村清四郎 黒田英雄 小山善太郎 近藤彌壽太 坂本徳二 佐藤武三郎 島田茂 高木義幸 田邊爲三郎 田邊綾夫 土居功一 鳥取快太郎
中桐春太郎 長田曉玄 中村道四郎 西村傳藏 額田嘉晴 難波元弘 平賀義典 平賀潤二 藤島宇太 堀尾萬三郎 廣瀬彦太 原田芳太郎
原田軌一 正宗直三郎 前川遜 水島庄平 山室榮作 吉田英雄 學生は約九十名

昭和五年春季委員會

四月十四日東京朝日新聞社に於て開く。會議に入るに先だち學生幹事相寄り役員改選につき候補者の内銓衡を行つた。松本前幹事は會則變更に就き其の内容を詳細に説明報告す。格別の御意見も出なかつたので御承諾ありたりと看做す。淺尾幹事年金收入の結果を報告し會員數約三百八拾名金額約八百四拾圓なる旨を報ず。役員改選につき學生の舉げた候補者に就いて先輩學生謀議し結局會長に一任となる。候補者氏名左の如し。

理事七名以内 犬丸鐵太郎氏 島田茂氏 道家齊一郎氏 平松市藏氏 美土路昌一氏
監事三名以内 荻野正孝氏 島山藏六氏
評議員 若干名(氏名は省略)

理事二名監事一名は未決定なるも當分の間この儘にて進むこととす。
常任幹事四名 淺尾寛一君 木山博精君 三浦武夫君 佐藤甲子郎君
幹事 前年度幹事卒業後新幹事未定の向は至急補充すること。
次いで總會開催の件につき討議の結果

日時 五月二日午後六時

會場 日比谷公園松本楼(第一候補)

九段偕行社 (第二候補)

會費 特別會員金參圓普通會員金五拾錢

と定まつたが美土路氏より交渉の結果、會場は松本楼に決す。本日左の決議があつた。

一、本會創立五拾周年記念式典を行ふべき事。

二、其の準備委員を設けること。

但しその委員の人は選は追つて行ふ。

本日の來會者左の如くであつた。

花房氏 野中氏 岸本氏 中桐氏 道家氏 美土路氏 犬丸氏 近藤 森安 木山 西下 淺尾 三浦 片岡 佐藤の諸幹
事並びに鳥取 松本 平井の三前幹事。



昭和五年春季總會

五月二日午後六時日比谷公園内松本楼に於て開催された。昨秋の總會に於て會則を變更する旨の決議があり其の具體案は委員長一任となつてゐるが、愈々豫て成つてゐる案を總會の劈頭に議事にのせて可決され其の實施を見る事となつた。次いで新會則による役員の改選を行ふ事となつたが候補者に就き學生達の希望が客れられて左記諸氏の就任をみるに至つた。(イロハ順)

會長	花房 太郎氏	道家齊一郎氏	平松 市藏氏
理事	犬丸鐵太郎氏	島田 茂氏	(二名缺員)
	美土路昌一氏	荻野 正孝氏	(二名缺員)
監事	島山 藏六氏		
評議員	若干名(追つて定む)		
常任幹事	淺尾 寛一君	佐藤甲子郎君	木山 博精君
	三浦 武夫君		
幹事	若干名(前年通り)		

次いで會長は本春を以て本會創立以來滿五拾周年を閲したるを以て今秋を期して記念式を舉行し併せて記念事業を行はんとする案を述べられた所滿場の賛可を得た。學生幹事一同より會館設立の要望が強く主張され決議文まで出てゐるので記念事業の一として之が設立實現に努力する事となつた。それに就いて特に記念事業委員を設けて其設立運動を起すこととなり左記諸氏に御就任を仰ぐことに決し後すべての方の御承諾を得た。

淺沼 龍吉氏 有松 昇氏 太田 收氏

大橋 信吉氏
金平豊次郎氏
龜山 孝一氏
川端 審三氏
坂田 倫三郎氏
正宗直三郎氏
中川 審氏

及び、現在青年會々長、理事、監事前幹事並びに現幹事。之は佐藤幹事が讀上げて賛成を得たものである。

以上で總會の議事は終り、久方ぶりに出席された馬越恭平氏は壯時の回想を交へて挨拶を述べられた。淺尾幹事の會計報告が終つて食堂に移り一しきりフォークとナイフが忙しく動き、ビール、シトロンの廻るにつれ、例年にも増して春の宵に適しい和やかな雰圍氣に一同浸りきつて白髪禿頭の老先輩も若齡氣鋭の學生も共に郷土を同ふする者の喜に宴は續いた。

デザートに入つてから例によつて會長の指名により左の各氏は何れも興味溢るゝテーブルスピーチを試みられた。

一番槍は新進市吏員鳥取快太氏である。氏は本會幹事として永らく本會の爲めに盡されたのであるが、その得意とする明快な若々しい口調を以て過日市電總罷業の際、車掌として市民の爲め働られた経験談をせられ、「労働は飽くまで神聖である」と語られた。

豫て我々が聽かん事を望んでゐた第一銀行取締役明石照男氏は次に立つて曰く「經濟界の現状を説いて青年諸君の奮起を促す」と。即ち神經衰弱症に罹つてゐる我國民は現在の内憂外患に爲す所を知らぬ。この財界行詰り甚だしい時、青年諸君は徒らに國內に爲すべき事業乏しきを氣に病んで失望してはならぬ。とて海外に己の活躍の天地を求めて成功せる人々の實例を擧げ我等の奮闘を促がし現代病弊除去の一手段を述べられた。我々は全く考へさせられたのである。

次に先の車京市電氣局労働課長道家齊一郎氏立たる。同氏の労働問題研究は單なる机上のそれとは異なるだけに、その論調は熱を帯び爽やかな快辯は豊かな學殖と相俟つて當日のスピーチ中一段優れて見えた。即ち過般の市電ストライキは要言すれば電氣局當局がその従業員に對する態度が當を得てゐなかつたに起因する。尙爭議に際して指導者間に勢力争があり、根源の市當局の財政が甚だしく窮乏してゐたためあの様な結果に終つたのだと談じ、いづれかと言へば従業員側に同情的な態度の様に

見受けられた。

次いで小出收氏は馬越、犬養兩翁や御自身の壯時と現在との思想の變遷を語られ、我々學生も適當な時機には方向轉換をなすべしと訓へられた。

馬越恭平翁は次いで明治五年備中の山奥から上京せられた際の縣人の状態を語り、今日岡山縣人が朝野に人材を多く出してその活躍の素晴らしさと對比して今昔の感に堪へない御様子であつた。

更に別室に移つて金平豊次郎氏は學生の爲めに出世の秘訣、處世術を一くさり述べられ、近藤昇氏の青年會に對する御感想並びに御希望を承り、綱島覺左衛門氏のユーモアに富んだ談話を聽いて隨意散會となつた。

當日 池田侯爵家より 金五拾圓也 麥酒會社より ビール、シトロン

の御寄贈があつた。こゝに記して厚く感謝の意を表す次第である。

來會者は特別會員四拾四名、普通會員九拾八名であつた。(五十音順)

明石 照男	淺沼 龍吉	有森 英彦	秋岡 俊吉	淺野 猛人
青山 季晴	淺尾 寛一	犬丸 鐵太郎	犬丸 秀雄	犬養 六郎
磯部 愉一郎	稻葉 榮之輔	池上 輝雄	池田 早苗	池田 光敏
石原 豊米	宇高 照輔	植木 知之	浦上 進	江見 芳勇
太田 收	大橋 喜久三	岡 正一	荻野 正孝	小川 芳男
大水 精	小川 泰	荻野 正二	岡本 健三	御供 芳平
梶谷 三男也	川西 和夫	河村 正二	金澤 七十四	金平 豊次郎
貝原 浩	加藤 正雄	川野 太郎	片岡 二男	片岡 曆次郎
萱野 喬	木村 清四郎	岸本 綾夫	木山 博精	木村 孟敏

窪田 靜太郎	補 康平	栗坂 忠敬	小出 史收	小山 勝太
近藤 昇	小石 寒石	小坂 東彦	小坂 仁史	古原 勇雄
後藤 博	近藤 勝幹	金万 弘	佐々木 俊一	最相 毅
佐藤 甲子郎	佐藤 正彦	佐々木 義夫	佐内 正	鹽田 泰介
七村 藤吉郎	杉本 一夫	杉本 敏夫	陶浪 捷太	鈴木 秀次郎
摺河 金鷹	末宗 操太	千田 愛彦	高杉 晋	高島 克己
高見 專四郎	田淵 修	田中 義男	竹内 透	竹内 克己
谷本 博	綱島 覺左衛門	津高 毅	道家 齊一郎	鳥越 雅太
鳥取 快太	鳥居 博通	時實 利彦	戸國 盛男	中島 正弘
中村 四郎	中野 晴海	中山 三郎	内藤 登	仁木 士弘
仁科 正吾	新田 鏡二	西 隆志	西下 止夫	西原 雄太郎
野宮 一男	花房 太郎	崑山 藏六	林 癸未夫	原田 軌一
原田 芳太郎	花房 英一	橋本 晃	平井 節夫	平松 市藏
平木 鷹一	藤原 清文	藤島 宇太	藤田 秀倫	藤井 勇
藤原 奇生	藤原 清文	藤原 正	馬越 恭平	前田 稔
正宗 直三郎	間野 浩	丸尾 剛	松本 佐一	松本 陣三郎
松岡 豊	松田 堅志	万城 登	美土路 昌一	三浦 武夫
三宅 静一	溝手 進	向井 務正	森安 二郎	守屋 武夫
森田 久	矢野 恒太	安田 武彦	湯浅 元夫	吉田 英雄
依田 住夫	横田 信夫	和田 一郎		

總會終了後別室にて記念事業委員会開催。犬丸理事要項の説明をせられ基金募集方法を討議す。然るべき方に記念事業委員長を依頼し目的の遂行に努力することと決す。會する者本會役員の外、委員淺沼氏、同金平氏、同正宗氏。

五月六日理事道家齊一郎氏母堂御逝去葬儀あり花房會長、犬丸理事、佐藤、淺尾兩幹事之に參列す。

第一回記念事業委員会

五月十六日夜朝日新聞社會議室に開く。花房會長の挨拶の後金平委員は随分詳細に記念事業實行案につき意見を開陳せられた。本日は會館設立運動の實行方法が中心の議題となつた。記念式典舉行につき金平委員、鳥取前幹事が主任となつて計畫を立てることとなる。會報の編輯には美土路理事、有松委員、龜山委員を顧問に常任幹事が主として携はることに決した。會する人左の如し。

花房會長 平松、犬丸、美土路の各理事、崑山監事、大橋、中川、金平、太田、正宗、川端、淺沼、有松の各委員及び前幹事 鳥取、松本、平井の三氏並びに陶浪、三浦、淺尾、木山、佐藤の諸幹事。

五月十七日佐藤幹事は先日舉行の春季總會の記事を雑誌「汎岡山」六月號に寄稿す。

五月二十四日常任幹事會を花房會長邸に開く。御心盡しの晩餐の御饗應にあづかつてから會議に入り左の事項を決す。

一、記念式場 小石川植物園

一、期 日 十日十九日(日曜日)

一、會費 特別會員 金參圓 普通會費 金五拾錢

一、祝辭 舊委員長及名士にお願ひする。

一、記念品を來會者一同に贈呈すること。

記念事業役員の所屬を大體決定す。

集る者、花房會長の外に鳥取快太、陶浪捷太、片岡二男、三浦武夫、近藤敏明、淺尾寛一、佐藤甲子郎の諸君。

五月二十六日陶浪、佐藤の兩幹事は松本福岡縣知事をステーションホテルに、守屋岡山市長を丸の内ホテルに訪ふて記念事業の計畫を話し夫々九州地方並びに岡山地方に於ける運動に御助力下さる様お願いした。

第二回記念事業委員會

六月四日夜、朝日新聞社會議室にて開催。記念式に舊委員長を御招待致すこととなりその氏名を調査したるに左の諸氏と判明した。

(順序不同)

花房直三郎氏、小原重哉氏、小松原英太郎氏、有松英義氏、平沼驥一郎氏、窪田靜太郎氏、阪谷芳郎氏、木村清四郎氏、森本邦治郎氏、青木鐵太郎氏、平沼淑郎氏、及び現會長花房太郎氏。

記念式期日は愈々十月十九日(日曜日)に決す。開會は當日午後一時とし、園遊會の形式を以て行ひ講演の數を減じて餘興中心となし、來會者を多く集める方策を講ずることとなる。

大會係委員の受持を決定す左の如し。

總務係	花房氏	犬丸氏	平松氏
席務係	金平氏	正宗氏	鳥取氏
餘興係	中川氏	島山氏	
食事係	大橋氏	坂田氏	
接待係	淺沼氏	川端氏	
會場係	太田氏	荻野氏	
會計係	荻野氏	松本氏	

會報編輯顧問 美土路氏 有松氏 龜山氏
尙會場の選定につき候補地として大日本ビール會社、植物園、大隈會館などが挙げられたが之は會場係委員にその決定を一任す。

次の會合には各係委員夫々の豫算を持寄り全費用を決定の上、各方面より寄附を仰ぐこととなつた。次會は六月二十四日に開く事にして散會。來會者氏名次の如し。

花房太郎氏 犬丸鐵太郎氏 坂田愉三郎氏 中川蕃氏 荻野正孝氏 淺沼龍吉氏 金平豐次郎氏 美土路昌一氏 龜山孝一氏 太田收氏
正宗直三郎氏 川端審三氏 大橋信吉氏 島山藏六氏 平松市藏氏 有松昇氏 陶浪捷太氏 鳥取快太氏 木山博精氏 三浦武夫氏 佐藤甲子郎氏 森安二郎氏 近藤敏明氏 片岡二男氏

第一回會報編輯委員會

六月十日夜 朝日新聞社會議室

出席者は

美土路昌一 龜山孝一 三浦武夫 陶浪捷太 木山博精 淺尾寛一 森安二郎 佐藤甲子郎の諸氏。

協議の結果左の如し。

- 一、沿革 五十年史は書改めること。
- 一、舊委員長の寫眞を一纏めにして巻頭に入れること。
- 一、感想文を廣く先輩諸氏より寄せて戴くこと。
- 一、會報印刷費豫算は一五〇〇部にて約金五百圓の見込、從來の頁數の約二倍とす。
- 一、原稿締切は八月末日限り。
- 一、學生の編輯掛委員の分擔を定む。

沿革 木山

名簿 陶浪 三浦

原稿整理 近藤 三浦

記事作製 森安

- 一、各學校各塾の幹事をしてその沿革又は消息を書かしてみたい。

幹事相談會

六月十一日夜神田駿河臺下明治製菓賣店にて開いた。出席者は左の諸君であつた。

渡邊毅 津高毅 木山博精 中村四郎 陶浪捷太 松本佐一 淺尾寛一 宮田本英 池田早苗 池田光敏 三浦武夫 森安二郎 植木知之
佐藤甲子郎 太田浩 梅野典平 吉田利貞 藤原正

一、記念事業について

イ、會館設立運動の概略の説明

ロ、記念式舉行の件

二、支部設置案について

三、會報記念號發行について

以上の件につき相談を遂げ次に

四、各部委員の分擔を定む

總務 陶浪 佐藤 大原

庶務 片岡 近藤 木山

餘興 精義塾 吉田 池田

食事 備中館

接待 森安 中村 鶴山館 渡邊

會場 早大幹事 兒島塾

會報 三浦

會計 淺尾

五、祝賀會當日は全幹事接待掛を勤む。

六、先輩から各自いづらか原稿を貰つてくること。

六月十四日 近頃岡山縣學生聯盟と稱する團體の幹部が岡山縣青年會有志と共同主催の下に夏季岡山縣下巡回講演會を開催するといふ名目で本會特別會員中の數氏より若干の金員を詐取した者があつたので、本會は右は全然本會と關係なき者の聲明書を特別會員各位に送つて各位の御了解を求めた。

第三回記念事業委員會

六月二十四日夜 東京朝日新聞社にて開催。

出席の諸氏は次の如くであつた。

犬丸氏 淺沼氏 正宗氏 美土路氏 龜山氏 金平氏 島山氏 正宗氏 平松氏 道家氏 荻野氏 木山君 近藤君 森安君 三浦君 松本君 淺尾君 陶浪君 佐藤君

花房會長御旅行中につき犬丸氏議長となる。協議事項左の如し。

一、各係委員より經過の報告

イ、佐藤幹事會報編輯委員會の經過を報告す。内容は前出の通り。

尙金平氏の提議に従ひ記念式當日の寫眞を會報に入れることとなる。

ロ、會館建設運動の其の後の經過報告あり。

二、記念式について。

イ、會費は之を定め、不足額は特別會員一般の寄附に仰ぐ。出捐金額は最高額を定め學生をして特別會員を訪問の上、各位

の豫定額を承つて來ること。學生は直接現金は貰はぬこと。寄附金は追つて集金郵便を以て戴くこと。

三、學生聯盟合併の件。

學生聯盟の幹事渡邊某非を改めて本會に入會の希望を有すと正宗氏傳へられ一同の討議により諾否を決せんとし賛否様々なりしも、道家理事の説明によれば該聯盟は事實上解散せるものに近いつたので、遂に入會問題は沙汰止みとなつた。

四、支部設置の件

大阪に設置したしとの意見有力にして平松、美土路兩氏より夫々關係方面の有力者に話して貰ふこととなつた。又福岡地方は同縣知事松本學氏、岡山では岡山市長守屋松之助氏が夫々御盡力下さることとなつた。

六月二十五日 特別會員全部に原稿の依頼狀を發送す。

幹事相談會

六月二十七日 駿河臺下明治製菓賣店にて開催した。集つた人々は次の通りである。

木山博精 三浦武夫 松本佐一 陶浪捷太 大原總一郎 植木知之 池田早苗 片岡曆夫 近藤敏明 森安二郎 太田浩 梅野典平 加賀山潔 宮田本英 池田光敏 中村四郎 吉田利貞 藤野哲男 津高毅 堀正巳

木山君の挨拶後同君は去る二十四日の委員會の協議の結果學生に與へられた任務を一通り話して幹事諸君の御努力を仰ぎたいと希望を述べ、太田浩君から食事についてのプランを承つて茶話會にうつつた。尙當日來會者を十班に分ち、各手分けして先輩を訪問、奉加帳に御芳志の程を記入して貰ふため帳簿を各班毎に渡し七月中旬までに責任を持つて歴訪して貰ふ事とな

つた。

七月下旬までに帳簿の過半が返つて來ず、九月に入つて少數の幹事が尙寄附金募集に歩き漸く九月中旬金壹千圓の寄附金を募集する事が出來た。

第四回記念事業委員會

九月十六日夜、東京朝日新聞社に於て開催。協議事項左の如し。

一、寄附金募集成績の報告

佐藤幹事説明して曰く、「目下の應募額は金壹千七拾八圓である。學生幹事が今後尙募集に歩く故金壹千五百圓には達せしめる事は可能である。責任を以てこの金額には我々の手で達せしめるから記念式舉行費並に會報發行費には金壹千五百圓の豫算を以てしたい。」と。

二、花房會長より原稿到着数を報告

三、寄附金再募集につき、時日が乏しいから書狀を以て依頼狀を未だ寄附通知の無かつた方に出すこととし犬丸氏より注意を承る。

四、會場について

小石川植物園に決定す。

五、會報について

犬丸氏の會報を岡山縣下各市町村に送り青年會の宣傳をしては如何、との御意見に従ひ、郷里へも送ることとす。而して會報發行部數を二〇〇〇部とし、之が費用は寄附額の増加部分を以てし、記念式當日は特別會員金二圓、普通會員金五拾錢の會費を徴收することとなる。

六、記念式について

イ、期日 十月十九日は野球早慶戰當日なるを以て一週繰延べ十月二十六日開催に決す。

ロ、龜山委員の發議により當日 會員全部の署名録を作ること。

本日の出席者は左の如し。

淺沼龍吉氏 大橋信吉氏 島田茂氏 坂田愉三郎氏 金平豊次郎氏 荻野正孝氏 花房太郎氏 犬丸鐵太郎氏 平松市藏氏 龜山孝二氏
三浦武夫君 淺尾寛二君 木山博精君 佐藤甲子郎君

第二回會報委員會

九月二十六日夜、朝日新聞社にて催す。

協議の結果は次の如し。

一、「會報」なる表紙文字を「岡山縣青年會記念號會報」とすること。

二、部數は二千部。

三、豫算は金七百五拾圓では如何。

四、記念式當日の署名録は出來るならば會報に載せること。

- 五、沿革は學生が起草して會長の閱を仰ぐこと。
- 六、表紙圖案は縣人の専門家を煩しては如何。
- 七、學生名簿は住所を省く代り學部を入れ、能ふ限り網羅すること。但し幹事の住所のみは載すべきこと。
- 八、各塾各學校消息欄を卷末に設けること。

十月一日 神田區表神保町拾番地文運館方に本會臨時事務所を置き毎日午後學生の誰か、詰めて會務の圓滑なる進捗を圖ることとなつた。

第五回記念事業委員會

十月九日 東京朝日新聞社にて開催。

協議の結果決定せる事項次の如し。

- 一、會名。岡山縣青年會五十周年祝賀會。
- 一、餘興係報告。(畠山委員)
- (イ)時間は約二時間。(ロ)費用は金壹百圓乃至金壹百五拾圓の豫定。
- 一、食事係報告。(大橋委員)
- 一人あたり金壹圓五拾錢の豫算でプランを立てられる。郷里より吉備團子を寄附して貰ふ考へである。畠山氏の御盡力により明治製菓會社よりビスケットの寄附申込あり。日本酒は今回は購入すること。

種々意見の交換あり。食事費は酒類と天幕との費用を別にして一人あたり金壹圓内外と決定す。

一、會場係報告。

小石川植物園にて行ひ晴雨に不拘決行する事故それ相當の準備をなすべきこと。

一、接待掛報告。

イ、當日會場入口に受附を置き會費引換に食券を渡すこと。係主任淺沼委員に決定す。

ロ、同じしく入口にて署名す。之を寫眞に撮つて會報に載せるべきこと。

一、會報係報告。

前二回の會報委員會にて決定せる事項を報告説明す。

一、祝賀會プログラムについては左の如く決定す。

開會の辭

特別會員代表 犬養毅先生

祝 辭

花房會長

阪谷芳郎先生

平沼淑郎先生

窪田靜太郎先生

普通會員代表 三浦武夫幹事

閉會の辭

犬丸理事

記念撮影(二時半乃至三時)

園遊會開催

餘興

模擬店

時間に餘裕がある様ならば福引を行ふ。



第六回準備委員會

十月二十二日 最終準備委員會を例の如く東京朝日新聞社で開いた。出席の方は左の通りである。

正宗直三郎氏 島田茂氏 淺沼龍吉氏 犬丸鐵太郎氏 花房太郎氏 太田收氏 龜山孝一氏 有松昇氏 荻野正孝氏 大橋信吉氏 美土路
昌一氏 金平豐次郎氏 松本佐一氏 鳥取快太氏 陶浪捷太君 加賀山潔君 近藤敏明君 森安二郎君 淺尾寛一君 三浦武夫君 田中義
男君 佐藤甲子郎君

協議事項左の如し。

一、各部委員報告

イ、庶務係（正宗委員）

署名用繪絹四枚を準備。

菊花徽章（白、赤）を準備。

ロ、食事係（代理佐藤幹事）

一人前九十八錢にて約三百人分。

品目次の如し。

一、しるこ

一、だんご

一、おでん

一、すし

一、うどん、そば

一、やきふた

一、甘酒

一、紅茶

外にビール、シトロンは高杉氏寄贈。

ビスケットは明治製菓會社の寄贈、清酒三斗は廉價にて購入。

以上は隨意とす。

ハ、餘興係（代理佐藤幹事）

三種 費用金壹百圓也

二、會報係（美土路理事）

原稿は三十二通來てゐる。會報の頁數は一六〇頁位が適當であらう。

二、學生幹事の報告

イ、臨時事務所設置の件

ロ、現在特別會員數六五〇名を越へてゐる。

ハ、ポスターは荻野氏の御骨折にて五百枚凸版印刷會社にて印刷せしめた。

ニ、吉備團子の件。加賀山君報告。岡山へ督促の電報を打つ。

三、模擬店に命名の件

四、寄附金募集成績の報告(淺尾幹事)

現在申込済

二〇二三圓

集金済

一一三八圓

第三回會報編輯委員會

十一月四日午後五時東京朝日新聞社社長室にて開催す。出席者は美土路昌一氏、龜山孝一氏、陶浪捷太君、淺尾寛一君、廣戸威夫君、森安二郎君、三浦武夫君、この外特に理事犬丸鐵太郎氏及び美校幹事妹尾壽信君の九名なり。

先づ會報の體裁を左の如くに變更す。

表紙はクロースとし、單行本の形成にし、表紙圖案は佃政道氏に依頼す。而してトビラには圖案を入れる事にし、佃氏、妹尾壽信君に依頼す。表紙背に金文字にて創立五十周年記念岡山縣青年會と入れることに決定す。會報所載の寫眞の中祝賀會當日の記念撮影は二頁大にし、委員長全部の寫眞の前に物故本會創立功勞者として、花房義質氏、關新吾氏、小松原英太郎氏、三氏の寫眞を入れることにす。結局左の順序にて寫眞版を入れることにす。

- 一、祝賀會式場光景
- 二、同出席者記念寫眞
- 三、創立功勞者寫眞
- 四、歴代委員長並會長寫眞
- 五、五十周年記念事業及委員役員記念寫眞

六、祝賀會當日の署名録

以上にて印刷屋に見積書の變更を求めるとし、次回を十二日に開くことに同意を求めて、雑談後十時散會す。

第四回會報編輯委員會

十一月十二日東京朝日新聞社會議室にて、第四回會報編輯委員會を開催す。出席者は、美土路昌一氏、龜山孝一氏、妹尾壽信君、陶浪捷太君、佐藤甲子郎君、淺尾寛一君、森安二郎君、三浦武夫君、定刻午後五時開議。先づ先回の保留事項表紙の件につき、各印刷屋の見積り書につきて調査せしも、未だ表紙圖案送附なき爲め決定することを得ざれども、會報の性質等よりクロースに賛成者少く、委員會の意向は、紙表紙(厚目の)に傾く。印刷所は、日東印刷株式會社に一時決定しをき、その後より以上の印刷屋あれば、これを取消すこととす。次回委員會を二十四日にし、それまでには全部の原稿を必ず切ることとす。六時半散會。

第五回會報編輯委員會

場所 東京朝日新聞社社長室。

日時 十一月二十六日午後六時。

出席者 美土路昌一氏、龜山孝一氏、陶浪捷太君、三浦武夫君、吉田利貞君、淺尾寛一君、廣戸威夫君、森安二郎君、佐藤甲子郎君、妹尾壽信君、以上十名。

議事

- 一、沿革に小見出をつける事及言文一致體にすること。
- 一、表紙の色は、紺、緑、茶、いづれかの濃色とすること。
- 一、體裁を定め、之を花房會長、犬丸理事に下見してもらつて、次の委員會の時に之を發表していただき、それにて萬事決定すること。
- 一、表紙圖案は只今のに決定。
- 一、次の委員會は、十二月一日午後六時、於朝日新聞社。八時過ぎ散會。

第六回會報編輯委員會

會場 東京朝日新聞社會議室。

日時 十二月一日午後六時開會九時閉會。

出席者 會長花房太郎氏、理事犬丸鐵太郎氏、委員龜山孝一氏、幹事三浦武夫君、同陶浪捷太君、同淺尾寛一君、同森安二郎君、同吉田利貞君、同妹尾壽信君、同廣戸威夫君、以上十名。

本委員會は、前第五回委員會に於て決定した、會後體裁につきて、花房會長、犬丸理事の御意見を拜承する爲めに開會せるものである。本夕は美土路氏は、急病の由にて、正午頃歸宅御静養の由、御缺席になつたので、御缺席のまゝ會長と理事兩氏の御意見に基づきて、左の如く決定した。

- 一、會報表紙、圖案は佃政道氏の御好意によるものに決定。色は濃い綠色又は薄鼠色。(これは印刷屋に表紙色紙が品切れの場合があるので)。表紙はクロスでなくて紙に決定。
- 一、寫真中功勞者花房直三郎氏の寫真は御若年の時分のを入れる。
- 一、會報出來の上は、普通會員には、祝賀會當日出席したる者のみに配布。殘餘は希望により、實費にて頒つこと。以上。

第七回會報委員會

昭和五年十二月九日午後四時於 東京朝日新聞社。

出席者 美土路昌一先生、龜山孝一先生、三浦武夫君、佐藤甲子郎君、吉田利貞君、淺尾寛一君、妹尾壽信君、田中義男君、森安二郎君、陶浪捷太君、廣戸威夫君。

最後の會報編輯委員會として、原稿全部の調査、整理をなし印刷屋に引渡す準備をなす。午後十時終了、散會す。

(佐藤甲子郎記)

昭和四年度會計報告

收入之部

一、金壹千六百參圓拾四錢也

內譯

- 金貳百八拾參圓參錢也 前年度繰越金
- 金五百八拾五圓也 昭和三年度年金
- 金拾圓拾壹錢也 銀行預金利息
- 金壹百貳拾壹圓五拾錢也 新年會收入
- 金壹百四拾八圓五拾錢也 春季大會收入
- 金壹百五拾五圓也 秋季大會收入
- 金壹百五拾圓也 池田侯爵家寄附金

- 金五拾圓也 宇垣一成氏寄附金
 - 金壹百圓也 正宗直三郎氏寄附金
- 合計金壹千六百參圓拾四錢也

支出之部

一、金壹千參百參拾九圓六拾四錢也

內譯

- 金壹百圓也 特別基金へ繰入(正宗氏寄附金)
- 金貳拾五圓也 謄寫版購入費
- 金五拾五圓貳錢也 年金集金手數料博運社

金五拾貳圓五拾錢也

支拂

- 前委員長委員諸氏記念 品贈呈署名錄
- 金貳百貳拾圓八拾六錢也 新年會費用
- 金貳百四拾四圓九拾錢也 春季大會費用
- 金貳百七拾五圓六拾五錢也 秋季大會費用
- 金貳百貳拾壹圓拾五錢也 印刷代(會報發行費ヲ含ム)

合計金壹千參百參拾九圓六拾四錢也

差引殘高金貳百六拾參圓五拾錢也

基本金特別會計(第一銀行定期預金)

一、金參百七拾圓六拾九錢也

故小松原英太郎氏寄附金

一、金壹百圓也

正宗直三郎氏寄附金

右之通相違無之候也

昭和五年五月二十五日

- 金參拾圓也 故河村彌三郎氏花環代
- 金四拾四圓五拾五錢也 幹事委員集會費
- 金貳拾四圓七拾九錢也 幹事渡シ
- 金拾圓貳拾四錢也 交通費
- 金四圓五拾錢也 電話代
- 金壹圓六拾四錢也 文房具費
- 金貳拾八圓八拾四錢也 通信費(切手葉書等)

- 監事 荻野正孝
- 監事 畠山藏六
- 會計幹事 淺尾寬一

會員名簿

(昭和五年十二月現在)

特別會員（順序不同）

アの部

青木鐵太郎 東京貯藏銀行監査役（電高輪）市外大崎町上
 青木 勘 香川縣高松中學校長 高松市
 青江隆二 電氣業 四谷區新宿三ノ二四
 明石照男 第一銀行（電小石川）小石川區荻荷谷六六
 常務取締役（五六七〇）
 明石弘 農林省技師（電九段）麴町區土手三番町一三
 農林省技師（五六一）
 赤木朝治 內務省衛生局長（電高輪）市外荏原町中延大
 三九六六（原北一〇七九ノ二）
 赤木榮 日本製粉株式會社 市外野方町下
 沼袋一五六六
 赤崎元吉 工作課勤務 栃木縣古河尾尾銅山
 赤崎銀一 會社員 橫濱市神奈川區青木町壘町一七六七
 赤松月船 文士 市外杉並町天沼一五〇
 赤松靜太 文士 牛込區南町二十七
 赤松純一（土師清二） 赤松病院 熊本市大江町九品寺
 秋岡俊吉 佐藤製作所監査役 小石川區荻荷谷六一

秋岡保治 明治神宮權宮司（電四谷）市外代々木山谷八
 一七五五 七明治神宮官舎
 秋山靜太郎 陸軍歩兵中佐 市外淀橋町柏木一三九
 陸軍省勳員課
 秋山定輔（電九段）麴町區麴町八ノ一九
 六八〇
 秋山義隆 陸軍砲兵少佐 麻布區筈町八九
 千代田取締役（電世田ヶ谷）市外駒澤町
 九〇四（新町一〇三）
 秋山龍 遞信省經理局 埼玉縣浦和町二七七 金子方
 農林省 埼玉縣鴻ノ巣農林省農事試驗場
 秋元眞次郎 交運商工社 市外下落合一、六三六
 豫備陸軍中佐
 淺井啓行 正路喜社取締役（電高輪）芝區高輪南町三〇
 四四八八
 淺田源一 淺沼寫眞機店主（電青山）市外澁谷町青葉六
 四七一三
 淺沼龍吉 仙臺地方裁判所長 仙臺地方裁判所
 淺沼彦一郎 六十九銀行支配人（電高輪）芝區白金臺
 七〇八〇（町一ノ三三）
 淺木兵一 日本郵船會社 市外代々幡町壘四八〇
 淺原丈平 神戶三菱造船所 同造船所内氣付
 淺野富績 辯護士（電高輪）麻布區木村町三九
 七三五
 淺野良二 三井物産會社 本郷區駒込四片
 町一〇ノ十四
 淺越貫一 東京文理大助教授 小石川區關口町一九四
 理學博士

荒木勉三郎 セメント聯合技師 大阪市外豊中町南轟木四五五〇
有元 剛 臺灣銀行秘書役 市外井荻町上荻窪五〇〇

有元郷治郎 岡山縣吉田郡大原町

有松 昇 衆議院書記官 (電高輪) 麻布區木村町二七 (三〇〇五)

有森英彦 藤倉電線 市外入新井村新井宿一三六五

阿曾沼明 第一銀行 本郷區四片町一〇ノ二九號

阿部八代太郎 (電大塚) 市外西巢鴨町 (二〇〇) 宮仲二二〇〇

安部 勉 東京高師教授 朝鮮銀行東京支店 市外大森不入斗四三一

安東 洋 陸軍砲兵少佐 (電四谷) 四谷區坂町六六 (三七七一)

安東敏之 辯護士 (電高輪) 市外大井町四九四 (六五二二)

安東友哉 日本勸業銀行 福岡支店長兼理事 市外中野町打越一九四一

安東長孝 鐵道省監督局 市外中野町打越一九四一

安東直康 騎兵大佐 市外上戸塚三二九

安藤虎次郎 兵庫縣西宮市寺前町一三

安藤 奎 大阪樟蔭專門學校教師 第一銀行營業部長代理 辯護士 市外田端五四九 (電小石川) 三三二六

安藤 幾 辯護士 大坂市

安達若松 安達商會主

イの部

飯田久太郎 海軍主計少將 市外大井町北濱川一、一九二

飯田謙二 日本大學病院理事 市外高田町學習院官舎

伊木忠愛 男爵、教諭、牛込區市ヶ谷壺町二〇

伊田清 辯護士 小石川區柳町二九

伊藤修造 東京朝日新聞社 市外井荻町上荻窪四九二

伊藤誠三郎 東京朝日新聞社 水戸市東京朝日支局内

井口謹一郎 商業 岡山市上之町五三

井出毛三 落合町長 岡山縣真庭郡落合町

井出治 陸軍主計總監 鎌倉材木座二九九

井上綾太郎 會計検査院検査官 (電小石川) 市外龍野川町 (三二四) 中里三二四

井上與三郎 守屋商會取締役 (電大塚) 市外大井町 (一四四三) 四、三一六

井上守三 辯護士 市外下目黒六七八

井上業敬 共榮商會代表社長 市外下目黒六七八

井上豪 官吏 府下北多摩郡武藏野町吉祥寺二一五

井上幹造 製藥業 市外代々幡町代々幡三五五

池上作三 (電大塚) 市外西巢鴨町集鴨新田七六〇 (一二三四)

池田宣政 侯爵 (電高輪) 市外大崎町上大崎八九 (八八六)

池田勝吉 市外平塚戸越六五〇

池田長康 男爵貴族院議員 (電青山) 赤坂區青山南町二ノ六 (四一〇)

池田政銀 牛込區市ヶ谷谷町九六

池田正男 慶應大學醫學部勤務

池田茂幸 國際汽船會社 常任監査役 (電四谷) 牛込區市ヶ谷谷町五五 (四〇五二)

生駒 悦 (雷遊) 映畫解説者 淺草區象湯町二

石原健三 樞密顧問官 (電高輪) 市外大崎町下大崎七一 (四七)

石原剛平 石原商店主 麴町區上二番町二〇

石原房雄 東大醫學部助教授 下谷區櫻木町一七

石原紀一 陸軍歩兵大佐 福岡市歩兵第二十四聯隊

石堂兼吉 (電京橋) 京橋區築地二丁目二四 (五七四)

石井直三郎 第八高等學校教授 八高氣付

石井柳太郎 醫師 (電神田) 神田區小川町一 (四三一五)

石岡繁太郎 第一相互醫長 鎌倉町大原一、一六〇

石川貞治 市外中野町東中野一、六〇六

石阪善次郎 陸軍中將 有終館長 (電牛込) 牛込區若松町一〇二 (五三六六)

石田直吉 大倉商事 市外入新井町新井宿一、四六一

稻川次郎 安田生命 市外澁谷町青葉九

稻葉榮之輔 北鮮木材株式會社取締役 四谷區南寺町六

磯部愉一郎 旭電化工業支配人 (電青山) 市外澁谷町神泉三二 (二七二六)

磯野菊一 日本事務器商會 市外荏原郡松澤村赤堤五二〇

板野友造 元代議士 岡山縣吉備郡秦村

市浦貞次郎 (電青山) 市外澁谷町松濤二〇ノ三 (七六五三)

出石猷彦 帝大文學部助教授 小石川區小日向臺町一ノ五〇

出原忠夫 陸軍少將 市外大崎町上大崎三〇〇

出射兵次郎 報知新聞記者 名古屋報知支局

犬養毅 政友會總裁 (電四谷) 四谷區南町八八 (三〇〇)

犬養六郎 醫學博士慶應大學醫學部講師 犬養病院院長 (電四谷) 四谷區三光町五四 (六二二六)

犬養健 文士 (電四谷) 四谷區南町八 (三九二〇)

犬丸靜吉 日瑞貿易會社 (電高輪) 麻布區木村町一一六 (五二六六)

犬丸鐵太郎 前中國葉煙草株式會社社長 (電高輪) 芝區三田小山町七 (四〇六〇)

犬丸 秀雄 專修大學講師 芝區三田小山町七
 犬丸 巖 長崎控訴院判事 長崎市紺屋町一
 今井田 清徳 遞信事務次官 麴町區永田町二ノ六七
 入江 縫 東京電燈會社東京 市外石神井村上石
 西部營業所庶務係 神井字立野四二五
 五十嵐 清 陸軍大學教授 府下西大久保二〇

【ウの部】

上山 辰二 東京女子師範學校教諭 本郷區眞砂町三二 泉方
 宇垣 一成 陸軍大臣 (電銀座) 麴町區永田町一ノ一
 四八六〇
 内田恒太郎 大日本麥酒會社 (電高輪) 麻布區廣尾町三五
 二五五〇
 馬越 恭平 貴族院議員 (電赤坂) 麻布區北日ヶ窪
 大日本麥酒會社々長 (電赤坂) 町四八
 馬越 幸次郎 大日本麥酒會社 庶務係 (電赤坂) 町二ノ一三
 藥學博士 (電赤坂) 町二ノ一三

【エの部】

江川 甚一郎 辯護士 宮崎市
 江田 秀太郎 機械技師 市外千住町一ノ六一五
 江田 雅男 川崎第百銀行 市外中野町三、五一二
 新宿支店長代理

大島 秀雄 同人社書店主 神田區駿河臺西紅梅町七
 大塚 高信 文理大教授 府下北豊島郡長崎町
 西向二、三〇〇
 大月 隆伏 文士 市外松澤村赤堤四九八
 大土井 源 金澤高等工 金澤高工内
 業學校教授 男爵 滿鐵理事 大連市兒玉町五
 大橋 喜久三 不二塗料會社 (電小石川) 本郷區駒込上富
 工場長 (電小石川) 士前町一ノ九
 大橋 信吉 日本勸業 (電大塚) 小石川區丸山町六ノ一七
 銀行理事 (電大塚) 伏見郵便局長 京都府伏見市外堀内村
 大野 勝三 山梨縣警視 山梨縣
 大森 通孝 農林省 本郷區曙町二 中田方
 大森 逸馬 忠誠堂 神田區今川小路二ノ六
 大森 吉五郎 滿鐵理事 大連市星ヶ浦小松臺
 大山 斐瑳磨 煙草元賣捌業東京 商工會議所副會頭 (電下谷) 下谷區上野
 五〇四四 櫻木町二三
 大山 覺威 中外商業 (電茅場町) 市外井荻町下井草三三
 二五二一
 小川 義章 帝大學生主事 (電小石川) 本郷區本富士町二
 五五二〇 帝大構内官舎
 小川 郷太郎 法學博士 (電四谷) 市外中野町東中
 三〇三 野一、七八五
 小原 重雄 大藏次官 市外中野町上ノ原七八七

江原 綱一 支那海關 南支那廣東省江門海關
 江原 万里 前東大經濟學部助教授 鎌倉町扇ヶ谷一八
 江見 節男 浦和高等學校教授 市外中野町三、三三〇
 江見 章夫 灘中學教諭 兵庫縣武庫郡魚崎町灘中學校内
 海老原 堅 齒科醫 (電小石川) 本郷區森川町一
 一七七二
 遠藤 登喜夫 辯護士 (電九段) 市外西大久保町一〇
 四一七
 遠藤 勇 製藥業 下谷區谷中清水町十九

【オ(ヲ)の部】

太田 莊九郎 辯護士 横濱市中區太田町四ノ四八
 太田 稔 清水組技師 (電高輪) 芝區白金三光町三三六
 二四二七
 太田 收 山一證券會社 常務取締役 (電青山) 市外澁谷町豊分一
 四二五〇
 大田 原泰輔 大阪府立生 野中學校長 大坂市東成區南生
 野町五丁目校内
 大谷 城之介 東洋拓殖會社 市外池袋字大原一、四二五
 日魯企業會社 常務取締役 (電小石川) 本郷區向ヶ
 常務取締役 (電小石川) 町三
 大熊 保夫 大日本麥酒會社 市外世田ヶ谷町池尻三七二
 大熊 信夫 東京市役所 市外世田ヶ谷町池尻三七二

小原 重胤 千代田火災 神奈川縣逗子町久米向根
 保險會社
 小田 鶴次郎 鐵道省
 小野 震 醫師 (電牛込) 牛込區市ヶ谷藥王寺町八一
 三五七
 小野 六郎 大連郵船支店 大連市日本郵船會社支店
 小野 楨一郎 岡山市七軒町
 小野 塵一 判事 高松地方裁判所
 小島 尙直 電氣工場主 市外澁谷町長谷戸七
 喜七郎 貴族院議員 (電青山) 赤坂區青山南
 一五五〇 町五 五三
 岡 慶治 浦和地方裁 埼玉縣浦和町裁判所官舎内
 判事 判事
 岡 正一 木材乾燥工業會社 取締役支配人 (電本所) 小石川區高田
 一三二七 豐川町四三
 岡 正 醫學士傳研醫局 芝區白金今里町二五
 陸軍少將 市外龍野川町中里六二 中山方
 岡 千賀松 市外高田町鷗山一、四八〇
 岡 三藏 鐵工製造業 市外碑衾町衾二、八一八
 岡 運平 南浦小學校長 市外蒲田町九七二
 岡 農夫一 花菱雜貨商 (電四谷) 四谷區傳馬町三ノ二〇
 五九〇〇
 岡上 爲右衛門 日本銀行 市外澁谷町常盤松六七
 岡崎 嘉平太

岡崎 旭 (電四谷) 市外代々木町二四三四 山谷三〇〇
 岡崎 一治 (電銀座) 芝區新櫻田町一二三九〇
 岡崎慶次郎 (電小石川) 小石川區久堅町一八六四七一
 岡崎省藏 (電青山) 市外澁谷町五八五三 常盤松六七
 岡崎常太郎 市外代々木町二五三
 岡崎常吉 (電浪花) 日本橋區新柳町四八八二
 岡田榮太郎 (電大塚) 市外西巢鴨町宮東一五一七 仲二、六四九
 岡田忠彦 (電銀座) 衆議院議員 (三二一〇) 麴町區永田町二ノ三一
 岡田包義 (電小石川) 本郷區西片町五九七〇 一〇、二五
 岡田茂登次郎 (電下谷) 下谷區西町三一八二五
 岡田保太 岡山市弓之町一三六
 岡野敏彰 陸軍少將 岡山縣兒島郡味野町
 岡本 勇 二六新聞社員 市外下目黒八二〇 佐藤方
 岡本佐市 辯護士 (電岡山) 岡山市弓之町二二三
 岡本武三郎 高井商店 本郷區龍岡町二三 中村館方
 岡本春三 陸軍少將 (電大塚) 市外西巢鴨町一、一五二
 尾上八郎 (電小石川) 小石川區白土山四二〇〇 御殿町一二七

尾崎 尙文 第一相互生命 神奈川縣橋本郡中原町小杉第一生命會社々宅
 尾崎隆三 (電東) 大阪市東區牛入町七三五
 萩野正孝 第一銀行 市外中野町東中野一、五五七
 萩野元太郎 古河電氣工業會社 專務取締役 (電九芝) 麴町區麴町九五七 一ノ二〇
 長田曉玄 東洋モスリ 市外千駄ヶ谷町原宿七七
 納三治 曙毛織工場主 (電大塚) 市外下落合六六六
 奥山實太 東京市役所 市外南品川三木一、〇一七 高倉方
 押村 獎 中國民報社理事 芝區愛宕町二丁目四一

景 照之助 市外巢鴨町一八五二
 影山藤作 農科大學勤務 市外世田ヶ谷町代田二六
 笠井 彰 (電高輪) 市外澁谷町伊達二七
 笠井 鎮夫 東京外語教授 相州鎌倉町長谷二三八
 片岡音吾 大阪野村證券專務 大阪市
 片岡鐵兵 文士 兵庫縣蘆屋
 片山庄二 川崎市著銀行 調査部長 麻布區六本木町一

【力の部】

片山 繁雄 早川ビルプロカー館内 (電四谷) 市外代々三井合名會社囃託 (電四谷) 幡町代々三井合名會社囃託 (電四谷) 幡町代々三井合名會社囃託 (電四谷) 幡町代々
 片山 正夫 東大教授 (電小石川) 小石川區原町一、二六
 片山 廣斗 理學博士 (電大塚) 市外落合町下落アボロ鐵工場主 (電大塚) 市外落合町下落三九八六 合南耕地九〇九
 片江 順 麻布區霞町三
 金澤 巖 下谷區上根岸町一一〇
 金田 叫 (電半込) 市外下戸塚一〇五六
 金平豐次郎 (電大森) 市外大森町不入斗七六六
 金光光男 (電荻窪) 市外荻窪町上井草一四四四
 神原啓一 九州日々新聞 (電青山) 赤坂區青山南東京支店長 (電青山) 町五ノ九二
 神尾健夫 遞信技師 市外野方町上高田三八九
 神田 騰一 前橋濱正 市外目黒町上目黒氷川五九二
 龜高 德平 理學博士 科學知識普及會專務理事 (電高輪) 市外品川町御識普及會專務理事 (三二三) 殿山七二七
 龜山 孝一 內務官 (電青山) 市外澁谷町長谷戶三三
 龜山 俊藏 三菱海上火災保 (電四谷) 四谷區右京町一四
 加藤平四郎 元代議士 市外入新井町新井宿一、一四二
 加宮 貴一 文士厚生團 編輯部長 本郷區千駄木町五九

兼信 學 神田小川小學校校長 麴町區飯田町六ノ二五
 川上 幸一 金光教教師 市外品川町步行新宿七三
 川島 寅雄 品川教會會長
 川田 龍 神奈川縣逗子町新宿二、一六五
 川西 和夫 帝國生命 橫濱市子安町一、九六一
 川端 審三 樺太工業會社參事 芝二本榎町一ノ一七
 川本喜三郎 第二荏原尋常小學校校長 市外世田ヶ谷町三宿七六
 川邊 吉彦 雅叙園主 (電高輪) 三〇九九 芝區南濱町一一
 河合 一郎 慶應醫大講師 市外駒澤町上馬四五
 河合 廉一 辯護士 (電半込) 半込區津久戸町三〇
 河村 金五郎 日本郵船 監事 (電青山) 市外澁谷町綠ヶ岡三
 河村 九淵 大日本釀造會社 常務取締役 (電青山) 市外澁谷町
 河村 曉 工學博士 三菱 (電四谷) 市外代々木町小島製鐵會社取締役 (三六一七) ケ谷一、五二六
 河村 董 陸軍中佐 兵務課長 市外世田ヶ谷中原六八一ノ二
 河野 芳銳 三菱商會社 (電半込) 市外戸塚町源兵衛三一

【キの部】

木村兼孝 日本鑛業會社 市外荏原町中延一、一〇三
 木村清四郎 貴族院議員 (電青山) 麻布區材木町三五
 木村善太郎 文部省督學官 小石川區小日向藥町三ノ三八
 木村毅 文士 市外大久保町西大久保四七
 岸一太 醫學博士 市外澁谷町大和田九五
 岸岡清香 大森帝國女子醫專教授 市外蒲田御園町二〇
 岸岡精華 福岡縣八幡製鐵所病院 八幡市鬼ヶ原官舎
 岸野繁太 洋式家具敷物室内(電芝) 芝區田村町七三
 岸本綾夫 陸軍中將 (電四谷) 市外大久保東大久保一
 岸本鹿太郎 陸軍大將 (電中野) 市外中野町打
 城口再太 辯護士 (三五一九) 越二、一〇五
 公森太郎 日本興業銀行理事 小石川區小日向藥町一ノ四九
 北定一 醫師 (電高輪) 市外澁谷町下通三ノ一七

【クの部】

久山順平 東北水産會社 取締 役
 久山寅一郎 三井物産會社 (電中野) 市外野方町下沼
 (四〇七五) 袋一、一六二

久留間二郎 第一銀行 四谷區荒木町二七ノ一三
 日下吉平 大和毛織株式會社 專務取締役 (電銀座) 麹町區三年町二
 日下丹造 砲兵大佐 牛込區市ヶ谷仲之町四三
 日下辰太 內務省殖産課長 旅順市吾妻町三二
 日下時次 貿易商(事務所電日本橋) 芝區白金里町九六
 窪田靜太郎 法學博士 (電甲園調布) 市外調布田園
 窪田幹太 東京控訴院判事 神奈川縣鎌倉町長谷五四〇
 窪田耐而 東京控訴院判事 市外池袋町大原一、四三三
 黒田英雄 前大藏次官 (電小石川) 本郷區追分
 黒瀨泰 大東京鐵道社長 (四八〇〇) 二六ノ一
 楠廉平 電氣土木請負 牛込區赤城元町三四 近藤方
 工藤壯平 太陽生命 市外入新井町新井宿一六
 栗坂多賀夫 宮内省 祕書官 (電大塚) 市外下落合字丸山四一五
 臺灣銀行 (二四六) 市外野方町下沼袋一五八

【コの部】

小出收 玉川製氷株式會社社長 (電小石川) 本郷區西
 小出五郎 內國貯金銀行顧問 (電甲田) 神田區錦町三ノ二
 辯護士 (三二〇五)
 高野重三 鑛山及工業藥品販賣 (電木所) 深川區富川町二
 (七二三)

小久保廣太 度量衡商 深川區靈岸町
 小西千比古 海軍中佐資源局 市外野方町上高田八一
 小西正二 商工省技師 (電四谷) 市外代々幡町
 (七五九) 幡ヶ谷八八五
 小林榮太郎 辯護士
 小林 巍 扶桑海上保險會社 市外高田町雜司ヶ谷一、一六〇
 小林謙二 東京鐵道局 市外川崎市扇町三
 川崎發信所 立教高等女學校長 市外澁谷町永住一六
 小林彦五郎 前代講師 小石川區高田豐川町三七
 小橋藻三衛 帝國生命 市外澁谷町永住一七六七
 都市部長 橫濱市青木町臺町一七六七
 小松原健吉 (電高輪) 市外大井町元芝七八六
 (四三) 學校電天神九八) 名古屋市中
 第八高等 自宅電南八八) 區御器所町
 小松原隆二 會社社員 市外千駄ヶ谷五六二
 小松道行 血液循環療法研究會會長 (電大森) 外大森新井宿於伊
 一〇四〇) 勢原二、一四一
 小山善太郎 安田生命(電茅場町) 一二三三) 日本橋區河津
 安田生命(一二三三) 安田生命社內
 小山勝太 宮内省 侍醫 (電青山) 麻布區筭町八
 小山武夫 檢事總長 (電青山) 赤坂區青山高樹町二〇
 國分三亥 橫濱倉庫會社社長 (電青山) 市外千駄ヶ
 二松學舍常任理事 (六一〇) 谷四二五

【サの部】

國府精一 大阪住友生命重役 (電御影) 兵庫縣武庫郡住吉村
 (四九七〇) 後藤達也 米國貿易會社 支配人 (電高輪) 市外荏原町平塚
 (六四七一) 小山五〇三ノ七
 後藤德太郎 第一相互貯蓄銀行 (電京橋) 神奈川縣鎌倉
 (一八三七) 二階堂一〇八
 近藤見長 醫學博士(電木所) 橫濱市磯子區西根岸町九五三
 博士(三七五) 三菱 市外澁谷町松濤一
 近藤秀雄 東京市青山アパート二二
 近藤 昇 兵庫縣兵庫郡精道村蘆屋吳川三
 牛込區赤城元町三四
 近藤彌壽太 陸軍歩兵少佐 小石川區久堅町七四ノ一四
 陸軍省技術本部
 渾太坊芳造 齋藤清太郎 東京帝大文學部教授 神奈川縣鎌倉町材木座上河原
 一〇三
 齋藤一 齋藤武夫 牛津板紙會社社長 (電牛込) 牛込區南町三四
 (八四四) 郵船倫敦支店長
 齋藤 豐 畫家 牛込區砂土原町三ノ八
 細木原青起 法學博士貴族(電小石川) 小石川區原町一二六
 院議員 男爵(一二〇〇)

阪谷良之進 文部省技師 (電小石川)本郷區四片町一
 四〇四〇〇イノ十二號
 佐藤勝太郎 日本郵船 市外品川御殿山三一八
 會社船長
 佐藤覺一 陸軍航空兵中佐 濱松市飛行第七聯隊
 佐藤金造 金光中 (電金光)岡山縣淺口郡金光町
 學校長 (六三三)
 佐藤臣少 眼科醫師 (電大塚)小石川區西丸町二八
 (一九九八)
 佐藤笠太郎 商工省工務局 市外世田ヶ谷經堂在家四〇八
 芝浦製作所技師 市外碑谷町碑文谷一、四七一
 佐藤武三郎 順天堂病 (電小石川)本郷區彌生町三
 院醫師 (六五七八)
 佐藤敏二 日本醸造 (電小石川)本郷區駒込曙町二八
 協會技師 (三二一九)
 佐藤善衛 大阪毎日新聞 市外中野町打越一、八七九
 社編輯部長 上木町九ノ九五
 佐々木一雄 輕重兵大佐
 佐々木志賀二 貴族員 (電岡山)岡山市山崎町十一
 議員 (三一)
 佐々木俊一 富士印刷株式會社 市外高井戸町大宮前三五七
 社事務取締役
 佐々木良一 司法書記官 (電銀座)麴町區西日比谷一
 秘書課長 (二五八〇)麴町區西日比谷一
 醫學 (電小石川)本郷區四片町一〇と一〇
 博士 (三五三五)
 笹原正志 市外澁谷町下通五ノ二七
 坂田耐二 日本晝夜銀行 赤坂區青山南町五ノ一二
 橫濱支店長

坂田愉三郎 大日本人造肥料會(電青山)市外千駄ヶ谷町原
 社取締役工務部長(三二二)宿一七〇ノ二二
 坂田實 市外大崎町上大崎三九一
 坂田芳衛 東大大學院 本郷區町三三 望富軒
 昌谷彰 前樺太 (電大塚)市外高田雜司ヶ谷七四〇
 長官 (一一七七)
 酒井熏 農林技師 市外澁谷町神山一五
 定金右源二 早大第二高 市外杉並町天沼四六八
 等學院教頭
 雀部顯尙 宮城縣女子(電) 市外小田原袖振町四
 專門學校(二七二八) 仙臺市小田原袖振町四
 鹽田泰介 工學 博士 (電大塚)小石川區丸山町三
 (二三〇四)
 清水郁 辯護士 神奈川縣逗子町新宿二、〇一五
 事務所丸ノ内通第十四號
 清水長郷 古河電氣工 業株式會社 橫濱市青木町二、〇一〇
 國政調査會理事 (電青山)市外澁谷町
 長 衆議院議員 (三五〇九)神山二五
 前川崎市長 市外川崎市大師一九二四
 進藤誠一 遞信省經理 市外大井町鹿島谷三、〇一三
 局需品課長 (電鎌倉)神奈川縣鎌倉町大
 池田侯爵家 地金商 (電鎌倉)町篠目谷三〇七
 白神磯太郎 芝區二本榎西町二

白岩龍平 東亞興業株式會社 常務取締役 (電青山)赤坂區青山南
 一八七五 町六ノ六七
 重成壽太郎 岡山市田屋敷一五
 霜山精一 大審院判事 市外野方町下沼袋一、六二〇
 行頭取 臺灣銀行 (電高輪)市外大崎町大崎
 一六七五 長者九二七五

仙石良平 大日本麥酒 會社監査役 (電吹田)大阪府三島郡千里
 (四一)村字片山七〇〇
 莊田要二郎 辯護士 市外澁谷町豊分二

杉浦敏郎 三井物産 名古屋市中區笹島町四ノ二
 名古屋支店
 杉岡雲外 日本畫家 四谷區内藤町一番地
 發明家 神奈川縣二宮海岸
 杉本京太 法學博士宮内省 圖書頭兼諸陵頭 (電大塚)小石川區駕
 正金銀行(電四谷) 市外野方町上沼袋一三二
 監査役(六四) 府下高田町代地三、五四一
 角南隆 內務省神 社局長技師 市外下高田町代地三、五四一

田上省三 辯護士 宇治山田市天俣町三六
 田中寬一 東京文理大教 授文學博士 (電大塚)市外巢鴨町西巢鴨
 (二二三八)宮仲二、二〇四
 田中敬一 小石川區原町一〇六
 田中誠一 出版業 市外世田ヶ谷町三宿一三七
 田中豐 明治護謄製 造所技師長 (電高輪)芝區二本榎西町二
 (二二六四)
 田邊綾夫 ラジオ田 邊商會主 (電九段)麴町區一番町四三
 (三三七四) 大東文化 學院教授 (電四谷)四谷區須賀町一
 (六三七〇) 鐵道省 牛込區富久町一〇五
 田邊千穂也 廣島市大平町八ノ一四六
 田村喜作 林學博士 (電高輪)麻布區木村町二二五
 帝大講師 (四四七四)
 田村剛 中外商業記者 市外代々幡町幡ヶ谷二七五

【セの部】

關孝次 三十四銀行 堺支店長 (電三)堺市大濱北町九
 妹尾秀實 農林省水産 講習所囑託 市外北多摩郡保谷
 村下保谷二一二
 妹尾隼熊 陸軍航空兵大佐 奉天

【タの部】

高木岩吉 中外商業記者 市外代々幡町幡ヶ谷二七五

高木 義幸 明治製菓 市外戸塚町伊勢原八三五
 高木 鐵男 大木教本部 京都府綾部町上野六七
 高草 朴介 鐵道省經理(電四谷) 市外杉並町天沼一〇六
 高草 平助 局倉庫課長(五九一) 市外大塚(電大塚)小石川區大塚仲町三六ノ二
 高草 美代藏 銀行(電大塚)小石川區大塚仲町三六ノ二
 高杉 新一郎 水産會常務理事 四谷區市ヶ谷木村町三
 高杉 新一郎 海軍軍醫少 將醫學博士(電四谷)牛込區余丁町三八
 高杉 新一郎 大日本麥酒會 社常務取締役(電青山)赤坂區青山南
 高倉 數馬 忠誠堂 麹町區三番町二〇
 高島 勇 三共製藥 品川工場
 高田 辰三 洋服商 神田區鍛冶町十一今川橋ビル四階
 高田 克己 大藏省銀行局 市外杉並町阿佐ヶ谷二
 高田 時夫 第一生命 契約課 市外千駄ヶ谷八七三
 高津 康雄 工兵大尉 市外野方町下沼袋一、四九一
 高塚 謹四郎 日本銀行 赤坂區青山南町五ノ二七
 高戸 楚一郎 第一銀行丸ノ内支店 本郷區森川町一 蓋平館
 高橋 貞三郎 富士製紙專務取締役(電青山)市外澁谷町神山四九
 高見 穎治 東京高校教授 市外中野町三、八八二

竹井 俊郎 社員 千葉縣市川町眞間九〇五
 竹内 寛 陸軍中佐陸軍大學教官 市外杉並町阿佐ヶ谷六一
 竹内 賀久治 辯護士 (電九段)麹町區麹町一〇ノ一六
 竹内 義一 菓子卸商 下谷區御徒町一ノ二三
 武元 茂 東京市社會局 市外碑衾町二、六一六
 武本 庄一 誠商會 芝區芝公園二一ノ三
 武本 宗重郎 宇都宮迴道店重役 小石川區小日向臺町一ノ二八
 武本 四七二 横濱市役所土木局技師(電長者)横濱市中區西戸部
 武政 太郎 文理大助教授 市外四葉町宮仲二、四九四
 武野 藤介 文士 市外杉並町天沼四六九
 武繩 七太郎 長崎縣佐世保商業學校校長 佐世保市宮地町五三
 多田 靜夫 天賞堂支配人 (電小石川)小石川區林町六六
 谷口 源藏 東京朝日用度課長 市外大井町山中四、三一八
 谷口 貞固 陸軍少將 洋行中 市外松澤村字北澤一、一七五
 谷口 壽夫 北長商會取締役社長(電青山)市外青山原宿一七〇
 谷村 金一 市外澁谷町神山四九

瀧本 得三 大阪市東成區天王寺九二三
 瀧本 博通 獸醫畜産器械商 (電芝)芝區琴平町二
 瀧増 庸一 中國民報社 岡山市一番町四六
 大東 藤吉 會社員 市外荏原町戸越六四九
 大幸 施門 京大文學部助教授 京都市上京區竹屋町通大宮四入ル
 多賀 寛一 辯護士 (電岡山)岡山市弓之町一五
 近松 秋江 文士 (電中野)市外中野町上之原九五四
 千輪 浩 東京帝國大學文學部助教授 市外杉並町字田端四七
 治郎丸 憲三 岡山縣勝田郡勝間田町

津田 弘視 三井物産神戸支店長 (電元町)神戸市下山手
 鶴岡 伊作 前專修大學理事 (電大塚)小石川區宮下町五五
 鶴見 祐輔 著述業 (電高輪)麻布區三軒家町五五
 網島 覺左衛門 警視廳監察官 (電赤坂)麻布區三河臺町一四
 佃 政道 洋畫家 市外上目黒二、一二九
 寺岡 彌三郎 中央新聞社事務理事 麹町區元園町一ノ三六
 寺見 武次郎 警視廳鐵道部主任 市外四葉町宮仲一、九二〇
 寺本 博見 命相互 (電京橋)神奈川縣橋本郡中原町
 道家 齊一郎 東修大學教授常務理事 (電四谷)四谷區三光町二四
 土井 不曇 東京文理大助教授 兼高師教授 本郷區駒込富士前五九
 土居 章平 內務省社會局事務官 市外入新井町新井宿六二八
 土居 通博 山陽銀行頭取 岡山縣苫田郡田邑村
 土居 通憲 岡山縣苫田郡田邑村

【ツの部】

次田 大三郎 內務省地方局長 (電牛込)牛込區赤城下町五三
 次田 潤 學習院教授 市外西巢鴨町池袋丸山、五三九
 津下 紋太郎 日本石油會社專務取締(電小石川)本郷區上富
 津島 純平 辯護士 (電荏原)荏原二三五市外碑衾町碑文
 (丸ノ内)四七〇(谷)三三一

【テの部】

道 家 齊 一郎 東修大學教授常務理事 (電四谷)四谷區三光町二四
 土井 不曇 東京文理大助教授 兼高師教授 本郷區駒込富士前五九
 土居 章平 內務省社會局事務官 市外入新井町新井宿六二八
 土居 通博 山陽銀行頭取 岡山縣苫田郡田邑村
 土居 通憲 岡山縣苫田郡田邑村

土居 助一 (電浪花) 日本橋區米澤一ノ一
留岡 幸助 (電大塚) 市外西巢鴨町二、六一七
豐福 環 (電神田) 神田區駿河臺
鳥越 雅 (電三三三六) 北甲賀町一三
鳥取 快太 東京朝日新聞社
鳥取 快太 東京市役所商工課 牛込區馬場下町三四
德田 輝雄 日本乾電池東亞(電日本橋) 日本橋區室町北詰
德田 輝雄 蓄電池 代理店(三八三五) 日本橋區室町北詰
常盤 織之助 安藤商會 支那人
時實 秋穂 前福岡市長 (電一〇七二) 福岡市住吉
戸室 銀次郎 (電高輪) 市外大崎町谷山二四
戸村 武男 (電日本橋) 市外入新井町
頓宮 廉爾 帝大醫科 日本橋區青物町三〇 日本橋病院

【十の部】

中岡 實 本郷區會議員美木屋商店事務取締役 本郷區動坂町一九七
中岡 彌高 陸軍(電九段) 麹町區元園町一ノ一九(留守宅) 少將(三五一) Shuei-hern Uiz Paris, Jap France
中桐 春太郎 元東京府(電大塚) 小石川區大塚坂下町八二 土木技師(二八七五)

中島 三郎 陸軍技術本部總務部長陸軍少將 (電四谷) 市外杉並町阿
中島 寛二 (電芝) 芝區濱松町一ノ三一
中島 權吉 海軍少將 市外東調布町下沼部九一ノ一九
中川 蕃 明治製糖常務 臺南州麻豆明治製菓會社内
中田 政雄 三井物産船舶部 橫濱市神奈川町二、〇〇五
中塚 直三 (電豊徳) 市外駒澤町新町九〇
中山 魏 畫家 市外荏原郡馬込町一、三九〇
中山 保三郎 步兵中佐陸軍大學兵學教官 牛込區市ヶ谷臺町九
長瀬 吉次 會社員(電青山) 市外世田ヶ谷太子堂一六七
中村 健 內務省 本郷區臺町二四章文館
中村 壽夫 株式仲買 麻布區龍土町六七
中村 季吉 陸軍法務官
中村 道四郎 川崎第百銀行 市外碑谷町碑文谷一、三五一
永井 秀太 永井結核病研究所々々長 (電九段) 麹町區三番町四四
永井 潜 東大教授 (電中野) 市外野方町上沼袋七〇
永島 米治 醫學博士 (電青山) 市外澁谷町大向通二
永原 伸雄 三井信託監事 (電三三三) 市外澁谷町大向通二 三菱造船會社(電大塚) 小石川區賀籠町二一八 常務取締役(五七〇) 小石川區賀籠町二一八

永山 文一郎 第三十四銀行
永岡 秀一 東京高師教授 講道館九段
難波 清人 衆議院議員 市外大森八景坂上
難波 誠四郎 太陽生命(電四谷) 市外代々木西原一、〇〇六
難波 元弘 工學博士 旭硝子試驗所長 (電青山) 赤坂區青山南
難波 吉次 會社員(電青山) 市外世田ヶ谷太子堂一六七
難波 理一郎 早稻田大學 早稲田大學 學幹事 (電牛込) 牛込區原町一ノ六七
那須 亮一郎 市外世田ヶ谷町代田六八一
名和 剛 辯護士 岡山市西中山下五二
檜崎 淺太郎 東京文理大教授 東京文學博士 市外下練馬町 正窪臺三、八九三

【三の部】

二宮 治重 參謀本部參謀 次長陸軍中將 (電四谷) 市外西大久
二宮 晋一 憲兵中佐 市外荏原郡入新井町 新井宿一八、八〇
西崎 恵 文部省 芝區三田三丁目二
西崎 弘太郎 東京衛生試驗所々々長 (電小石川) 小石川區原町一二
西島 尙義 鍛造技手 市外巢鴨町一一三七

【又の部】

西村 準三郎 警械メモメント會社 專務取締役 本郷區駒込神明町三四〇
西村 宏恭 式部官 本郷區駒込動坂町一二三
西村 丹治郎 衆議院議員 (電小石川) 本郷區追分町一九
西村 傳藏 金光教本郷教會長 (電下谷) 二九六〇 本郷區根津須賀町七
西原 種雄 帝國冷蔵會社 取締役 (電四谷) 市外代々木一四
西 虎夫 コロンビヤ蓄音器東京支店長 赤坂區青山南町六ノ六七

【ノの部】

額田 嘉晴 メトロ電球 經理課長 市外高田町鷗山一五〇六
額田 晋 神田內科病院長帝國女子醫專 校長 (電神田) 神田區小
額田 豐 額田病院々々長日本大學醫學部々々長 (電青山) 赤坂區氷川町三四
額田 六福 文士 市外杉並町阿佐ヶ谷二八九
沼田 賴輔 文學博士 東京考古學會副會長 小石川區原町一一九
能一 來吉 辯護士 橫濱市中區本牧字臺三一四
能仁 事一 本行寺主 岡山市山崎町

野崎廣太 (電青山) 市外澁谷町下
 野崎精一 (電府下) 北多摩郡石川
 野崎又太郎 (電一八九二) 岡山市弓之町
 野崎一雄 扶桑海上火災保險會社
 野田澤軍治 日本銀行調査局 牛込區市ヶ谷富久町一三
 野中勝明 陸軍少將帝國飛行協會理事
 野間五造 久原鐵業 (電牛込) 牛込區市ヶ谷仲之町三八
 野村此平 相談役 (電九九九) 芝區愛宕下町一ノ二
 則武善夫 則武工場設計工業事務所 (電浪花) 日本橋區濱町二ノ二

【ハの部】

蓮岡清次郎 (電四谷) 市外代々幡町
 挾間茂 (電四谷) 代々幡町
 橋本卯太郎 (電高輪) 市外澁谷町
 長谷井千代松 (電高輪) 市外澁谷町
 花房太郎 (電高輪) 市外大崎町上
 花房仙次郎 (電高輪) 大崎二九一
 三井銀行 兵庫縣武庫郡本山村森五八六

花房滿三郎 (改造社) (アバト) 電銀座四三一
 分室勤務 (〇) 勸先電芝一五〇三
 門アバト六階五一號
 花谷正 陸軍少佐關東軍司令部付
 島山藏六 (電大森) 市外馬込町平張九四七
 原田軌一 (電高輪) 市外大崎町今里町五五
 原田熊雄 (電九段) 麴町區平河町五ノ一五
 原田芳太郎 (電四谷) 市外中野町上
 原澄治 (電四谷) 市外原九一八
 濱野英次郎 (電大塚) 北豐島郡西巢
 濱田三平 (電大塚) 鴨新田八八一
 春名喜四郎 海軍少將馬公軍港司令官
 早川記作 (電日本橋) 小石川區小日向
 早川鐵冶 (電八十九) 臺町一ノ四八
 林千代治 (電青山) 市外澁谷町八幡通三ノ二一
 林癸未夫 拓務大臣官房會計課
 林喜夫 早大教授
 林庸夫 銀座松坂屋 市外澁谷町豐澤三一 池田方
 三井物産 (電四谷) 四谷區内藤町一字垣邸内

【ヒの部】

久安博忠 (電高輪) 市外在原町中
 井茂 (電高輪) 延一、一〇三
 井節 (電高輪) 延一、一〇三
 賀義典 (電高輪) 延一、一〇三
 賀潤二 (電高輪) 芝區三田豐岡町八同
 松莊一 (電高輪) 芝區三田豐岡町八同
 松市藏 (電高輪) 芝區三田豐岡町八同
 松福治 (電高輪) 芝區三田豐岡町八同
 松福治 (電高輪) 芝區三田豐岡町八同
 木均平 (電高輪) 芝區三田豐岡町八同
 沼淑郎 (電高輪) 芝區三田豐岡町八同
 沼駿一郎 (電高輪) 芝區三田豐岡町八同
 日幡繼一 (電高輪) 芝區三田豐岡町八同
 廣瀬基 (電高輪) 芝區三田豐岡町八同
 廣瀬彦太 (電高輪) 芝區三田豐岡町八同

【フの部】

福井三郎 (電青山) 市外千駄ヶ谷
 福島輝男 (電墨田) 市外龜戸町六ノ一二二
 藤井清一 (電丸ノ内) 府下三鷹村牟禮三八三
 藤井眞澄 (電高輪) 市外狛江村和泉一五七
 藤岡元徳 (電高輪) 市外狛江村和泉一五七
 藤澤一孝 岡山地田家家扶
 藤島太麻夫 工兵中佐 市外杉並町高圓寺一〇〇
 藤田讓 (電銀座) 麴町區三年町二
 藤田敏郎 (電大塚) 市外下落合近衛町四一七
 藤田秀倫 (電高輪) 市外大崎町上大崎五八九
 藤田偵治郎 (電大塚) 市外長崎町荒
 藤谷聯三郎 (電大塚) 市外長崎町荒
 藤原俊雄 (電大塚) 市外長崎町荒
 藤原淳彦 (電大塚) 市外長崎町荒
 藤原音松 (電大塚) 市外長崎町荒
 藤森雄平 (電大塚) 市外長崎町荒

野崎廣太 (電青山) 市外澁谷町下
 野崎精一 (電碓) 府下北多摩郡碓砦村
 野崎又太郎 (電) 岡山市弓之町
 野崎一雄 (電) 市外荏原郡馬込町東一、〇一五
 野田澤軍治 日本銀行調査局 牛込區市ヶ谷富久町一、一三
 野中勝明 陸軍少將帝國飛行協會理事
 野間五造 久原鐵業 (電牛込) 牛込區市ヶ谷仲之町三八
 野村此平 相談役 (電九九九) 芝區愛宕下町一ノ二
 則武善夫 則武工場設計工業事務所 (電浪花) 日本橋區濱町二ノ二

【ハの部】

蓮岡清次郎 (電四谷) 市外代々幡町
 挾間茂 (電四谷) 代々幡町
 橋本卯太郎 (電四谷) 牛込區市ヶ谷臺町七
 長谷井千代松 (電高輪) 市外澁谷町
 花房太郎 (電高輪) 市外大崎町上
 花房仙次郎 (電高輪) 大崎二九一
 三井銀行 兵庫縣武庫郡本山村森五八六

花房滿三郎 改造社(アパ)ト電銀座四三二
 分室勤務(〇) 勤先電芝一五〇三
 麴町區内幸町二ノ二虎ノ門アパト六階五一號
 奉天江島町一九
 花谷正 陸軍少佐關東軍司令部付
 大倉鐵業 (電大森) 市外馬込町平張九四七
 株式會社 (電四五七) 市外馬込町平張九四七
 原田軌一 (電高輪) 市外大崎町今里町五五
 原田熊雄 (電高輪) 市外大崎町今里町五五
 原田芳太郎 (電九段) 麴町區平河町五ノ一五
 井商店顧問 (電四谷) 市外中野町上
 井商店顧問 (電二四二) 市外原九一八
 中國信託社長 倉敷市本町
 原澄治 (電大塚) 北豐島郡西巢
 濱野英次郎 (電八五二) 鴨新田八八一
 濱田三平 辯護士 (電小石川) 小石川區小日向
 海軍少將 (電三六三) 臺町一ノ四八
 馬公軍港司令官 麻布區筈町一八〇
 椿名喜四郎 樺太工業
 早川記作 醫師 (電日本橋) 日本橋區通二丁目六ノ四
 早川鐵治 農業 (電青山) 市外澁谷町八幡通三ノ二一
 林千代治 拓務大臣 (電三二一五) 荏原郡多摩川村奥澤一八
 林癸未夫 早大教授 市外代々幡町幡ヶ谷二一〇
 林喜夫 銀座松坂屋 市外澁谷町豐澤三一 池田方
 林庸夫 三井物産 (電四谷) 四谷區内藤町一字垣邸内

【ヒの部】

久安博忠 警視廳總監
 官房外事課長 (電高輪) 市外荏原町中
 平井茂節 神奈川縣巡查 橫濱市中區弘明寺町一ノ四
 赤坂區榑町三 高橋方
 平賀義典 東京株式取引所調査課 市外荏原町小山宇池ノ谷五一八
 芝浦製作所 (電高輪) 芝區三田豐岡町八同
 芝浦製作所 (電五六〇二) 潤會アパート六二
 帝國興信所理事 四谷區須賀町二五
 平松市藏 辯護士 (電銀座) 麴町區内幸町一ノ五
 帝國生命 牛込區早稻田鶴卷町三〇〇瑞穂館
 平木珣平 大阪銀行集會所書記長 (電蘆屋) 兵庫縣武庫郡本
 會所書記長 (電三五二二) 庄村深江九七七
 法學博士早大專門學 (電牛込) 牛込區早稻田
 校長早大教授兼理事 (電三七一四) 鶴卷町二八六
 平沼淑郎 男爵法學博士 (電四谷) 市外西大久保
 平沼駿一郎 樞密院副議長 (電一八一) 四二九ノ一
 日幡繼一 岡山電氣軌道會社 (電岡山) 岡山市花畑三六
 廣瀬基 特許局長 (電下谷) 市外日暮里町字日
 廣瀬彦太 械部長 (電二七) 暮里一、一八
 海軍大佐 終會常務理事 (電荏原) 市外馬込町原
 (電二七三六) 九三、八九一

【フの部】

福井三郎 (電青山) 市外千駄ヶ谷
 (三〇九) 原宿一七〇
 福島輝男 東京米穀商品取引所監査役
 流光舍石 (電墨田) 市外龜戸町六ノ一二二
 鮫製造所 (電九ノ内) 府下三鷹村牟禮三三三
 ツーリスト (電三〇六八) 府下三鷹村牟禮三三三
 ヒューロウ (電三〇六八) 府下三鷹村牟禮三三三
 文士 (電高輪) 市外狛江村和泉一五七
 (電一五四三) 市外池田家内氣付
 藤岡元徳 岡山池田家家扶
 藤澤一孝 工兵中佐 市外杉並町高圓寺一〇〇
 藤島太麻夫 齒科醫 (電銀座) 麴町區三年町二
 (電四〇八五) 麴町區三年町二
 藤田敏郎 明治生命 (電大塚) 市外下落合近衛町四一七
 專務取締役 (電四三九) 市外大崎町上大崎五八九
 前總領事 (電高輪) 市外大崎町上大崎五八九
 山崎商店 (電大塚) 市外長崎町荒
 專務取締役 (電二七六九) 井一、八八一
 鹿兒島縣內務部長 鹿兒島市內務部長官會
 藤田偵治郎 神田和泉小學校長 四谷區仲町三ノ七
 藤谷聯三郎 三柏商會社長 (電青山) 赤坂區臺町一五
 (電五三三六) 赤坂區臺町一五
 藤原俊雄 第一生命相互會社徵收課長 市外入新井町新井宿九八二
 藤原裔生 仁壽生命 市外蒲田町北蒲田七一四
 藤原音松 成蹊高校教授 市外吉祥寺二八五六
 藤森雄平 昭和醫學博士 (電青山) 市外澁谷町青葉一二
 教授醫學博士 (電一二六四) 市外澁谷町青葉一二

船石吉平 鐵道省技師

市外大久保百人町五六

【ホの部】

星島二郎 衆議院議員

(電小石川) 本郷區眞砂町一五

本位田祥男 東京帝大教授

(電池上) 市外池上町久ヶ原五六五

堀尾萬三郎 愛國生命會社員

市外澁谷町宇田川町五四

堀内兼治郎 會社員

(電伊勢原) 芝區二本榎西町二

【マの部】

松浦卓逸 米國貿易會社

(電京橋) 京橋區銀座三ノ二

松岡辨 辯護士常盤木商會代表社員

(電京橋) 京橋區五郎兵衛町一

松枝保二 文部省囑託

牛込區辨天町五八

松崎天民 文士

赤坂區丹後町五丁目

松香利男 大日本麥酒會社會計課

市外目黒町中目黒一、四八五

松島信夫 府立三中教諭

千葉縣市川町砂

松田竹太郎 海軍造機大佐

(電) 長崎市今里町五五

松谷謙三郎 文教書院監査役

市外入新井町新井宿一、一三二

松村清吾 根岸病院院長

(電下谷) 下谷區根岸病院

松本學 福岡縣知事

(電福岡) 福岡縣知事官舎

松本常太郎 三井銀行本店

市外高田町大原一、六三一

松平康春 安田生命

(電四谷) 市外中野町木郷六五

正富汪洋 子爵貴族院議員

(電青山) 市外目黒町上目黒五〇二

正宗直三郎 詩人

市外代々幡町代々木富ヶ谷、一四五五

正宗得三郎 三明社代表社員

(電青山) 市外千駄ヶ谷

前川遜 洋畫家

(電中野) 市外中野町東中野一、七四五

丸山良二 滿蒙毛織會社

(電牛込) 牛込區矢來町二九

丸尾剛 東京文理大教授

小石川區竹早町一〇八

間部彰 農林省農産課長

市外下荻窪三一

間野浩 計理士

(電青山) 市外澁谷町神山二二

滿藤政太郎 東大大学院

小石川區竹早町六四 藤原方

【ミの部】

三浦覺玄 電氣日報社

(電九段) 麹町區下二番町一一

三浦達夫 辯護士

(電津山) 津山市田町

三村錦三郎 海軍少將

(電高輪) 芝區二本榎西町二

三宅俊雄 步兵第十四聯隊長

(電小倉) 小倉市舊城内

三宅德業 行政裁判所評定官

(電青山) 市外澁谷町青葉九

三宅勘一 東京土地住宅會社常務取締役

(電牛込) 牛込區鶴卷町一九八

三宅靜一 中國酒造荷捌所

(電牛込) 牛込區鶴卷町一九八

三宅正太郎 大審院判事

赤坂區青山南町五丁目四五

三宅重也 辯護士

四谷區舟町四一

三宅圓平 洋畫家

市外池袋町大原一、四五三

三宅平左衛門 福山紡績取締役

(電倉敷) 倉敷市倉敷

三宅芳郎 辯護士

小石川區竹早町六四 藤原方

水川復太 大正生命

(電四谷) 四谷區東信濃町二七

水島庄平 第一銀行

本郷區駒込神明町三四一

水島敏行 藝術座主幹

本郷區菊坂町四〇

水谷武(竹紫) 內務省

(電四谷) 牛込區余丁町一〇三

光岡徹 辯護士

市外長崎町西向二、七九四

光延豐 辯護士

本郷區駒込追分町三〇

光畑甚吉 (電池上二三) 市外東調布町字嶺六四九

宮本譽志男 辯護士

(電浪花) 日本橋區濱町二ノ一七

宮本保 鐵道技師

市外中野町打越一、九四七

宮島昇 寫真業

(電牛込) 小石川區音羽町三ノ一七

滿谷國四郎 洋畫家

(電大塚) 市外下落合七五三

美土路昌一 東京朝日總務

(電小石川) 小石川區水道町四一

溝手保太郎 岡山合同貯蓄銀行取締役

(電早島) 岡山縣都窪郡早島町

【メの部】

村木正憲 大阪機械工作所取締役會長

(電戎) 大阪市住吉晴

村田攪雄 國民新聞社

(電戎) 赤坂區青山南町五ノ五

虫明嘉源治 昭和興信所長

市外中野町雜色六〇八

森一海 辯護士

(電大塚) 小石川區大塚仲町三六

森義臣 海軍少將

(電牛込) 小石川區小日向臺町三ノ九七

森清治 會社員

(電高輪) 麻布區本村町四三

森 眞一 陸軍中尉 千葉縣習志野藥園臺仲 三好方
 森 彦三 工學博士 名古屋市中區御器
 森本邦治郎 貝島合名社事務 理事中央火災社長
 森原元夫 加島信託 本郷區追分三五 更新館
 守屋此助 興亞株式 電機濱水局 横濱市子安一、五〇四
 守屋荒美雄 帝國書院社長 著作兼出版業 四一七六 半込區矢來町一三九
 守屋善兵衛 會社員 電高輪 市外目黒町中目黒一、一八五
 守屋博 東京帝大 青山外科 小石川區原町一〇五
 守屋松之助 岡山市長 電特長 岡山市桶屋町一二四
 守屋秀雄 遞信省 市外東中野一、六一九 腰越方
 守屋義太郎 市外東中野一、六一九 腰越方
 望月周雄 市外高田町雜司ヶ谷四七八
 本山仲造 文士 刺煮 電五橋 京橋區南傳馬町三ノ九
 本山雅雄 暖房裝置設計並工 事請負常盤商店主 電京橋 京橋區松屋
 本松雅雄 電牛込 市外高田町雜司ヶ谷四七八
 電九段 市外高田町雜司ヶ谷四七八
 電牛込 市外高田町雜司ヶ谷四七八
 電九段 市外高田町雜司ヶ谷四七八
 電牛込 市外高田町雜司ヶ谷四七八

【ヤの部】
 山田龜治 三岐鐵道會 社取締役 市外大崎町上大崎長者九二六九
 山田金雄 千代田生命 會計課長 市外大崎町上大崎五二
 山田準 二松學 舍校長 電九段 市外大崎町上大崎四六
 山田常次 大日本製藥 會社藥劑師 本郷區千駄木町五〇
 山田弘倫 汽車々輛會社技師 本郷區千駄木町五〇
 山田經治 陸軍 醫總監 市外中野町四、〇九八
 山口猛 安田銀行 市外世田ヶ谷中原六四〇
 山口 內務省警保局 市外大井町一本松二、二三八
 山崎定太郎 學習院 事務官 市外目白學習院官舎
 山崎廉平 岡山西造 會社社長 市外蒲田町北蒲田五九五
 山崎丈夫 貿易商 電蒲田 市外蒲田町北蒲田五九五
 山下牛一 東京市電氣 局共濟組合 市外代々幡町幡ヶ谷七三一
 山岡祐章 醫師 市外代々幡町幡ヶ谷七三一
 山岡祐章 鐵道省購買 第一課長 市外代々幡町幡ヶ谷七三一
 山岡祐章 監製糖 監査役 市外中野町打越二〇四四

山成 豐 自動車業 芝區南佐久間 町一丁目三
 山根十吉 山根ビル 電高輪 麻布區本村町一六
 山根好恭 前帝國新報社長 石炭松江商行主 電浪花 日本橋區濱
 山野邊寬市 前横綱 電本所 本所區千歳町四七
 山室榮作 千代田生 命 參事 電横須賀 横須賀市中里一三九
 山室軍平 救世車日 本司令官 電青山 市外澁谷町羽澤四三
 山本清次 陸軍中將 東京市外杉並町大字田端七〇〇
 山本莊一郎 永樂俱樂部社 員 撞球選手 市外東中野町上馬八六六
 山本節次郎 千代田信託取締役 市外東中野町上馬八六六
 山本 峻 陸軍歩兵中佐 市外東中野町上馬八六六
 山本二郎 京都市同志社 內 市外吉祥寺二八五四
 山谷德次郎 日新醫 學社長 市外千駄ヶ谷町八三八
 山谷虎造 岡山縣眞庭郡勝山町三田
 藥師寺主計 倉敷絹織常 務取締役 電小石川 小石川區林町六三
 安井誠一郎 東京市 社會局長 電四谷 市外松澤村赤堤五二四
 安井英二 內務省警保 局保安課長 市外東中野町上馬八六六
 安田武彦 陸軍大佐 市外野方町新井六五五

安延郁太郎 內閣印刷局技師 市外東中野町上馬八六六
 保田次郎 前興業銀 行副總裁 市外東中野町上馬八六六
 保田友太郎 權太工業 庶務課長 市外東中野町上馬八六六
 柳井貴三 櫻井病院 副院長 市外東中野町上馬八六六
 柳井義男 長崎縣 警察部長 市外東中野町上馬八六六
 柳井義男 長崎縣 警察部長 市外東中野町上馬八六六
 屋萱輝之 神戶海上運送 火災保險會社 東京支店 日本橋區江戸橋一ノ一三
 矢野恒太 第一相互 生命社長 市外東中野町上馬八六六
 矢部廉 辯護士 市外東中野町上馬八六六
 矢吹貞夫 市外東中野町上馬八六六
 矢吹傳二 市外東中野町上馬八六六
 矢吹武 市外東中野町上馬八六六
 矢鍋永三郎 朝日新聞社 市外東中野町上馬八六六
 湯淺元夫 早稻田大 學人事課 市外野方町下鷺ノ宮一一九中屋方
 湯淺武孫 三共常務 取締役 電高輪 市外品川町御殿山七三三

柚木久太 洋畫家 (電小石川) 市外田端町六〇九
 弓削幸太郎 帝都復興助成會社事務取締役 (電荻窪) 市外杉並町阿 (二〇〇) 佐ヶ谷六五

【Eの部】

横山泰造 衆議院議員 小石川區大塚仲町四一ホの一 橋本方
 横山昌次郎 十五銀行常務取締役 (電四谷) 市外西大久保一五九
 横山若松 東大工學部教授 小石川區雜司ヶ谷八三
 横溝里四郎 清酒商 横濱市根岸鐵砲場三、二五七
 吉岡源一郎 東京外語教授 (電牛込) 市外戸塚町諏訪二二七 (三〇三八)
 吉岡壽男 辯護士 (電九段) 麹町區下二番町七 (三〇九八)
 吉岡梓郎 シヤパンツリー 下谷區三崎町感應寺内ストビュロー
 吉井濱次郎 辯護士 東(電京橋) 京橋區新富町三ノ二 (五二〇一)
 吉田章信 京府會議員 市外高井戸町下高井戸二五一 體育研究所 技師
 吉田靜夫 神田淡路小學校 市外野方町上高田一四六
 吉田英雄 日大教授 日本社會(電神田) 神田表猿樂町三 問題研究協會理事 (五七)
 吉田寅之 安田生命代理店 市外池袋町八八五

依田藤衛 藤商會 芝區金杉二丁目二〇
 米川正夫 陸軍大學校教授 市外高井戸三五
 頼信藤四郎 辯護士 (電九段) 麹町區三番町二八 (二〇五三)

【Fの部】

渡邊勝三郎 前東洋拓殖會社總裁 (電大塚) 市外下落合五五二 (三四六八)
 渡邊清二郎 本郷區駒込林町二二四
 渡邊行三 陸軍主計監 市外目黒町下目黒小瀧四九七
 渡邊猛 陸軍工兵中佐 市外杉並町阿佐ヶ谷二七五
 渡邊忠武 砲兵中尉 (電四街道) 千葉縣四街道野戰 (一四四) 重砲兵第四聯隊
 渡邊通平 辯護士 (電浪花) 日本橋區新 (二二四六) 材木町八
 渡部兼貞 陸軍砲步少佐 四谷區傳馬町一ノ五二 王子製紙 販賣部 小石川區原町一七 坂本方
 和田一郎 第一相互生命會計課長 (電大森) 市外大井町原、二二七 (三六二五)
 和田盈和 陸軍砲兵中佐 大阪市第四師團司令部
 和久田一男 明治製菓本社 市外瀧野川町田端三八〇 新昌閣方

普通會員名簿(順次不同)

中央大學

幹事 三浦武夫 本郷區元町二ノ五六 柳田方
 同 万城登 神田區中猿樂町七日新館
 同 廣戸威夫 市外杉並町高圓寺九二九
 同 中川哲夫 市外野方町上高田二〇二 村椿方

第一豫科

大倉正二 塚本篤耶 坪井勇
 平井泰 山本利男 近藤多八郎
 湯本源治 妹尾兼弘 大内敦
 麻植占一 難波徳男 中野津義
 島田壽 川上隆夫 高月軋
 竹原弘 村木全 中島政男
 山田武夫 藤原弘志

第二豫科

法學部

大田龜一 景山文男 高木里士
 後藤金志 榎本操 江川孟
 有正菊雄 岩田喜多重門 岡本覺
 中江護 山崎正登 福田隆一

商學部

小松原善信 吉本純正 鷹取登與太
 石原豐米 岩藤惠一郎 楠計夫
 高原金雄 荳野喬 村上熊一
 室敏耶 近藤勝幹 丸尾夫
 三浦武夫 万城登 高原達夫
 森本武夫

專門部 法學科

廣戸威夫 中川哲夫
 川上慶武 小林弘 石井照夫
 石原友二 鳥越俊吉 富田知周
 岡十萬男 渡邊薰 柏原政一

坪井昌夫 卜部清次 古市太郎
 江川孟 荒山榮吉 佐藤志三
 菊地英夫 菅野義夫 川端信治
 成智英雄 市原若義 原田壽久夫
 中村新平 岡本正義 尾上實
 原田三男 西林正志 橫部萬長
 岡田三男 金兒清敏 武光茂
 田主吉太郎 谷川春一 矢吹小太郎
 成瀬卓之 中山保雄 青山季晴
 福田廣人 藤井四郎 平井芳三郎
 三宅鐵太郎 實盛時雄

專門部 經濟科

長谷川淺一 岡本正義 田村量徳
 城井田大作 貝原源道 山本信夫
 守屋利藏 時實正巳 徳永正
 黒瀬泰 秋田正夫 森田虎一郎
 金田利二 石井高市

專門部 商學科

如中芳樹 太田稔 片岡忠平
 如喬 土肥良二

東京外國語學校

幹事 池田光敏 市外戸塚町上戸塚一、〇四五
 今井方
 同 田中義男 本郷區森川町一三二 鷓山館

英語部

小川芳男 池田光敏 森強一
 高田彰夫 田中義男 廣畑浩
 妹尾正 藤原俊士

佛語部

加藤與三 今田平五郎

獨語部

大石恒雄

西班牙語部

高橋正武 波邊芳男 中塚季之
 大内玉夫 竹中正夫 大谷丙馬

葡語部

齋藤夏夫

支語部

春藤一男

臨教部

金澤七十四

專修大學

幹事 加賀山 潔 小石川區原町一二六 備中館

經濟學部

倉田重己 三宅勳 守屋改太郎
 難波悅雄 杉本信義 内藤一耶
 堀口勉

法學部

赤澤卓輔 下野馨 渡邊涉

經濟科

加賀山 潔 田中直一 井上茂

商業科

大村潤吉 吉田芳政 小野勝海

法律科

鹽見實

計理科

杉本一夫

豫科

今田速男 竹浪虎雄 菅野義雄

二松學舎專門學校

幹事 玉置敬爾 學校内

○
岡田 鉞雄 室山 數喜多 玉置 敬爾
西 新一 室山 勉 藤井 隆

東京帝國大學

幹事 陶浪捷太 本郷區追分町三五 更新館

同 佐藤甲子郎 本郷區西須賀町一五 靜修館

同 高橋俊士 市外池袋一、一七七 中山方

同 大原總一郎 本郷區西片町一〇いの四六

同 荻野正二 本郷區千駄木町一三 坂卷方

大學院 法學部

實兼 稔 三輪勝郎

醫學部

竹内貫一耶

文學部

藤田 一一 北村常夫 小野敏夫
重見博一 坂田芳衛 木山實
佐木秋夫

理學部

木山英一 守屋美賀雄 間野 浩

農學部

土屋大助

法學部 法律學科

河合 篤 平田英一 藤田 信
松田 繁 出射義夫 淺田秀夫
一瀬 忠 小橋確治 片山夏治
内田 藤雄 岡田武彦 清水喜三郎
高取 馨 高田英治 高橋俊士
谷 徹 西崎 孝 福田源一耶

三船祥二耶 森岡謹一耶

藥師寺大器治 有友 穂

小郷壽一 大橋多計三

公森俊耶 古原勇雄

永岡 勇 藤原節夫

松田俊武 淺原昌治

大塚篤夫 大水 精

高見專四耶 後藤 博

足利義包 川野敏夫

菅野關雄 摺河金麿 田原貞實

土屋忠一 二木 晃 日笠慎之助

平方代三耶 平田伯一 福田 弘

三戸岡道夫 安井 省 横田信夫

吉田圭次 藤村富士夫

政治學科

坂野 曠 河藤 忠俊 赤野 敬止

加藤 巖雄 陶浪捷太 松尾武夫

丸尾 毅 遠藤直一 大月 勤

岡田秀男 笹田貞三耶 重成 肅

杉本敏夫 根岸眞六 東谷 義人

堀 正巳 草野博志 司波 實

中野晴海 日笠博雄 藤原清文

松岡 豐 森田久 山本 廉

奥原日出男 金万 弘 野田 遙

能勢雄吉耶 本郷 公 森本三耶

和栗 博

醫學部 醫學科

寺坂覺三 虫明卯三耶 枝廣準三

梶谷 銀 木田文夫 高村 繼夫

長鹽伸行 藤原正 國富郁夫

篠田萬龜太 竹内正敏 西下止夫

安田 稔 吉田 實 國定 清

時實利彦 柳井時正

藥學科

田中一雄 若口眞澄 林 清五耶

宮島六十一

工學部

鳥居博通 篠井和之 藤岡康夫
 井上太郎 今尾勝 太田浩
 岡崎邦彦 岡清隆 香川三六
 久城修一 竹井素行 寺岡節也
 平松頼夫 深谷克巳 牧野仁耶
 渡邊和夫 秋山保光 景守祐
 近藤晴男 原田肇 藤原巧
 西山太喜夫 保田慶 岡薰
 横山幹太 守屋公平 堀夷
 土居秀次 内藤孟 橋本爲男
 橋本眞平 井上幸彦 高橋健吉
 石原禎之介 白石猛夫 土居晋一

文學部

上野明 向井敬太 岩佐正
 藤波平二 向井克胤 伊澤元美
 山田琢 齋藤護一 上田義文
 板野長八 旗田巍 福島克之
 石賀修 片山亘 鳥井博耶
 高橋觀龍 佐藤一徳 宇野善三

原田歷二 四崎直正 武木正義
 伊達尚 渡邊竹夫 金澤謹
 南壽 黒住眞雄

理學部

仁科尙文 津田一夫 片岡虎雄
 瀧本忠男 行木隆 友田鐵雄
 橋本與平 分島拓 清水嘉三
 佐々木加壽志 片山信夫 石原巖
 守屋益男

農學部

井上新一 笠原武夫 田中一彦
 犬飼嘉積 黒瀬太一 龜山武一
 石原耕作 日出平昇 額田須賀夫
 外山二郎 山田金吾 廣瀬健一
 島稔 中山三郎 湯淺健次
 大野稔 江口最 佐藤甲子郎

經濟學部 經濟學科

千田愛彦 富田領之介 野宮一男
 小野芳耶 荻野正二 大原總一郎
 田中力 宮田武志 三村善壽耶
 村島武夫 荻野央 池本卓
 菅熊夫 古泉潔 小西順次
 谷口英幸 佐々木義夫 新田鑽二
 正宗猪早夫 山本和 鹽見秀次耶

商業學科

尾關四耶 中山直己 大森義富
 谷本博 岡本健三 土岐定一
 中島敏夫 前田稔 虫明博

慶應大學

幹事 安東喜四夫 市外戸塚町戸塚六〇五
 同 中村四郎 牛込區原町三ノ八

經濟學部 本科

渡邊彌壽夫 津可重夫 杉崎重明

正本慎二 古宮健吾 西崎輝男
 竹内研吉 谷敬之 山本武平
 杉山政夫 今道勇吉 寺尾修治
 平尾豐 土肥原精 矢吹三耶
 松浦一 幡中達志 大森實五耶
 赤木進午 藤田信雄 猪原春雄
 守谷理助 岡崎嘉治 藤田雄吉
 宇津水靜男

豫科

石津良介 宗本敏男 田邊弘尙
 岩堂太郎 吉田英夫 岡崎博
 野村義夫 平野博太郎 岡本壽夫
 石飛俊一 矢吹孝夫 坪田立也
 齋藤勇 鹽見早苗 原田敬介
 山田啓吾 上岡敬一 高月武夫
 河木清雄 小島大介 木下一耶
 渡邊一明 武井豊 辻安藏
 溝口博 石津廉夫 春名寛
 草野信男 那須健三 村田博二

安延 勉 武内 潔 林 喬一
 淺井 啓徳 井汲 清澄 佐野 健吉
 木村 康雄 岩本 博 森 五郎
 友保 基兄 野崎 齡太郎 山口 義輔
 瀧川 一三 守屋 宏 重戸 明夫
 山田 謹一 小川 春 山本 弘

法學部 本科

信原 鎮夫 石川 得介 岡本 東介
 長尾 實 大橋 公夫 高根 和美
 松本 長勝 荒木 健三 野山 青雲
 清水 恒雄 神原 信夫 劔持 羊二
 藤村 徳衛

豫科

吉田 浩二 守安 守 青井 幸夫
 荻野 尙次郎 間野 恭介 湯淺 順孫
 森田 孝平 朝枝 達郎 板野 厚平
 内田 英二 篠原 文雄 生長 新九郎
 佐々 明 土居 遠一 中藤 重三

森 博視 鈴木 哲造 楢本 正
 溝手 宗平 守屋 二郎 板野 彌一
 内山 幸夫 三宅 勝太 池上 虎太郎
 矢切 清吾

政治學部 本科

安田 明 藤岡 元行 青山 清
 長田 仁太郎 小林 卓 乘金 光男
 山崎 始男 楠見 幸信 内田 健
 青木 元雄 三浦 哲 村田 仁一
 岩崎 謙三

豫科

和氣 徳三郎 丸野 正忠 岡崎 甚吉
 板野 常房 秋田 遼太郎 大森 一耶
 水田 直己 岡田 章夫 柏野 保
 藤原 義二 吉川 理一耶

文學部 本科

稻田 昇平

東京商科大学

幹事 木山 博精 府下立川町旭町三八四四 矢部方
 同 守屋 信

豫科

大丸 幹雄 小野 晃 井手 寅夫
 川崎 基 清水 英太郎 森 爲夫
 兒島 秀彦

醫學部 本科

井手 行乎 瑞 秀一 花房 正三
 中村 四郎 齋藤 芳耶 安東 喜四夫

豫科

津崎 利雄 前田 享一 名和 清
 窪田 一胤 網島 國忠 佐藤 得自
 佐藤 文雄 岸田 壯一 大西 廣志

高等部

小村 壽美夫 谷 憲之亮 茅野 仁耶
 櫻井 豊 親 義雄 中塚 幸雄
 佐藤 孟 寺尾 幸男 片岡 哲夫

早稻田大學

幹事 淺尾 寛一 市外杉並町高圓寺九九五 山田方

清水 孝止 花房 英一 守屋 信
 藤田 保男 木山 博精 小阪 東彦
 向井 務正 古瀬 茂 増田 萬次郎
 太宰 虎男 花房 健 遠藤 哲一
 茂渡 進 丸尾 正直 相田 省二
 江田 三郎 岡田 敬太郎 相川 勇
 小畑 省吾 梅野 典平 上田 重昌
 藤澤 定雄 太田 幸人 向井 莊
 福島 渡 小野 縁 櫻間 太
 高橋 若松 妹尾 良次郎 宮田 雅明

同 森 安二郎 四谷區番衆町一八 山口方
 同 近藤 敏明 四谷區番衆町一八 山口方
 同 片岡 曆夫 市外目黒町三田一六二
 同 池田 早苗 府下四武線東伏見中村學寮
 同 植木 知之 市外雜司ヶ谷龜原九 植木方

大學部 政治經濟學部

河原 善平 木村 象雷 東田 正信
 石岡 知年 小田 武雄 岡田 實
 大西 藏一 片岡 曆夫 日下 精
 藤原 孝德 明石 秋雄 鈴木 太良
 梶村 伸一 高杉 清繁 國富 榮
 滿藤 好一

法學部

楠木 輝夫 田上 信太郎 福原 元一
 逢澤 郷志 三宅 京二 森下 力
 石井 緒佐 尾關 義近 梶浦 哲夫
 藤田 巖 杉本 潔 淺野 猛人

商學部

生長 壽一 堀 畑修三 大橋 篤治
 片岡 二男 景山 四郎 河原 恭平
 吉田 政志 瀧岡 靜 宇高 照輔
 矢吹 信夫 安富 眞一 藤木 勳
 淺尾 寛一 平井 益次 森安 二郎
 石部 讓太 橋本 猛 角野 太郎
 圓地 周 黒瀬 志太 近藤 敏明
 安藤 重吉 廣瀬 慎三 原田 七郎
 日下 秋夫 前原 金治 淺野 德夫
 大野 脩三 青江 重雄 井上 秀一
 布施 孝一

文學部

石谷 徹三 尾島 克己 織田 貫
 笠井 輝二 安井 徳雄 山成 林次郎
 前田 滿穂 伊東 辰男 大山 功
 神原 政美 永幡 正之 黒岩 末吉

藤原 頼隆 湯淺 童眞 清水 一繼
 兒島 高義 浪本 秋夫 寺田 克己
 窪津 年太

理工學部

片岡 正路 黒住 誠一 菊樂 倫治
 鹽見 文作 鹽津 鐵哉 平田 悦士
 鹽田 近三 青津 繁次 齋藤 博一
 萩野 晴一 秋岡 道夫 船橋 廣載

專門部 政治經濟科

伊藤 章 西崎 靜男 戸田 武男
 落合 吉人 田邊 則男 鶴田 雀次
 楠戸 克己 小坂 仁史 平岡 勝郎
 原田 忠資 高山 好美 武岡 眞長
 竹上 繁雄 難波 英介 中島 貞夫
 松枝 毅好 牧野 克己 藤井 虎衛
 船橋 巖 吉田 泰般 池上 慶夫
 有松 義正 湯原 文彦 佐内 正
 原田 一夫 岡田 圭輔

法科

森本 英一 飯田 文夫 原田 義人
 古川 清 秋野 孝郎 脇本 稔
 木郷 四郎 野口 利久 正木 幸平
 田外 新一 有安 寛 重成 茂
 深井 新一 東原 太郎 秋山 敏夫
 直原 義門 黒崎 統一 矢吹 正三
 片山 義正 三宅 篤壽

商科

仁科 正吾 大月 博 渡邊 正
 片山 一四 依田 住夫 米澤 秀夫
 田中 強 多田野 堯久 植野 國一
 松本 陣三 古川 清 木村 孟敏
 三宅 孝正 森田 修一 井上 新一
 片山 壽男 川上 義信 吉田 信一
 高田 秀夫 田淵 忠雄 田川 義夫
 福原 金平 寺見 庸夫 笹部 辰巳

佐藤太郎 菊地英夫 三浦實
 縫谷誠三郎 太田廉親 渡邊正夫
 荻田光榮 竹內麻知 田中成夫
 武木正巳 津崎富雄 野村俊夫
 牧野友夫 近藤猛夫 近藤豐
 近藤通明 木田護 宮木武夫
 溝手進 須藤素一

高等師範部

河田勝 中原一男 內藤登
 平田侃二 宮田木英 田中繁保
 小林寬 守安壯之 仁科新四郎
 川崎齊 上杉幸一 小宮山雄介
 遠藤武夫 堀邊誠 橫田知足
 中尾道章尊 渡邊磊三 川野太郎
 山田延雄 小引三吾 佐藤照治
 堀敏雄 小原孝一 淺羽信衛
 宮原信 井上實正 橋本壽德
 大河原繁穗 中田博介 門樂樟次

第一高等學院

岩田朋治 池田早苗 渡邊侑
 高田善行 植木知之 山吹欣池
 眞野精一 忍那宗男 佐藤成器
 川口正利 竹原靜夫 石原智
 景山宇三郎 橫山雄也 藤井宏正
 福井基一 宮原義久 石田久治
 太田直光 小野壽吉 高井季郎
 中務保二 上森直治 植村一
 柳井保勤 牧野義男 藤井虎衛
 新川達男 森景吟一 木村耕吉
 守屋良一 森三郎 渡邊耕侑
 數田研三 今枝竹次 板野節夫
 石岡憲二 堀川克己 石田正夫
 西谷龜 堀堅三 額田巖
 吉富計夫 矢尾毅 赤木增治
 福井基一 宮原義久 時岡弘志
 大野邦夫 大豐高明 今岡武
 數田愛策 塚村正二 永山三郎

山田木三郎 福武剛二 石源富三郎
 花房六一 高原一秀 津田進
 鶴見武長 那須富彦 長尾心一
 永瀨志郎 阿部正英 赤座三郎
 桐岡利雄 岸木甫 宮原義明
 守屋治久 木村正孝

第二高等學院

橋本篤 片山利夫 牧野成治
 宗田碩夫 勝田英雄 田中穰
 岡田利英 金木憲次 武藤清三郎
 難波秀雄 大森茂 小野茂
 荒木勉 森泰三 渡邊祥輔
 角南東穂 山足稔 西崎正男
 高月幸 佐々木契三九 大山西太郎
 大橋國太郎 竹内朴 田原直章
 田中萬介 岸本浩 淺田正則
 遠藤弘 大谷玄六 佐々木大介
 栗坂耕一 奈夏六三 久山幸生
 大飼弘 前田芳五郎 重面稔

法政大學

水島尙敏 高塚寬 櫻井克己
 池上子耶 伏見武德 黒田晃三
 河邊忠雄 大山卓二 柿本千朋
 安藤正夫 清水聿二 杉田剛三

幹事 吉田利貞 芝區白金三光町三三六 太田方

文學部

伊丹春雄 高谷秀男

法學部

今村征男 伊藤信一 小野長三郎
 岡田秀男 梶谷三男也 木野辰伊
 吉村茂

經濟學部

大西盛男 大森克己 米澤秀男
 戶國盛男 高杉孝 畠中登

日笠正一 藤野哲男 吉田利貞

有元久雄 粟井和美 赤木史郎
逸見克彦 石川浩 池本正之助
小川元雄 大月明正 片山邦祐
加藤正雄 神原修一 古村滋雄
佐藤惠次郎 高橋敏郎 竹内節雄
堤敏三 戸室駿一 中田貞良
西木鍊太郎 信原春男 原玄惠
服部健二 皆木章 村尾實雄
矢吹兵衛

專門部 第一部

岩城哲男 岡本平八 大岩達男
齋藤玉一 佐伯義夫 白神輝男
田淵修 最相毅

專門部 第二部

淺原昌治 大谷觀一郎 岡本龜

小原文一 景山末春 楠戸福三郎
砂子義夫 津田忠重 長谷井直吉
福山鶴治 三島金造

高等師範部

伊藤躍 江田智 眞田哲志
妹尾建治 高島完 田邊善八
仁木新太郎 原唯市 藤井勇
檜村英雄 宮本常男 森部經一
弓削豐

明治大學

幹事 石津謙介 本郷區東竹町三〇 順天館内
同 田口周造 本郷區森川町一三二 鶴山館内
同 森本曠 荏原郡碑倉町碑文谷九〇一

豫科

上田定雄 延原一夫 安原潔
安那泰二 山内健次郎 安原大二

法科

西川士郎 土居通光 小野千秋
岡本武

專門部 商科

可兒定見 河田正 吉川豪
野田盤 藤城吉三郎 江木實
岡田岩吉郎 松元伊太郎 江藤巍
柏木清五郎 瀧澤才次郎 辻文忠
楠戸悌三 桐山三龜榮 秀本香

藤原一耶 藤井英章 藤井勇
藤城富次郎 有元憲 安藤恭一
木下瓦平 妹尾國太郎 鈴木潤一
伊達節夫 大室眞二 大崎匡耶
鳥羽善治郎 房野博榮 堀清
丹羽正彦 新田史耶 蜂谷徹
服部敏雄 鎌田祿耶 片山強
吉田琢巳 横川信介 田中進
鷹取虎雄 中西幸治郎 渡邊清
太田榮 堀切成美 谷榮
小池一耶 古村滋雄 藤井宏正
赤松範一 森安之彦 三宅吉亥
木村謙三 齋藤豐 佐々木一之祐
石津謙介

大學部 商科

原田陸雄 井野川利春 加藤秀雄
木村義衛

政治科

福井等 寺岡孝義 橋本鴻志
高戸武雄 大塚利一 神谷基之
竹原堅固 田村保 高島退策
野間智司 安井軍治 秋山托夫
水田治男 守安尙志 田口周造
橋本恒夫 峰谷守夫 灰賀政夫
大谷壽人 片岡正茂 高取金男
中原正夫 難波憲男 櫻井旭
高原竹造

政治科

岡本國三	野村增一	山本孝雄
藤原三郎	水野幸一	平井達
伊藤俊平	岩城哲雄	片山重利
谷野邦夫	黒崎豪文	遠藤武雄
守屋義和	大橋幸平	河本秀之
田中幸男	倉福正幸	岡岩夫
都志悌二	木下太郎	

法科

伊丹幸太郎	太田榮一郎	高橋英治
福田武郷	家守克己	妹尾勇
花房立己	若狭彌郷	森本曠
黒木雅樹	福田信夫	佐々木日出雄
森原秀夫	池田武	柏野義丸
則武省一郎	山地静夫	

東京高等師範學校

幹事 植田 重 小石川區東京高等師範學校 寄宿

同 山本

巖 小石川區東京高等師範學校 寄宿

渡邊喜一	森山芳夫	三宅幹次
大久保一治	春名猛	入江正己
植田重	高田善明	鳥取良平
藤田辰三	政廣正美	山本巖
安達要	小長純男	宗木透
小池喜久夫	尾高善雄	祇園一
津崎教一	伊藤正	西田泰介

第一臨時教員養成所

淺野博司	池上輝雄	藤井幸夫
守屋若男		

東京文理科大學

川瀨一馬 小田信夫 原田 親
秋山茅野

東京美術學校

幹事 妹尾壽信 府下松澤村松原三九

洋畫科

妹尾壽信 芦澤 浩 河合國男

金工科

新免弘男

東京醫學專門學校

幹事 市村勢夫 市外澁谷町南平臺四四 小瀧方

香四盛長 柴山 茂 市村勢夫
渡邊 厚 竹内 剛 難波 喬

奥田 均 片山憲治 清水正貴
妹尾 弘 小田 保 谷本正夫
奥田浩三 本田泰介

東京農業大學

幹事 古宮三郎 市外澁谷町神泉三二
同 中嶋慎吾 神奈川縣橋樹郡由原町木月農大合宿内

花房信四郎	瀨川孝吉	橋本 晃
古宮三郎	三宅 淳	尾崎英雄
藤田季義	行森 享	古村 獻一
長江久次郎	中島慎吾	渡邊 勇
山口恒耶	長谷部俊彦	岸岡千博

東京高等工藝學校

幹事 勝瀨壯一 市外下落合目白第二文化村上杉方

圖案科

勝瀬壯一 友金 尙 渡邊賢一

精密機械科

岡麻佐夫 平賀清見

印刷工藝科

村本收亮

東京工業大學

幹事 狩谷淨太郎 小石川區竹早町二一八精義塾

染料化學科

淺木廣治

紡織學科

長野正滿 白岩文雄

同專門部

大澤雅雄

窯業學科

岩崎郁夫

電氣化學科

藤野 茂

機械工學科

堀 裕 狩谷淨太郎

同專門部

塚原治郎 野上隆雄 藤原光男

三島弘毅 森安說雄

電氣工學科

朽木雄藏 小川 保 和氣 博

同專門部

徳田 猛

建築學科

原田 有 吉田章惠 菅 哲夫
鴨井英治

同專門部

石井一夫

拓殖大學

幹事 渡邊 毅 市外高田町雜司ヶ谷四五三番場方

豫科

船橋四郎 井上和夫 橋田 稔
須々木春雄 馬場 勇 岡田克巳
淺野 貢 高山新太郎 栗坂忠敬
檜崎三千秋

學部

木下昌平 松原代吉 波邊章一郎
塚原陽太郎 篠岡竹四郎 横山敏夫
三島壽夫 磯部三郎
笠石 強 妹尾 茂 渡邊喜一
圖岡 泰

專門部

日本大學

幹事 横野伯之 小石川區原町二六 備中館
同 堀 弘之 本郷區森川町一三二 鶴山館

豫科

青木 保 橋立 清 田淵喜久男
山田武夫 堀 弘之 小野盛次
片山 猛 藤澤 基 松澤 廣
石田重耶 井上 勉 淺野 謙
陳子夏 佐藤義正 渡邊 斌
兩部英麿 田中 明 林 早苗

河内 慧 吉川 滿季 千田 厚
 小川 陸男 竹原 龜久夫 池田 二三男
 川野 喜源二 安藤 素 江田 高枝
 藤井 喜代治 渡邊 謙一郎 高木 仁
 石原 正 岡野 喜代次

理科豫科

佐田 悅二 岡本 春雄 須江 二郎
 土屋 正己 木城 敏之 川島 克己
 佐々木 浩一 大村 元雄 雀部 捨雄
 武藤 孝雄 加藤 嘉清 長田 卓
 小杉 得之 瀨島 信 水川 保夫
 青山 毅 楠戶 豐吉 稻垣 馨
 山本 利雄

理科學部

楠戶 季雄
 橫野 伯之 鈴木 秀次郎

法學部

專門部 理科

淺沼 幸夫 板野 正雄 岡田 彰
 小川 泰 小野 和考 片山 泰雄
 河本 毅 菅 幸雄 高島 吞海
 出原 二郎 長尾 利一 野龜 季雄
 早川 忠信 堀 素明 牧 甲子郎
 宮脇 泰一 森 嘉奈衛 橫見 貞男
 榎 太郎 越宗 犬猪五郎 額田 東衛
 牧山 堅一 福原 庸二 宮崎 基一
 森 胤直 大山 磐 大饗 益
 加藤 正次 田丸 朔 七村 藤吉郎
 稻葉 實 友保 進治 松波 茂三

同醫科

國文科

法科

岸 壽太

昭和醫學專門學校

幹事 中井 毅 市外荏原町旗ヶ岡昭和醫學專門學校內

宮本 誠夫 坂田 義正 中井 毅
 稻岡 稔 赤木 誠一 河本 徹夫
 龜山 一男

日本醫科大學

幹事 佐藤 正彦 小石川區原町一二六 備中館內
 同 宮本 健 本郷區追分町八八 大昌館

川上 鼎 宮本 健 佐藤 正彦
 犬養 仙 新海 敬文 橋本 明
 安東 正介 森 忠夫 新海 功
 古中 久敬 谷原 豐治 山本 謙太

齒科部

大賀 毅 貝原 東一郎
 松本 武夫 松森 金五郎 太田 正志
 長船 一耶 犬養 謙

東京慈惠會醫科大學

幹事 岩本 敏夫 下谷區下根岸五一 根岸病院
 同 美甘 守 府下荏原郡矢口町蓮沼一六七

豫科

上山 進 長尾 貞一 大橋 政人
 長瀬 一雄 美甘 守 片山 循之
 三橋 温 森野 賢男 平井 方策
 神川 虔 延岡 均 橫内 賀

學部

岩木 敏夫 加賀 滿 高原 美文
 江見 勇 粟井 正道 能勢 佐

中村三省 友光 務

東洋大學

幹事 鷓塚壽夫 神田區南甲賀町八 有安社内
同 難波章二 小石川區原町一二六 備中館内

文學部

青山宣紀

國文學科

鷓塚壽夫 難波章二 重友精一

支那哲學科

小池定雄 加藤武夫

大學豫科

西本丈夫 井上暴文 岩野久
從野澄男 爲國香苗 平井次男

專門部

長鹽秀男 網島勝彦 塚本進
野崎茂登武 山本逸耶 俣野紀
三宅桂仙 原田米一 森永敬治
中山龜太郎 岩淺義正 伊久理作
原田全祐 仁木士弘 川上重太郎
山本博 阪本末止 阪本德二
宮木美好 森榮之助 藤井若輝
大森秋穂 福島秋太 岩佐一輝
西野武文 香山五六 内藤幹夫
間野茲一 後藤勇 清迫儀平治
貴船三郎 光島太郎 谷口一海
秋山光基 樋口武一 中山源市
石原廣文 堀口武夫 森一馬
山田五郎

倫理學東洋文學科

織田哲郎 石浦章 金光聖道
蘆田憲道

陸軍士官學校

本科

市坡信義 池上秀夫 伴豐
延原馨 福武和郎 藤原義夫
井雲井英雄 中島信男 水口照夫
西木勉一郎 小川愛水 奧山博
山内繁夫 光田稔 有利正
秋山克二 青木精一

豫科

池田萬壽治 山本龜 的場末男
福田毅 江見祐道 三村三郎
重見舜二 森下武 石原桃郎
池田保夫 生本五八 岡村正義
那須一郎 有坂博 木村正
森岡 德右衛門

大東文化學院

太田美津男 津高毅 中四泰輔

幹事 中村源一 小石川區關口町一 岩城方

國學院大學

幹事 美木行雄 市外中野町中野三四一 久木方

物理學校

幹事 津高毅 本郷區森川町一三二 鷓山館内

岡崎義子 金光實司之助 川上一郎
北村正 美木行雄 白岩直樹

西 隆志

青山學院

幹事 坂田義文 市外落合町下落合

坂田義文 加藤達雄 今井忠彦

高千穗高等商業學校

山成克人

巢鴨高等商業學校

吉田内次

第一高等學校

幹事 中島正弘 市外田圃調布五五〇

木村一治 中島正弘

海軍經理學校

中桐正志

第一臨時教員養成所

池上輝雄

東京水産講習所

近藤金之助

大正大學

瀧善成

東京音樂學校

山口喜久男

本會役員

(五十音順)

會長	花房太郎	島田茂
理事	犬丸鐵太郎	平松市藏
監事	道家齊一郎	荻野正孝
幹事	美土路昌一	荻野正孝
	畠山藏六	荻野正孝
	中央大學〇三浦武夫	萬城登
	廣戸威夫	中川哲夫
	東京外國語學校	池田光敏
	池田光敏	田中義男
	專修大學	加賀山潔
	二松學舍專門學校	玉置敬爾
	東京帝國大學	陶浪捷太
	高橋俊士	〇佐藤甲子郎
	荻野正二	大原總一郎
	慶應大學	安東喜四夫
	東京商科大學	中村四郎
	〇木山博精	守屋信

早稻田大學

〇淺尾寬一

近藤敏明

池田早苗

法政大學

吉田利貞

東京高等師範學校

植田重

東京美術學校

妹尾壽信

東京農業大學

古宮三郎

東京高等工藝學校

勝瀨壯一

日本大學

植野伯之

東京慈惠會醫科大學

岩本敏夫

昭和醫學專門學校

中井毅夫

日本醫科大學

佐藤正彦

東京高等工藝學校

勝瀨壯一

宮本誠夫

宮本健

森岡二郎

片岡曆夫

植木知之

山本巖

中島慎吾

堀弘之

美甘守

宮本誠夫

宮本健

勝瀨壯一

佐藤正彦

東京高等工藝學校

勝瀨壯一

宮本健

宮本誠夫

宮本健

佐藤正彦

東京高等工藝學校

勝瀨壯一

宮本健

宮本誠夫

宮本健

東洋大學	鶴塚	壽夫	難波	章二
大東文化學院	中村	源一		
東京工業大學	狩谷	淨太郎	石津	謙介
明治大學	田口	周造		
日本齒科醫學專門學校	森本	曠		
國學院大學	石戸	彰平	本田	明
青山學院	美木	行雄	小野	操
第一高等學校	坂田	義文		
東京醫學專門學校	中島	正弘		
東京音樂學校	市村	勢夫		
拓殖大學	山口	喜久夫		
物理學校	津高	毅毅		
鶴山館	堀高	正己		
精義塾	西下	止夫		

備中館 太田 浩
 兒島塾 宮田 本英



(氏信壽尾妹トツカ)

最後

◆本記念號の編輯に就いて學生委員の努力には敬服の外はありませぬ。

出来上つて見るとこんなものにそんなに苦勞したかと云はれるかも知れませんが實際やつてみると本當に大變な仕事であつたのです。

私は唯美土路様の驥尾に附して時々學生委員の仕事の結果に對し氣付いた點を指摘する位でしたが御覽の通り立派に出来ると何んだか嬉しさがこみ上げて来るやうです。

龜山 孝一

◆感謝 六月會報編輯委員を命ぜられ、微力な私達が、どうやら編輯を了ることが出来たのは、一に會長始め委員諸氏並に學生幹事諸兄、殊に編輯顧問美土路昌一、龜山孝一、有松昇諸氏の絶大なる御指導と御援助によることで、又理事大丸鐵太郎氏並に加宮貴一氏の御意見を拜承することの出来たこと、表装圖案について幹事妹尾壽信君に多大の御助力を得たことについては紙上を借りて厚く御禮申上げます。

次に御多忙中にも不拘御感想の事については再三ならず御迷惑を願ひ、前出の如き多數の玉稿を得たることは、編輯員一同この上の喜びは御座いませぬ。衷心感謝の意を表します。

◆おことわり 記念會報として恥づかしからぬものをと心掛けましたが、この程度のものしか出来ませんでした。學生の仕事と思召して御寛恕下さい。

◆御願ひ 名簿の事については、出来る限りの努力で、正確を期しましたが、若し間違等御氣付の點が御座いましたら御通知下されば幸甚です。

編輯係委員

三浦	武夫
陶浪	捷太
淺尾	寛一
佐藤	甲子郎
森安	二郎
廣戸	威夫
田中	義男
吉田	利貞

昭和五年十二月二十六日印刷
昭和五年十二月二十九日發行

非賣品

編輯兼發行人
東京市外上大崎二九一
花房太郎

印刷人
東京市本郷區眞砂町三六番地
龜谷良一

印刷所
東京市本郷區眞砂町三六番地
日東印刷株式會社

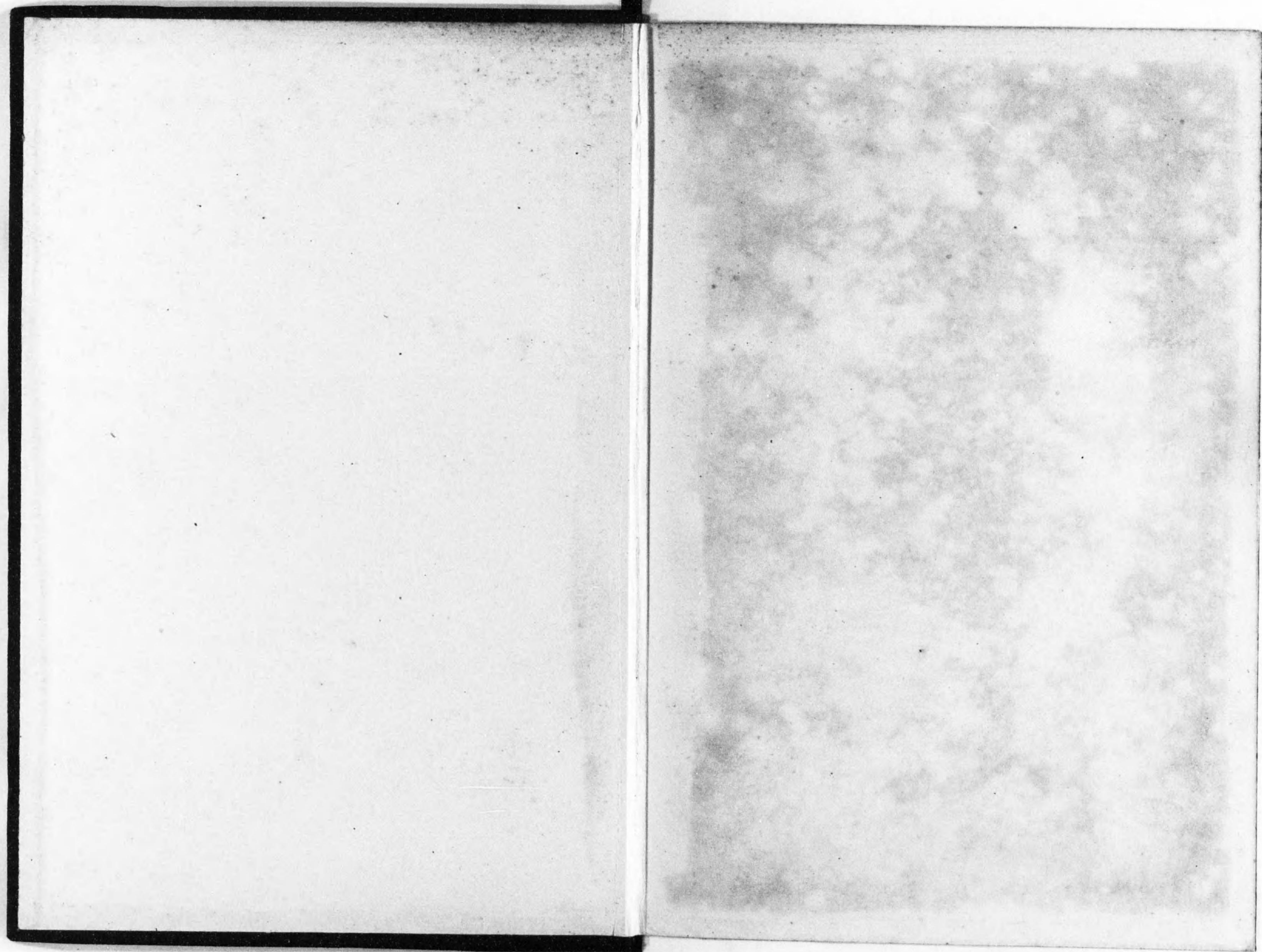
東京市外上大崎二九一花房太郎方

發行所
岡山縣青年會

事務所

東京市外上大崎二九一花房太郎方

岡山縣青年會假事務所



終